
fate • • •

-彼方-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

f a t e . . .

【Nコード】

N 7 7 1 7 D

【作者名】

- 彼方 -

【あらすじ】

魔法使いとの邂逅は、彼の人生を大きく狂わせた。そして、その忌まわしき運命の先に待ち受ける物語が、今始まる。

序章 believes

魔法が当たり前のように存在した時代。

科学を超越した数世紀が在った。

それは人類が歴史の積み重ねで造られた芸術品であり、憧憬を孕んだ眼差しが注がれた。

そして、さらに洗練された芸術を人は求めた。

研究。追及。そして強奪。

作りだせば、それは飛ぶように売れた。

ひとつの魔法で、大国が動く。

その結果、戦争が起きた。

見えない城壁に囲まれた陣内。

純粋な筋肉量は必要とせず、精神と精神のぶつかり合い。必要なモノは己の能力。

すなわち、魔法大戦なるもの。

世界を分断して行われたそれは凄まじいものだった。

男も女も子供も、魔法が使えるのであれば関係ない。力が必要としない。

溢れ出る力が森を焼き、爆発したエネルギーが大地を抉る。

北と南での世界大戦が終わる頃。世界の人口は激減した。
緑は茶に。

青は黒に。

そして、高温の赤が斑に残る広大な大地に、腐敗した臭いが立ち込めた。

人類は滅亡するかに思われた。

それを救ったのは皮肉にも、この戦争の引き金となったモノだった。

魔法により木々は甦り、空を埋め尽くす粉塵は浄化された。
世界は救われたのだ。

しかし、全てがうまくいったわけではない。

魔法とは精神力に依存する。

使う魔法の量、強さに比例して必要となる精神量は増加する。

すなわち、魔法というものにも限度がある。

1人。また1人と、力を使い果たした者が息を引き取る。
過労死に近いものだった。

ただ、それは必要な犠牲だったのだ。

それほどまでに大地は病んでいた。

ヒトが死ぬ度に豊かになる地球。

皮肉なものだ。

そして、最後の1人はこれまでの出来事を全て記録した。魔法という事実。それが起こした災厄。それら全てを。

のちに、世界は豊かな緑、豊富な水で溢れた。

その後世界には科学が溢れ、魔法は消え、平和な日々が続いた。

この物語は、そんな激動の時代とはかけ離れた日常に非日常が混ざりあう、運命の物語である。

序章 believes (後書き)

皆さんこんにちは。こんばんはの人もこんにちは。

何？横暴？

『世界は俺を中心に回ってる』を信条に生きている彼方と申します。このたび、とある小説に感動し『自分も小説を書こう！』と強く意気込んで半分勢いで投稿した小説のプロローグ部分を読んで頂いてありがとうございます。

プロローグだけなので書くこともないので、私のことを書きたいと思います。

実はこれが処女作ではございません。

初めて書いたのは、某人気狩りゲーム。

まあひどい出来になってしまいましたが・・・。

しかしそこでの経験、優しい作者様方によるアドバイス及び私の（わがままな）質問による返答により相当勉強になりました。

そんなことがあり今回こそは面白い小説書くぞーと意気込んでいます。

意気込んでいるだけじゃ何もできねーだろなどと言わずに、この物語の最後までお付き合いして頂けたら光荣です。それでは、また次の物語で。

Is the fate believed?

I believe.....

第1章 何度か目の朝 第1話

<ドッペルゲンガー>

ドッペルゲンガーとは、ドイツ語で「二重の出歩く者」という意味。英語のdoubleに相当する。自分と瓜二つの存在。元はドイツの伝説で、自分のドッペルゲンガーを見ると数日までに死ぬと言われている。

どのような姿であろうと、それが自分自身であると直感的に確信して疑わないモノである。

その日はなぜか暑くて目が覚めた。汗で衣服は肌にピタリと張り付き、気持ち悪いことこの上ない。

奇妙な病院から退院して何度目かの朝のことだ。

寝起きの悪さに顔をしかめつつ、足取り重く洗面所に向かう。

ひんやりとした水道水を手ですくい顔を洗う。

顔のベタつきと眠気をとったところで、昨日聞いた要件を思い出す。

「・・・また、呼び出したっけ」

ふと時計を見る。

現在、金曜日の昼下がり。カーテンを開けると、太陽が真上でギラギラと光っている。

本来ならば、学生である僕は友人たちと楽しくお昼ごはんを食べているはずだった。

どうやら寝過してしまったみたいだ。

翌日のこと。ある噂を耳にした。

「え？ドッペルゲンガー？」

「そう。聞いたこと無い？」

「全然。初耳」

ホームルーム前の僅かな自由時間。僕の前の席の友人の話しに僕は首を横に振る。

僕は興味はないけど、恐らく、僕の知る限りではこういうことに興味を持つ人が1人いる。

「知らないって、本当に？」

呆れた。とでも言いたいのか、ため息を吐いた僕の前の席の友人。

野球部員の鮎川浩司。
あやかわこうじ

坊主頭が野球部員であることを示している。

彼からそんな噂を聞いた。

「どうせ、出所も分からないようなただの噂でしょ？」

この手の噂はこの学校も絶えずに何かしら騒がれると思う。

トイレの花子さんを始め、人体模型が動き出すとか。

そういえば1週間前もそんな噂をしていたような気がして、さらに先日のアサカさんの要件と照らし合わせると嫌な予感がしてきた。

馬鹿にしたような僕の態度を見てか、コウジは少し真剣そうな顔をする。

「この噂、どうも本当らしいぜ？なんでも、あの池田まで見たらしい」

「池田？」

「学年主任の池田だよ。あいつ、この噂で学校の風紀が乱れてはいかん、とか言いだしてさ。探したんだって。それで次の日の朝、生徒が図書室に行くと、そこで倒れている池田を見つけたんだ」

クク、と思い出し笑いを堪えて言っているコウジ。

今の話はなんだかおかしい気がする。

「池田は図書室で倒れてたんでしょ？」

「ああ。そうだ」

「どうしてそれだけでドッペルゲンガーを見たって断言出来るわけ？」

ただ単に。という言い方もおかしいが、図書室で倒れただけなのかもしれない。それが僕の意見だった。

だけどコウジはそれを否定した。なんとというか、話がうまく通じてなくてイライラしているような気もした。

「だから、図書室だろ？ドッペルゲンガーは図書室で目撃されることが多いんだよ。あれ？この話してない？」

僕は頷いた。

そんな噂自体を初めて聞いたというのに、そんなこと知っているわけがない。

「池田はいないって言い張ってるけど、池田を見つけたのが生徒だったのは運がなかったな。図書室で倒れているなんて、いかにも目撃して気絶しましたって言うてるようなもんじゃん？」

たったそれだけでドッペルゲンガーを見た結びつけてしまうのも変だが、どうやらそれほどまでに有名な噂らしい。

「他にもトイレとか屋上とか言う奴もいるけど、図書室っていうのが一番多い。・・・なあドッペルゲンガーって見ると何かあるのか？」

そんな質問に僕は、さあ、などと曖昧気味に答えた。そこで担任が教室に入ってきてHRが始まった。

僕自身はそんなに興味はないが、恐らくあの人なら食い付くだろう。良い土産話が出来たかな。なんて、僕はそんな呑気なことを考えていた。

「来たか。少し早かったな」

事務所に着くとアサカさんが椅子に座ってキーボードをカタカタと叩いていた。

タバコの煙がユラユラと浮かび上がる。

ここは作家、あさかいすみ浅香泉が住むアパート。

近くにコンビニと駅があり、場所としてはまあまあな立地条件だ。

I県西部の県境に位置するここ、Y市は人口約5千人。

高層ビルが立ち並ぶほど都会でもなく、見渡す限り畑、というわけでもない、なんとも中途半端な田舎町。

「お前の通ってる学校、昨夜何者かが侵入したそうだな」

唐突に。

僕がキーボードの横にコーヒーを置くのと同時にアサ力さんがそんなことを言った。

「侵入者？そんなの聞いてませんけど。・・・誰に聞いたんですか？」

ちよつとな、と言いながら僕の差し出したコーヒーを口に含む。アサ力さんはブラックしか飲まない。つい最近まではそう思っていたが、ごく稀に砂糖とミルクを大量に注文してくる。

甘い物が好きという女性らしさは持ち合わせているらしい。コーヒーでそんなことをいうのもまた違う気がするけど。

「それ、最後のコーヒーです。またあとで買っておいで下さい」

「またか。そういうのは秘書の仕事じゃないのか？」

「僕はコーヒー飲みませんから、買う必要はないです。お金を頂けるのなら買ってきますけど、自腹となると考えものです」

「お使いはすると？」

「ええ。そのくらいは」

僕は学生の身だ。サイフの中身はどんなときも寂しいに決まっている。

ガチャリとノブを回す音がした。

次いで扉を開ける、軋んだ音が響いた。

僕が事務所に到着してから数分後、カエデが扉を開けた。

アサカさんが何かを言う前にカエデは口を開いた。

「言っておくけど、侵入者がいたなんて聞いたことないからな」

溜息混じりに、コートを脱ぎながら言う。

はい、と僕が冷蔵庫から缶コーヒーを取り出し、渡すと顔をしかめた。

インスタントコーヒーが無いため、冷蔵庫にあった冷めたコーヒーだ。

「そういえば、侵入者とは関係ないと思いますけど、今僕らの学校でドッペルゲンガーが出るって噂になってるんですよ」

昨日聞いた話した。

「それは興味深い……。マスミは見たのか？」

アサカさんはクルリとイスを回転させ、身を乗り出す。

「いえ、噂を聞いただけで実際には見ていませんけど。見た人は死ぬらしいじゃないですか」

ドッペルゲンガーは有名な都市伝説だ。これはいつかテレビで見た情報だ。

そんな僕にアサカさんは不適な笑みを漏らす。

「……死人が出たのか？」

「いえ、出てません。だから、この噂はウソってことですね」

「順序が逆だ。バカ者。見ると死ぬんじゃない。“死ぬから”見なんだ。寿命が尽きる寸前の証とも言われてな。元はドイツ語で『生きている人間の行き写し』を意味するそうだ。単純な和訳では『二重の歩く者』というらしいがね」

勝ち誇ったような顔で説明してくれる。

「それで、そのドッペルゲンガーはどこで目撃されるんだ？」

「なんでも図書室が多いらしいですよ。他はバラバラです。トイレとか、屋上とか」

「ドッペルゲンガーは本人に関係ある場所に出現する。図書室が多いっていうのは少しおかしいな」

コーヒークップを持ち上げて啜る。そろそろ冷めたと思うのだが、アサカさんはすぐにカップから口を離れた。どうやらアサカさんは猫舌らしい。

「アサカ。そんなバカな話しはいいから、今日呼び出した理由を教えてくださいよ」

つまらなそうに話を聞いていたカエデが缶コーヒーを持ちながらアサカさんの話を遮った。

「そうだったな。今日の深夜0時にまたここに来い」

唐突に。

またそんなことを言う。

一度呼び出しておいてまた後で来い。しかも深夜0時。

「一応目立たない服装で来いよ。お前ら学生なんだからな。・・・さて、私はこれからやることがある。さあ分ったら早く帰れ」

シッシッ、という感じで手を振る。

アサカさんは僕とカエデを事務所から追い出すと、扉の隙間から洩れ出ていた光が消えた。

外はすっかり暗くなっていて、時計の針はもう夕飯の時間を指していた。

アサカさんの事務所に着いた。2階建の見た目はいたって普通のオンボロアパート。いつもは白に近いベージュ色の壁に黒い手すりが目に入るが、今は真っ暗で色など識別出来ない。

黒いはずの階段を使って2階へと上がる。

扉を開けると同時に、ギーっという音があたりに響く。

「お前たちか。じゃあ行くか」

奥からそう声がして、アサカさんがリュックを持って歩いてきた。

何も言っていないのに気が付いたのは扉が軋んだからだと思う。

「それで、どこに行くんですか？」

「ついてくれば分かる」

早く来い、と言い残しアパートの階段をカンカンと音を立てながら降りて行った。

事務所を出てから十分ほど歩くと、僕とカエデが通っている学校の前まで来た。

「ここ、僕らの学校ですよね？」

そうだ、と言い門を超えて敷地内に侵入したアサカさんとカエデ。スタスタと比較的軽い足取りで敷地内を歩く。

「目的地はここだ」

そんなことを吐き捨てるように言うと、昇降口に辿り着いた。

アサカさんはおもむろにポケットから銀色の長細いギザギザしたものを取り出した。

「あの・・・それは？」

「合鍵だ」

見て分からののか、と当然のように言うけど、分かるんだけど、理解が出来ない僕のことを分かってほしい。

カチャリという音が木霊した。

「アサカさん、こういうのって不法侵入っていうんじゃないんですか？」

僕とカエデは上履きを掃き、アサカさんはスリッパを履いている。ペタンペタンという音が何とも不気味だ。

「知人に頼まれてな。ちょっとこの学校はおかしいそうだ」

ポケットからタバコを取り出し、火をつけながら言う。真面目な顔をしていることから、これは本当らしい。僕は火災報知機とかが煙を感知して鳴らないのか、とか侵入者用赤外線センサーみたいなもので警報が鳴って警察に自動通報されないのか、などと心配していた。あと、頼んだ知人が普通の人であることも。

「アサカ。それは俺も薄々感じてた」

やはりか、と言いタバコの煙を吐き出す。それが幽霊のようにユラユラと空に昇って行く。

「さっきの門にも仕掛けがあった。では……まあ中の下といったところか」

アサカさんは火をつけたばかりのタバコを愛用の、タバコを拡大したような円柱状の携帯灰皿に押し込む。

二人の会話を聞きながら、僕はなぜかカエデと会ったときのことを思い出していた。

僕の記憶が正しければ、たしか二年か三年前のことだった筈だ。

何度か目の朝 第2話

雨の音はなんとなく懐かしい気がした。

その日の夕方は、1日中降り続いた雨が嘘のように晴れた。

綺麗な夕日が顔をだした。

そして、それが必然だったかのように、学校に忘れものを取りに行くことを諦めかけていた少年がいた。

それが目にした物。それは不思議な転校生との、運命的な出会いとも言える一日だった。

「え？転校生？」

「そう。それも女子だってよ」

朝の日差しを背中に受けながら隣で話す友人たちの会話が聞えてきた。

会話に入ろうとしたが、なんとなく止めておいた。

盗み聞きだが、この際許してもらうことにしよう。

僕は頭の中でそんなことを思いながら会話に耳を傾けた。

「どんな子かなあ。可愛い子かな？」

「さあね。でも、いじめられて転校してきたって可能性もあるし」

「うわ。それはヤだな」

「まあ見た目で決め付けたら悪いからなあ。どっちにしろ、あんまり期待し過ぎないでおくのがいいかもな」

その言葉を最後に、始業のチャイムが鳴る。

ガタガタとみんな席に着き始める。少しコソコソと話す声を除けば、実に静かな朝だ。

数分も経つと、ガラガラ、と前の扉が開きジャージ姿のクラスの担任兼体育教師兼サッカー部顧問が入って来た。

話し内容は予想通り転校生が来ると言う連絡が大部分で、あとは皆軽く聞き流して、今か今かと転校生の登場を心待ちにしている。

どうぞ、と言うと、静かに扉が開いた。

おおー。と男子から歓声があがった。

絹のような長めの頭髮がまるで活き人形のように、顔、つまり容姿は、少しばかり凛々しく、大人びた、可愛いというよりは綺麗という印象だった。

桐生楓です。よろしく、と、自己紹介を単発に済ませた。

僕の印象的には、静かな子。だった。

ちなみに、彼女の席は僕の後ろになった。

「桐生さんは、どうして転校してきたの？」
「・・・別に」

「ねえ、前の学校でソフト部だったんでしょ？ウチらソフト部なんだ。桐生さんも入らない？」
「・・・いい」

桐生楓が転校してきて数週間。分かったことがたくさんある。

まず、口数が少ない。

会話のキャッチボールは、どうやら桐生さんの場合ストライクゾーンが狭いようで、文字数にしてどんなに多くても10を超えることはない。別に。いい。どうぞ。ええ。こんな感じ。表情もなく、無愛想というよりか、上品な人というよりは、無愛想な人というイメージがみんなに浸透していった。

もう一つ。授業中にノートを取らない。授業中はつまらなそうに教

科書を開いてノートは置いてあるだけで、ぼーっと窓の外を眺めているらしい。

つまらないのか。それともそれ以外に何か思っていることがあるのかと思ったが、なにぶん僕の真後ろなので、授業中どのようにしているかなんてほとんど見る事が出来ない。

そんなある日。暑い夏が顔を見せる少し前。時々暑くも過ぎ易い季節の到来。

視覚的な変化と言えば生徒の着るワイシャツが数人、長袖から半袖に変わったくらいで、その日は桐生楓が転校してきてちょうど一か月半が経過したころだった。

テストが近いということもあってか、学校内では、一部の生徒から、ほんの少しピリピリした空気が漂っていた。

席替えは半年に一回。という担任教師の訓えによって席は未だに窓際前方トップ。

そして後ろに桐生楓の姿が在った。

『・・・暑い』

窓際の盲点というか、直接太陽が照りつけるこの席にはいささか厳しい季節が到来しようとしていた。

正直、今も相当厳しいものだが、あと1か月もすれば、今の暑さなんか蚊に刺される程度にしか感じないくらいの暑さがやってくる。いや、もうすでに足音は聞こえて、すぐそこに迫っていた。

そんな暑さの中、気を紛らわすために僕は、桐生楓に話しかけていた。思えば、初めてカエデに話しかけたのはこのときだったのかもしれない。そして、僕の頭は暑さでやられていたのかもしれない。

「桐生さん、髪、切らないの？」

いつもなら、『何で？』などという答えが返ってくるに違いない。いや、答えが返ってくるだけマシだ。

最近は無視することもしばしば見受けられるようになった。

この前はなんかは先生の質問に答えず職員室に呼び出されていたのを僕は目撃していた。

しかし、そのあとの展開に僕の頭の回転は追いつかなくなった。

「髪を伸ばすことには意味があつて、魔力を溜めておくのに使える。まあ俺はそんな使い方はしないけどな。サムソンって知ってるか？」

「……………え？」

言葉の意味を考える。

「え、つと……旧約聖書の登場人物だっけ？」

なんだ、知ってるんじゃないか、と。なんだか嬉しそうな彼女。

初めて会話のキャッチボールが成立した気がする。

夏休みに入る約一か月前。夏休みが一番待ち遠しくなるこの時期。僕は学校への道のりを歩いていた。

僕の家は学校からそんなに離れていない。そのため学校には歩いて登校している。

今日も、そんないつもの朝と変わりなく歩く。

ただ一つ違うのは、現在の時刻だけだった。

野球部の掛声が校舎に木霊する。そろそろ暗くなるはずだけど、まだ終わらせる気はないのだろうか。

僕は部活動に入っていないため、声を聞くだけで新鮮な気分だ。

その日、僕は1週間後に控えた期末テストに備えて勉強をしようと

したとき、ノートを学校に忘れたのを思い出した。

朝から雨が降っていて、それは学校の授業が終わってから、僕が家に着いた時も降っていた。

それなのに、忘れものに気が付いたときにはやんでいた。家に着いてからわずか30分程度のことだった。

ゆっくりとした足取りで門をくぐる。

僕は昇降口から靴を脱いで教室に向かった。誰もいない校舎に自分の足音が響く。

いつもは騒がしい学校も、今はまるで異世界に迷い込んだ錯覚を起してしまいそうなくらい静かだ。

静まり返った学校の中を歩いて、僕は自分の教室のある三階に向かった。

所々コンクリートはひび割れ、白いペンキが剥がれて岩の塊がむき出しになっているところが何か所もある。

外から見れば割と綺麗な学校なのだろうけど、内から見れば古い学校だ。

そんなことを考えながら歩いていると、教室の扉が見えた。

クリーム色の長方形。レールに案内され左右に動く、どこにでもあるありふれた引き戸。

それに手を掛けたとき、体が跳ねるくらい驚いた。

立ち並ぶ机の影を作り出しているその中に、人型の影があった。

まぎれもなく、桐生楓だった。

まぶしそうに机に座って窓の外の夕日を眺めているカエデ。

とりあえず、ひとつ深呼吸をして、落ち着いて教室の扉をあける。

扉を開けた音に彼女は反応した。

驚いたようにこちらを振り向く。

「やあ、どうしたの？こんな時間に」

「・・・そっちこそ、こんな場所になんの用？」

少し警戒したようにこちらを睨む。警戒というよりは不思議な物を見るような、そんな感じかもしれない。

「僕は忘れ物を取りに来ただけ」

そう言いながら僕は机の中を物色する。目当ての物はすぐに見つかった。これ、と言いながら黄色い色をした大学ノートのカエデに見せる。

「桐生さんはどうしたの？」

彼女はぶっきらぼうに、別に、とだけ答える。

僕はいつものことだと思い、そのまま教室を去ろうとした。そのとき、カエデがふっと顔を上げた。

鋭い目つきであたりを見回す。そして、ある一点にカエデの視線が止まった。

それは掃除用具のロッカーだった。どこにでもあるありふれた直方体。乱暴に扱われ所々へこんでいたりするプレス加工の板金で出来た物。

そこに早歩きで近づいて行った。

ロッカーの前まで来ると、手をそつと当てる。

バゴン！

ロッカーから大きな音がした。

車同士が衝突したくらいの大きな音。

僕は反射的に耳を塞いだ。

ロッカーが壊れたのかと思った。だが、何も変わっていない。

もちろん職員室にも聞こえているはずだった。それなのに教師が駆け付ける様子がない。

外から運動部の声が先ほどと変わりなく響く。

この教室が他の場所から切り離されたように、回りは無反応である。

まるで、この場では何も起きなかったように。

教室内はシンと、また静まり返る。なんだか僕だけ取り残されたようだ。

カエデはそのまま自分の机の横に掛けてあるバッグを持ち、何事もなかったかのように帰ろうとしている。

「ねえ、ちょっと!」

僕は怒鳴るようにカエデを引きとめた。精一杯の声を発したつもりだったのに、上手く声が出なかった。

「なんだ?」

何事もなかったように、カエデの声は冷静そのものだった。

体を半分こちらに向け、僕の目をじつと見る。

何度か目の朝 第3話

「ここだな」

そんなアサカさんの声で我に返った。パチっという音とともに部屋の電気がつく。

僕は暗さに慣れていたため、眩しくて目を開けられなかった。

「ここは・・・図書室ですね」

そこは生徒が使う、何冊もの本が並んだ図書室だった。

入って左側に本を貸し出し用のカードなどが置かれていて、図書館の受付のようになっていた。

中心に大きなテーブルが四つ置かれていて、特に変わったところはない。

生物学から文学。雑誌、漫画までが揃っている。ほとんど読まれることのない広辞苑などはホコリが少し被っていたりする。僕は今までに数回しか入ったことがない。入ったとしても、友達とお喋りを楽しむくらいだ。

「カエデ、分かるか？」

カエデは反応しない。ただ教室の中をじっと見ている。

「あの、僕は帰っても？もしもこの前のようなことが起きたら・・・」

「ダメだ」

そう言い残すと、リュックを背負い直して前に進む。

室内のほぼ中心まで来たとき、ウネウネと良く分らない物体が床から出てきた。

数秒後、寒天よろしく、半透明の物体がアサカさんの前に立ちふさがるように人型のモノが現れた。

それは徐々に形を変えていき、色を付け、十秒経たないうちに、それはアサカさんに似たモノ。

それどころかアサカさん本人となんら変わりのない物体に変化した。

身長はピタリ。同じ服装に同じリュック。ただ一つ違うところは、平面的で立体感が欠けている。

「・・・これは？」

目の前に現れた不思議な物体。僕はこれを見たわけじゃないけど、何となくひっかかる。

見たことあるようで無い。デジャブって言うんだっけ？

「多分、お前らの言っているドッペルゲンガーとはこのことだろう」
「あ、そうか。・・・これがですか？！」

ああ、と頷く声を出さなければどちらがアサカさんなのかが分からない。

瓜二つとはまさにこのことだと僕は思った。

「これは多分式神を応用したものだろう」

アトマとも言ったがね、とアサカさんはわけの分らないことを言う。

「人間が近付くと具現化するようになっていようだな。まあ人には害がないようだから、その点においてはドッペルゲンガーというのも領ける」

ドッペルゲンガーは何の動きも示さない。それをアサカさんは舐めるようにして観察する。

「じゃあさっさと消して帰るか」

そう言うと、アサカさんはリュックから札を一枚取り出し、人差し指と中指で挟む。これから何かが起きますよ、というかのようなその立ち姿。

「……………」

と、数秒見つめただけで、ふう、とため息をつく。

「どうしたんですか？」

「いや、こいつなかなか厄介だよ」

腕を組んでふむ、となにやら考え込んでいる。

「・・・こいつはな、術者を音写して、それを具現化して解放する」
「つまり、幻想士というわけか」
「そうだ。まったく、めんどろな事になったよ」

僕が話しの9割を理解していないということをこの人たちは理解してくれているんだろうか。

良く分らない、という感じで眉間にシワを寄せている僕にアサカさんは気が付いたようだ。

「・・・つまり、こいつは鏡のようなものだ。人の魔力を感知し、それを構成している肉体を算出し、可視光を屈折させることによってそう見せてるんだ。だからと言って触れないわけではない。魔力の壁、とでも言うべきか」

「ようするに、アサカさんがもう1人いるようなものですか？」

「そうだ。それに、私が何かすればこいつも同じことをする。魔力の波が乱れれば、それに伴った行動を起こす。魔力の動きだけは人間の力じゃどうすることも出来ないからな。・・・見ている」

アサカさんはドッペルゲンガーへと向き直る。

すると、右の拳を差し出す。

軽く振り上げて、軽く振り下ろす。

その手は拳では無く、開かれた掌。

ようするにジャンケンをしたということになる。

掛声も無しにやったにも関わらず、ドッペルゲンガーはアサカさん

と同時に相子。

「な？」

よく理解できました。

そんな僕を余所目にアサカさんは2枚の札を取り出した。

そして何か呟き出した。

正直僕には、ブツブツとしか聞き取れなかった。

2人が同時に喋ってる感じ。

そして、図書室が光に包まれた。
爆発に似た光だったような気がする。

それも一瞬で、すぐに消えた。

気がつくと、ドッペルゲンガーは跡形もなく消えていた。

「よし、今回は余計に請求しよう。明日の夜、焼き肉でも行くか？」

そんなことを言うと、アサカさんはとっとと図書室を出て行ってしまった。

第2章 狩獵日記 第1話

その日は雨が降っていた。外からのザーっという音がひっきりなしに聞こえてくる。ジメジメとした室内は居心地が悪いことこの上ない。

桐生楓は一人考え事にふけっていた。

「彼方眞澄、か。」

何の因縁か、もしくは運命か。そんなことはどうでもいい。問題はなぜあの中に入ってこれたのか。

『張っておくから、まあ誰にも見られることはないだろう』

確かにアサカはそう言った。

入る時も確かに結界は在った。

微弱で、薄く、確かな効果をもたらしていた。

『この世は姿も本質も常に流動変化し、一瞬といえども存在は同一性を保持することが出来ない。ならばその場を静止させればいい。諸行は無常であってこれは生滅の法である、というのを逆転させるわけだからな。外界と遮断されるのと限りなく近いはずだ』

『そんなことが可能なのか？そんなもの、時間を止めるようなものじゃないか』

『可能だ。』

時計の電池が切れて、針が動かなくなっただとしても実際、現実^{いま}は動

いているだろう？止まった時計はまたネジを巻けばいいんだよ』

そんな会話をしたのを思い出した。

じゃあなぜあの男は入って来られたんだという問題に戻る。

また振り出した。さつきからこの調子。

もう何度目だろう。

『何故入れたのか』

俺は雨の降る中、浅香泉の事務所を目指す。

相変わらず雨は降り続いている。頭を冷やすにはもってこいだ。

「ほう、彼方眞澄か。面白いじゃないか」

アサカの事務所。相変わらずここは気に食わない。

体の内部がミキサーにかけられるようにグチャグチャにミンチにされている気分だ。

「あいつからは何も感じられなかった」

「何も？」

「ああ」

「まったく？」

「まったくゼロだ。プラスでもなければマイナスでもない」

そうか、とアサカは興味があると言いたげな顔をしている。

そして急に何かを探すようにポケットを叩きだした。

「タバコが切れた。買ってくる」

そう言い残して事務所から出て行った。

俺はそのあいだソファに腰掛けて、テレビでも見ながら帰りを待つことにする。

四角い箱から音声が流れる。

最近はどこを見ても例の殺人事件の話ばかり。それもここI県Y市での出来事。

残虐なのは知らないが、話題性は十二分にあるんだろう。

獣が狩りをするように殺すと言われているから。

「プラスでもなければマイナスでもない、か」

浅香泉はアパートから歩いて5分のコンビニにいた。

面白いことを言うじゃないか、と呟く声は誰にも聞こえない。その理由は店内にはレジで待機している店員しかいないからだ。

ほんのり暖かい店内は考えをまとめるのに最高の環境だ、と浅香泉

はこの場所を気に入っている。

『プラスでもマイナスでもない』

イコール零。無だということだ。無とは物事が存在しないこと。人間である以上存在を否定出来ない。微量でもプラス。あるいはマイナスに偏る。

マイナスに偏った人物は偉人、異人、変人などと呼ばれることが多い。

しかし、どんな達人でも、変人でも自分の存在を無くすことなど出来やしない。確かに自分は在るからだ。絶対無になどなりえない。概念としての無はあっても現実としての無は無として捉えることが出来ない。無いものをどうやって定義する？ “これは無だ” と言っている時点で “これ” は有の性格を帯びる。マイナスだって量を持つ点でやはり有の一形態だ。

考えに耽る自分を現実に戻す。ついでに、とスナック菓子の袋を取る。

支払いを済ませ、背中で店員の声を受ける。自動ドアのガーっという音が店内に響いた。

風が吹いた。少し肌寒い乾いた風が目の前を駆け抜けていく。それに浅香泉は何かを感じ取っていた。

コンビニを出てすぐ右へと歩きだした。事務所とは反対の方向に。

狩獵日記 第2話

ゴキン。

鮮^{きれい}な音があたり響く。

何も無い部屋に、鮮やかな朱色の液体が流れる。それはまるで秋に川を流れる紅葉のようにゆつくりと、確実に死の足跡を付けながら。

神々しい風の色。震える夜に相応しい音色^{こえ}が閑^{しずか}に響きわたる。

「・・・遅い」

「まあそう言っな。仕事帰りなんだから、少しは労わってくれ」

「仕事？今日は無い筈だろ？」

「いや、急遽入った。というか入れた。カエデ、ニュース、見てたか？」

見ていた、と小さく、呟くように言った。

ニュース、とはまさかあのことでないだろうか。

「狩猟殺人なんて、良いネーミングだと思わないか？」

「思わない。ただの殺人じゃないか」

なんていうか、これはとうの前から予測出来ていた結果だった。

長年一緒にいて、どんなことに興味を持つか、なんて、息をするより簡単だ。

アサカなんて特に。

「それで、仕事の内容は？って聞くまでもないな」

分かりやすい。

話しの流れからして、十中八九あのニュースなワケで。

「いや。実体のほうは確認済み。思う存分暴れてくるといい」

さすがに、仕事に関しては行動が早い。

「暴れられるほどの相手か？」

「それなりに。それと力エデ。今回は、アレ無し」

「やっぱり。大したことない相手じゃなか」

「そう言うな。人間相手に本気でやれるなんて、この先恐らく殆どないぞ」

「形が人間なだけであって、中身は違うんだろ？」

「まあその通りだが、何せエキスパート仕様。ほぼ完璧だ」

溜息ひとつ。

「でも、獣とやれるのも、滅多にない。そう考えればいい。という

か考える」

いや、正直、そんな中途半端なのとやってもウンザリするだけだ。

そうは言っても、心を抑えることが出来ないというのは紛れもない、隠しようのない事実でもあったりする。

狩猟日記 第3話

私は獣。

私は、あなたを殺したい。

「・・・へ？」

僕は現在テレビを見ながら一週間後に控えたテストに備えて猛勉強中。

その合間の息抜き。

テレビのチャンネルを変えようとしたとき、聞き慣れた言葉が耳に入った。

『11日朝、I県Y市の民家で、「人が死んでいる」との通報がありました。死亡したのは伊崎豊さん（35）とその妻、有紀さん（33）とその子供の隼太くん（5）。遺体には巨大な爪で引っ掻いたような傷

が無数にあり、死因は失血死とみられています。警察はこれを殺人事件とみて捜査を進めています。それではまた、情報が入り次第お伝えします。』

白いコートを着た女性リポーターが一礼して、画面が切り替わる。

I県Y市は僕の住んでいる町。そして、テレビには見覚えのある建物が背景と化していた。

恐怖とか、不安とか、そんな気持ちはなかった。ただ、へえーそうなんだ、程度で。

だから僕はこの事件を他人ごとのように考えてた。

一昨日までは。

3日連続で続いた、Y市の殺人事件。

さすがに3日続けば関連性について気がついてもいい頃だろう。

狩猟殺人なんて、小説のサブタイトルめいた名前を付けるというのも、センスとしてどうなのかと思ってしまう。

まあ実際そんなことを考える余裕もないほど、このときの僕は混乱していたのも事実のひとつだった。

狩獵日記 第4話

「ちえ。部活が出来ないなんて、何しに学校来てるのか分からないじゃんか」

「でも、仕方ないんじゃない？一応“緊急時”なんだしさ」

「あの人、部活やってないお前には分かんないかもしれないけど、休むとその分腕が鈍るっていうか、なんて言うんだろう……。ともかく、休みすぎるとダメなんだよ」

「へえ」

確かに部活に入っていない僕には到底解りっこないことだ、なんて思いついながら、何気に羨ましかったりもした。

Y市で起きた連続殺人事件が発生してから、そろそろ1か月が経とうとしていた頃。

学校側は部活動の活動を禁止したのだ。

被害者は、このペースだと2桁に突入してしまいそうな勢いで出ている。

対して犯人の情報。事件解決に結びつくような証拠は未だに出していない。

この所、暗くなるとよく警察が巡回しているけど、その甲斐空しく事件は起き続けている。

と、そんな物騒な話しが学校中に広まる中、部活が出来ないと悔やんでいるのは、隣にいる裕人^{ひとこ}だけではないはずだ。

「どうせ、俺らが襲われるわけがないんだからさ。正直、関係ない話しだよな。っと、それは言いすぎか」

「まあね。僕らが襲われる確率なんて、無いに等しいだろうね」

そんなことを話しているうちに、下校中の僕らはお互いの自宅付近に着いた。

僕と裕人の家は、道路を挟んで向かいの家の隣。

裕人と別れたあと。と言っても、1分と経たないうちにだが、雨が降ってきた。

僕は急いで家に入る。

テレビをつけると、やはりあの事件のニュースだった。

『正直、関係ない話しだよな』

そんな裕人の言葉を思い返す。

それは、正直言って、僕の本心でもあった。

自分の住む街で起こっているというのに、どうにも他人事のように思ってしまう。

実際、自分の身に起こっていない点、他人事には変わらないのだからうけど、だからと言って事件を傍観出来る立場でもないことに、僕は気がついていなかった。

狩獵日記 第5話

日の光で目を覚ました。

ぼんやりとした意識のまま立ち上がる。周囲に人影はない。

場所はビルの屋上なので、それは当然のこと。

ただ、朝の風が彼女の周りを飛び交う。

「は、あ・・・」

苦しげに漏らした吐息は白く色づき、周囲との温度差を浮き彫りにしている。

苦しげ、と言っても、苦しいのではない。

そして、何かに駆り立てられるように走り出した。

早朝、人は疎らに在った。

さて、どうしてくれようか。

まあ、まずは物色してからでも遅くはない筈。

ビルの屋上からの眺めは壮観だ。なんて、誰が決めたのだろう。

今現在のビルの屋上からの眺めは、面白いものなど何も無い。

むしろ何も無さ過ぎてつまらない。

その何も無いさまを見て人は、壮観だなんて分かってもないクセして何かを悟ったような事を言うのだろうか。

それとは逆に、何も無いからこそ、それこそが壮観の証で、人は素晴らしいと感ずることが出来るのか。

まあそんなもの、人間で無い私には関係の無い話だ。

と、不意に、ある2人の男女が目に着いた。

はるか30メートル下の世界に私は。

跳んだ。

気が付けば、私の体には、赤い液体が塗りたぐられていた。

まるで、ペンキをバケツが何かに入れて、乱暴にかけられたようだった。

次いで、鼻孔に、心地のいい命の臭いが纏わりついた。

一瞬意識が飛ぶ気がして、それはまるでシンナーを吸った直後の快楽に似ていた。

目の前には、何やら動かぬ肉塊が、不思議な格好で横たわっていた。

「ああ、私がやったんだっけ」

赤い液体は、そこに横たわる物の血液で、私は返り血を浴びていた。鼻孔を突くのは、蛆うじが湧いて出そうなほどの死臭で、私はそれに酔っていた。

バキン、という、鮮キレイな音が鼓膜に焼きついて離れない。

恐らく、女の方の首を搦じった際の音か。

その音は、何も無い屋上に比べ、はるかに壮観だと思えるもので、
限り無く死に近い、というそのままの意味が、より一層心地よいと
感じられた。

狩獵日記 第6話

「7人目？」

「そう。あくまで分かっているものは7人だというだけで、実際にはもっと多いかもしれんが、まあそれはないだろう」

巷を騒がせている殺人事件の被害者は、昨日で7人目に達したと、ニュースでは伝えているらしい。

アサカ曰く、6、7人目の被害者は、死体の様があまりにも酷く、発見直後は、付近のビルを封鎖。さらに四方を青色のビニールシートで隠すという徹底ぶりで、外からはまったく様子を窺えないようになっていらしく、数分後に撤去された後も、夥しい血痕の量から、その死体の異様さを物語っているらしい。

「しかし、どのニュースもこの事件のことばかり放送しているんだが。知らなかったのか？」

「興味ない」

正直、世間がばか騒ぎするのは、この事件が例を見ないほど特異なものだとか、話題性に富んでいるからだとか、そんなものまったく関係の無い話した。

「ただ単に、世間が騒ぎたいから騒いでいるだけじゃないか」

こんな残虐なだけの事件、1世紀もすれば珍しいものでもなんでもなくなるのは目に見えている。

「そうか。じゃあカエデ好みの話をしてやろう」

「何だ」

その反応に、目の前の魔法使いは、ニヤリと薄い笑みを浮かべた。

不覚にも反応した手前、聞かざるを得ないのだが、別に聞きたくないわけでもない。

暇つぶしくらいにはなるだろう。

『速報です。今朝6時頃、I県南部で若い男女の遺体が発見されました。通報したのはビルの清掃員の男性で（36）で、発見当時、男性の遺体は頭から鋭利で巨大な刃物で切り裂かれたような状態で発見されており、女性の遺体は首の骨を捻じ曲げられたような状態

で、どちらも異様な遺体状況だったということです。警察はこれを殺人事件を断定し、これまでの事件と同一犯ではないかを見て、特別捜査本部を設置し調べを進めております。』

捻じ曲げられた、という表現は不適切ではないか、などと思う前に、ブツン、とテレビの電源を落とす。

正直、ブレーカーごと家の電気をシャットダウンしたくなるようなニュースの内容に、少々気分を害した。

「唯一バラエティを放送していた番組だと思ったんだけどなあ・・・」

最悪だ、なんて、誰もいないのに愚痴ってしまうほど、僕は憂鬱な気分だった。

最近、ニュースのみならず、普段放映している番組を潰して、この事件の解説やらなにやらで、あまり興味のない僕でもこの事件の内容は覚えてしまっている。

本当だったら、こんな事件の内容より、テスト前の学生である僕は、方程式の1つでも覚えたいほうが得なのだが、毎日みているこの事件に、無理やり脳に刷り込まれている感は否めない。

そんな、最近巷を騒がしている事件の概要は、これまでに殺害された人数と、その死因以外分かっていないらしい。

狩獵日記 第7話

200X年。13日の金曜日。1か月ほど前から発生していた殺人事件がこの日幕を閉じる。

とある民家で、遺体として発見されたのは、ひとりの少女だった。

発見当初は被害者として扱われ、メディアもそのように報じていた。しかし、現場検証を繰り返すうちに徐々にそれが間違いだということに気がついた。

犯人は、民家で死亡していた女子高校生と判明。

少女を犯人と結びつける物的証拠が揃っているだけで、動機、殺害方法は何一つ分からず、結局この事件は迷宮入りを果たしてしまう。

とある一軒家。

弓を担いだ少女は、湿ったコンクリートの上を歩いていた。

彼女の名前は、『桐生楓』。

彼女はこの状況。この先にあるものを楽しんでいた。

自然と気持も高ぶる。

アスリートのように、最高の局面で、最高のテンションに持っていてくことなど、彼女にとっては容易いことで、そのテンションを常に保つこともまた、彼女にしてみれば当然のことのようだった。

震えそうになる気分を静かに落ち着かせる。

しかし、震えは止まらなかった。

寒いわけではなく、武者震いに似た震えだが、やはり微妙に違いがあった。

目標は、1か月で7人を殺した獣1匹。

巷を騒がす件の犯人くだんだという。

最初はアサカの勝手な憶測だと思われていたが、さっきので分かった。

さっきから降る雨は、見事な程に視界を濁す。

震える夜に、閑かな足音がゆっくりとした調子で聞こえる。

確かな感覚を確かめつつ、ノブに触れた手に力を加える。

ガチャリ。

鍵はかかっておらず、安易に入ることが出来た。

狩獵日記 第8話

「ほら、置いてくぞ」

「待つてよ。もう少し。お兄ちゃん、いつつも早いよ」

「俺が早いんじゃないくて、お前が遅いの」

「はいはい。私が悪うございました。そんなことより、早く行く。置いてっちゃうよ?」

「って待てよ。さっきまで待つてやってただろ」

そんな朝で1日が始まった。

いつも通りの朝で、いつもより天気の良い朝。

照りつける太陽は心地よく、風も、背の低い植物を軽く揺らす程度で気持のいいものだった。

昨晚、雨が降ったのだろうか。葉から滴る液体が小さな鏡のように見える。

通い慣れた通学路を歩くと、そこには見慣れた人と物が、ひとつの風景として成り立っている。

「おはようございます」

と、ゴミ捨て場にいる、隣に住むおばさんにご挨拶。

さらに、3軒隣りに住む夫婦にも。

新婚さんらしく、最近ここに越してきたばかりで、毎朝幸せそう。

「羨ましいな」

そんなことを呟くと、

「お前にはまだ早いよ。そうだな、あと50年くらい経ったらかな」

とすかさず切り返す兄。

「その頃にはおばあちゃんになっちゃうよ」

ハハハ、と笑うお兄ちゃん。いや、冗談じゃくてね。

他愛もない話をしていて、学校に着くのはあつという間。

私の名前は涼夜^{すずや}加奈^{かな}。

中学に入學してから2年が経ちそうです。

勉強はそんなにできる方では無いけど、運動はそこそこ得意です。

兄の名前は耕輔^{こうすけ}。

学年は私よりひとつ上。

勉強は私よりも出来るっばいです。運動は、何とサッカー部のキャプテンをやってらっしゃいます。あーすごい。

そんな私たちが通う学校は至って普通の、家から歩いて20分くらいのところにある。

教室に着くと、また帰りに、と言って別れた。

兄のクラスは私のクラスより、階がひとつ上なのだ。

いつも教室まで送ってくれて、帰りも来てくれる。

あ、今日は無理か。

いつも兄妹でいて恥ずかしくないのかと聞かれても、全然。

むしろ、

「加奈^{かな}のお兄ちゃん、かっこいいな」

教室に入るなり、そんな声が聞こえてきた。

「ほんと。毎朝一緒に登校するとか羨ましすぎる」

むしろ、嬉しいのだ。

「そうかな？」

一応謙遜。

「「そうだよ」「」

私のお兄ちゃん、私のクラスでは、結構人気がある。

他のクラスのこととはよく分からないけど、私の勘では、恐らく同じ様な状況だと思う。

「それで、みんな、準備は？」

友達の1人がそんなことを言うと。

「もちろん」

と、周りの数人が頷いた。

ちなみに、今日は2月14日。

いわゆるバレンタインデーというやつです。

友達達は皆、バッグの中に、可愛らしく包装されたチョコを隠し持っている訳だ。

ここにいるみんな、お兄ちゃんのが好きみたいで、絶対に渡して告白すると心に誓っているらしい。

そんなモテモテの兄は、バレンタインデーになるといつも手一杯にチョコやクッキーを持って帰宅する。

なので、今日は兄は帰りがいつもより遅くなる。

仕方が無いので、私は1人で帰るしかない。

だって、友達もみんなお兄ちゃんにチョコ渡すからと言って帰れないし、兄を無理やり引っ張って帰るのもみんなに悪い。

と言っても、こういうのは、何もバレンタインデーに限ったことじ

やないんだよね。

ちよくちよく屋上や体育館の裏にお呼出しがあるから、正直慣れっこ。

そして、いつも通り変わらない授業が全て終わったころ、HRも無視して、数人教室から消えた。

早くしないと他のクラスの子に先を越されて渡せなくなっちゃうらしい。

実際、去年、渡せない子が出て、泣きながら家に帰り、私が慰めながら送って行った記憶がある。

さて、私はいつまでも学校に残っていてもしょうがないので、友人の家に行った。

で、その友人宅で、何とチョコ作りに挑戦中。

「カナ、いいの？今日渡さなくて。バレンタインデーだよ？」

「いいんです。わざとですから」

「わざと?」

「そう。わざと」

わざと、の部分を強調。

そう。私はバレンタインデーの次の日。つまり15日にチョコを渡す計画を立てているんです。

渡す人は決まっています。

ま、年上。とだけ言っておきます。

「で、その理由は?」

「理由はですね。ズバリ“裏をかく”です」

「裏をかく。と言うと?」

「裏をかく。つまり、『あゝあ。今年もチョコ貰えなかったなあ。・え?チョコくれるの?!』みたいな?」

みたいな?の部分で可愛く首を傾げてみる。

「みたいな?って。楽しそうね」

羨ましいわ、なんていいながら笑ってる。
うん。楽しいです。

「それより、チョコ奢ってもらっちゃって。ありがとうね」

「いいのよ。私も楽しいから」

ハハハ、だって。なんていい人なんでしょう。

私も自分でチョコを買いたかったんだけど、それには問題があった。

それは、金銭的な問題で、最も現実的で、最も高い壁のひとつだった。

家には、早い時間から母も父もいた。

ちょっと違うか。

両親は最初から家にいた。

無職になった父と、働く気のない母が、私たちの家族。
一応ね。

父は、ギャンブルというギャンブルに手を染め、飲酒、喫煙。

だらしない、という言葉体を表したような人だ。

元々は定職に就いていた父だったけど、この不景気のせい、急に
リストラ。

これは1年半前のこと。

自暴自棄になり、それ以来働く気はないらしい。

そればかりか、最近は兄に暴力を振るっているらしく、兄は違うと言っているけど、日に日に不自然な痣が増えている。

母は、最初から働く気などは無く、現実から目を逸らすように、文字通り淡々と家事をこなしているだけだった。

けど、貧乏ながらも、私は幸せな生活を送っていた。

それから数時間掛けて作ったチョコは、中々の出来栄え。

「じゃあ、明日。頑張ってね」

「はい。また明日来ますね」

バイバイ。なんて無邪気に手を振ってみる。

家に着く頃には、外は真っ暗で、月の明かりが影を作っていた。

お兄ちゃんには、どこに行ってたのか聞かれたけど、友達の家。と

だけ答えた。

両親は何も聞いてこなかった。幸いっちゃん幸いだけだね。

と、その日の夜、ベッドの上から、

「カナ。明後日、あの場所で」

そんな声が聞こえてきた。

「うん。分かった」

そう答えると、それっきり兄は眠りについたらしく、小さく吐息が聞こえてきた。

狩獵日記 第9話

次の日。

学校が終わって、夕方。

私は昨日兄が言っていた、『あの場所』に向かっている。

その“あの場所”とは、私たちの住む団地から少し離れた、寂れた
廃ビルの屋上だ。

兄は去年から、もらったチョコをここに隠している。

理由は、家にチョコを持ち帰ると、両親に全て食べられてしまい、
兄曰く、せっかく作ってくれたものを自分がひとつも食べないのは、
その人にとって失礼だ、とのこと。

それを2人で食べる。

幽かに吹く風に逆らいながら、兄が百貨で買ってきたプラスチック
の箱の傍まで歩いて行き、蓋を開ける。

中には、去年よりも若干多いくらいの、可愛らしく包装されたブツ
があった。

「ふむふむ。大漁ですね」

「まあ・・・」

と、謙虚な声が後ろから聞こえてきた。
振り返ると、バッグを肩にかけた兄の姿。

「あ、なんだ来てたんだ」

「さっき来たところ・・・とりあえず、食べようか」

「うん。そうだね」

こうして私は、おにいちゃんが貰って来たチョコを食べる。

そりゃあお兄ちゃんへって作られたチョコを食べるのはちょっとは
気が引けるけど、形振り構ってられないくらい、私たちは貧乏だっ
て、分かってくれる？

こうして、今日も飢えを凌ぐ。

ああ。なんて、腹立たしい。

2月16日の土曜日。

バレンタインデーから2日が経過しました。

チョコはいい加減減ってきた模様。

明日で最後かな？なんて話をした今日はいつもと変わらず、ただほんの少しだけ、いつもより寒いだけで、何となしに嫌な感じとか、そんな予感めいたことは何もなかった。

またいつものような日が過ぎるのかと思っていた。

夕方。いつもの場所へ、私は1人で向かった。

午後5時にあの場所へ。が私たちの暗黙の了解になっていた。と言っても、殆どの場合私のほうが早く来てる。

今日も屋上へ行くと兄の姿は無く、仕方がなく私は待つことにした。

1時間経過。いつも10分もすれば現れる兄はまだ来ない。

夕日で赤く照らされたコンクリートが、徐々に暗がりに塗れる。それにつられて気温が徐々に下がってきた。

何してるんだろ。怪我でもしたのかな。

などと考えながらも、7時まで待っていたが、結局兄が現れること

はなかった。

家に帰っても兄の姿は無かった。

お母さんに聞いても、「さあ」と、さも興味なさげな返答。

どうしちゃったんだろう。と、さすがに心配になってきたが、どうすることもできないまま、次の日の朝を迎えた。

2月17日。日曜日。

日曜の朝ほど心地のいいものは無かった。

今日ほど居心地の悪い朝はない。

起きてすぐ、2段ベッドの上を覗いてみた。

しかし、そこは昨日の夜のまま。何の変化のないままだった。

両親に聞いても、さあ。と、自分の子供なのに興味を示さない。

おかしいと思った。

しかし、思うだけで、どうしていいのかも分からず、私は早い時間からあの場所へと向かった。

1日中待った。

来るかも知れないと思い、願いながら待った。

しかしその日も、兄は姿を見せなかった。

2月18日。月曜日。

この日も兄は姿を見せなかった。

それ以外に、今日はとんでもないことがあった。

いつも通りの時間に学校へ着いた。

そして靴を脱いでいるときに、肩を叩かれた。

一瞬、兄の顔が脳裏をよぎり、はっと振り向いた。

すると、

「おはよう」

クラスの友達だった。

「あ・・・おはよう」

このとき、瞬間的に思った。

『お兄ちゃんのこと聞かれる』

この子はお兄ちゃんにチョコを渡した1人。

いつも一緒に登校してるのを知っているから、その兄がいないことを不審に思うはず。

しかし思いとは裏腹に、昨日のテレビでさうなどと話始めた。

少し動揺しながらも、話を合わせる。

そして、教室に着いた。

教室へ入るなり、おはようと友達数人と挨拶を交わす。

珍しく兄と一緒にでない私を不審に思うだろうと、根拠のないままそんなことを思った。

しかし、話題は昨日のテレビの話になった。

そんなに面白いものがやっていただろうか。

テレビを見た記憶はあるけど、内容はまったくと言っていいほど覚えていない。

そして、さすがに今回は動揺を隠せずにいたらしく、友達の1人が

言った。

「カナどうしたの？元氣ないよ？」

それに合わせてか、回りも、確かにそうだね。なんて言っている。そうして、1人が気が付いたように、そういえば。と前置きし、こう言った。

「カナ、ヘアピン忘れてない？」

「あ・・・」

そういえば、朝ぼーつとしててつけ忘れていた。

「まさか失くしたの？」

「あれ大事にしてたもんね」。だから元氣ないのかあ」

そんな勝手な解釈で話は再びテレビに移った。

昼休み。

私は一番仲の良い友達に、兄のことについて話してみることにした。

「ねえねえ。あのさ」

「うん。何？」

私を周りを見て、人がいないことを確認してから、軽く息を吸い込んで話し始めた。

「あのさ、お兄ちゃんただけどさ」

最後の方は少し声が小さくなってしまっていた。

兄がいなくなったことを、この子なら相談に乗ってくれると思った。

だけど、返って来た言葉によって一瞬頭が真っ白になった。

「え？カナってお兄ちゃんいたの？」

まるでハンマーで殴られたような衝撃に、気絶しそうなくらい頭がハッキリしない。

「前に一人っ子だって言っただけ？」

そんな言葉に、いや、なんでもない。ごめん。としか言いようが無く、その日はそれ以降誰とも口をきくことがなかった。

不可解なことが多すぎる。

それだけで脳は支配されている。

友達に言われたことだけではない。

家に帰ってみると、兄の所有物が全てキレイに無くなっていた。

2段ベッドの上段は取り外され、勉強机も無い。

よく読んでいたマンガも。兄が使っていた歯ブラシも。一緒にやったテレビゲーム機類も無くなっていた。

この家には、“涼夜耕輔がいた痕跡が何一つ残っていない”のだ。

何事かと問われても、今の私には何も答えられない。

と、珍しく出かけていたらしい母が帰って来た。

そして、家の状況。兄はどこかと聞いてみた。

頬には涙がつたい、声は震えながらうまく話せなかったが、とにかく聞いてみた。

「……お兄ちゃんは、どこ……？」

するは母は、思いもよらない答えが返えした。

「お兄ちゃんて、あんた一人っ子でしょ？」

私は次の日、学校を休んだ。

その次の日も。また次の日も。

以来、私は滅多に部屋から出ることはなくなった。

何故だかは、イマイチよく分かっていない自分がいた。

兄がいなくなった。というより、最初からいないかのようだ。

世界から涼夜耕輔という1人の人間が、記憶から末梢されたみたい
に。

ただ、この言葉もあながち間違ってもいないように思える自分が腹
立たしい。

とめどなく溢れる涙を止める術は、私には無かった。

そうして、学校に行かなくなって1ヶ月。

机にぼーっと座っている時である。
無意識に机の引き出しを開けた。

別に何かを探していたとか、特に目的も無く、何となく引出しを引いた。

その時、黒く細い物が目に入った。

「・・・これ」

あの日、兄が消えた日に無くしたヘアピンだった。

それから、また涙が溢れた。
嫌になるくらいに。

そんなとき、ふと思い出した。

「あの場所は・・・？」

私は家から飛び出した。

そうして、最近毎日通っていたあの場所へと向かった。
涙なんか構ってられない。

無我夢中で走った。
そうしてたどり着いた場所は、バレンタインで貰ったチョコを隠す例の場所。

屋上の扉を開ける。

そうして、プラスチックの箱が置いてあるはずのところに目をやると、

「・・・あった」

叩けば壊れそうなほどにまで廃れたプラスチックが、そこにはあった。

私は、そこでようやく確信が持てた。

兄は確かに存在した。

嘘でも幻覚でも、私の脳が勝手に作り上げた物でも何でもなく、
1 人の人間が存在したことを、それはハッキリと示していた。

すると、次に浮かんできたのは疑問だった。

まるで私のまわりの世界は、兄が元からいなかったかのように作りがえられているみたいだ。

母の言葉や、家具なんかはどうにでも出来るが、友人の方はどうだろうか。

あんなに仲の良かった友達が、そんな嘘をつくだろうか。

本日何度目かの目眩に襲われるのと同時に、コツ、コツという足音が聞こえてきた。

それは優しくて、軽やかで、風のようにだった。

心地の良いリズムを刻む足音。

不思議と驚かなかった。

元から来ることが分かっていたかのように。

ただ、それは残酷な仕打ちで。

最も幸福な時間が始まる予感がしていた。

振り向くと、そこにいたのは兄ではなかった。

「君、名前は？」

とても優しい声に感じた。

「カナ・・・」

なんだか、不思議。

その人は微笑んだ。

そのまま、どのくらい時間が過ぎたか、私に図る術はなかった。

そうしてその人は、ゆっくりと、全てを話してくれた。

ありとあらゆる疑問を取り払ってくれた。

全てが、私の敵に見えた。

狩獵日記 第10話

暗い闇に視界は濁ることを知らなかった。

不思議な感覚が、腹の底から上がってくるのが嬉しくて、荒く息を吐いた。

今、この体にあるのは何だろうか。

恐らく何もないだろう。

空っぽの箱は、何かを入れるのを拒む。

私もだ。

何もかも私は拒み、世界は私を拒む。

それが秩序。

それが私の所以。

嘘も本当も無い。

無という事実が目の前にある。

本当に、本当に、大嫌いだ。

まどろみの視界と、暗闇。

そこに在った物はそれだけかと思われた。

黒い人影が見える。

何者か認識出来るほど、僕は冷静ではなかった。

驚きと恐ろしさで、声を上げることも出来なかった。

理由は簡単だ。

浮かぶのは、今話題の殺人事件。

いや、そこまで考えられれば冷静なのかもしれない。

意識が真っ白になりかけたとき、それは近づいてきた。

女性ということは分かった。

そして、その口元は歪み、笑っているように見えた。

「先輩、おはようございます」

聞き覚えのある声に、恐ろしさが増す。

「お久しぶりですね」

意識が飛びかけた時だった。

近づく足音は、死の足音のようだった。

「えっと、半年振りでしたっけ？お変わりありませんね。あ、ちょっと背が伸びましたか？」

呑気な声も、不気味で。

なんでこんな時間にいるのか、とも聞けるような状況でもなかった。

それは、確信に近づく気がして。

今まさに考えるのを避けている状況だから。

僕は聞いた。

骨の鳴る音。 雨の降る夜のことだった。

それは震える夜に響く、音色^{こえ}。 斬刃^{ざん}が貫く風の音。

狩獵日記 第11話

赤いベッド。たたずむ少女。

「あら、どちら様？・・・ここ、私の家なんだけど？」

ニツコリと年相応の笑顔で迎える。

「（ああ、こいつがそうか）」

桐生楓はその場の状況を判断し、取るべき行動へと体を移す。
矢筒から1本の矢を取り出す。

片手に持った弓の弦にそれを掛けて、引き、手から滑らせる。
それと同時に少女が跳ねる。

まるでトランポリンでも使っているように。

柱に手を掛けて体制を整える。

「あぶないじゃない。そんな物騒なもの」

優雅にそう言った彼女。

今度はこちらに向かってくる。

両手を前に突き出し、串刺しにせんとばかりに迫る。およそピストルの弾だ。

両手に付いた武器は以前より数センチばかり長くなり、鋭さも増していた。

まるで剃刀のような刀身。もう少し伸びれば日本刀と違わぬ能力が發揮できるというのに。

『ああ、早く伸びないかな』

少女は少しばかり間の抜けたことを考えていた。

目の前にいるものは獲物。狩られるために存在しているもの。

少女の認識はそれだけだった。

弾丸のようなスピードで迫る獣を力エデは瞬時に横にずれてかわす。避けながらも矢に手を掛けて、1本抜き取る。

そして、放つ。

矢が風を切る。

矢と少女が交差する軌道に向かって放たれたそれは、一寸の狂いもなくレールを敷かれたように少女の元へと向かう。

いくら優れた身体能力を持っていようと、空中で軌道を変えるなんてことは出来るはずがない。

「甘いわね。あなた、バカ？」

確実に当たる。はずだった。

少女は空中でありながら身を翻し、仰向けの状態で腹をかすめる。

そのまま1回転し、壁に足をつけ、膝を使って勢いを殺す。
また跳びかかる。

それをかわし、矢を放つ。

それもかわされる。
まるで曲芸だ。

疾風のように飛び交う少女。 もとい獣。
マシンガンの如く矢を撃ち出す少女。 もとい狩人。

明らかに優勢は獣だった。

武器となる爪は明らかに近距離戦専用で、狩人の持つ武器は明らかに遠距離戦専用だ。

そして、戦場は4畳半の狭い密閉空間。

その中で、獣が牙を剥く。

爪が上から振り下ろされる。

それを最小限の動きで避ける。

取り残された髪がパラパラと舞う。

矢を取り出し、そのまま手の甲を貫く。

髪の毛と一緒に鮮血が飛び散る。

後ろに跳ねた獣へと追い打ちを掛けるように2本同時に撃つ。

「っ・・・」

舌打ちはどちらか。

お互いの攻撃は当たらず、お互いに躲し続ける。

獣は再度狩人を狙う。

が、それも躲され、また矢が放たれる。

『い！・・・っ・・・』

今度は2本とも刺さった。

痛みはあるが顔には出さない。

自然界では弱ったものは食われる。

弱ったそぶりを見せれば食われる。

だが、そんなもの狩人にとってどうでもいいことだった。

獣は獣であり、弱かろうが強かろうが関係ない。

獣であればいいのだ。

お互いはすれ違い、殺し合う。

4本目の矢が刺さった。

ドス、と静かな音を立てて膝の骨を砕く。

狩猟日記 第12話

「え？・・・」

ほんの一瞬体がよろける。

結果を分けた一撃だった。

その一瞬の隙をついて、また矢が放たれる。

獣は横に跳ねてよける。

が、先ほどまでの跳躍力は失われ僅かに頬をかすめた。

頬を真つ赤な液体が伝う。

「よくも、顔を・・・」

このとき、獣は初めて怒りをあらわにした。
初めて、人間らしい感情が芽生えた。

飛びかかる獣を前にして、狩人はいたって冷静だった。
弓で獣の爪を防ぐ。

「あんまりじゃないですか、桐生先輩？」

コンマの静寂。

「・・・誰だ？お前」

獣は後ろに弾けた。

着地すると同時に、太ももに矢が突き刺さる。
それを意に介さず、また跳ねる。

「っ……………」

今度の舌打ちは明らかに獣のほうだった。血でまみれた真っ赤なよれよれの衣服。

対して、相手はシワひとつない綺麗な制服。

確かにこちらの方が有利なはず。なのに、ダメージで言えば相手の方が遥かに有利だ。

思えば未だに一度もこちらの攻撃があたっていない。

いくら速く動いても、いくら爪を突き立てても、相手には届かない。

それに比べて相手はどうだろう。

少しずつ。無駄なく的確に私を狙う。

『私が……負ける?』

このとき獣は絶望感に似た感情を持ってしまった。
これまですべての獲物を一撃で沈めてきた。
それなのに。

『どうして・・・!』

汚れた衣服を鮮やかな赤で染め上げられていく。

間髪入れずにさらに2本の矢が放たれる。

少女は避けることは叶わず、そのままブスリ、ブスリと深々と突き刺さる。

少女に戦う意志はすでに無かった。今までの自身。確信。そうだったものが全て自分と対して変わらない少女によって打ち砕かれたのだ。

それは一瞬のこと。端から見れば、急に少女の動きが鈍くなったようにさえ見えただろう。

何本もの矢が体を貫いている。すでに息は荒く、弱々しかった。

いかんせん、慈悲なんてものは無い。

目の前にいるのは獲物で、こうなることはどちらも分かっていた。

ゆっくりと近づいて行く。

次の矢を弦に掛ける。

「ねえ……」

「忘れたか？」

力いっぱい引く。弓がミシミシと音を立ててしなる。

そして、

「狩人は」

放つ。

「獣を狩るから狩人と言っんだ」

ゴキン。

ゼロ距離での連射。

骨の碎ける鮮きれいな音があたり響く。

何も無い部屋に、鮮やかな朱色の液体が流れる。それはまるで秋に川を流れる紅葉のようにゆっくりと、死の足跡を残しながら。

狩猟日記 第13話

瞼が重い。窓から入り込む日差しが部屋を照らしている。視界がぼやける。それもそのうち治るだろう。

ぼーっと視線を変えずにいる。溢れんばかりの陽光。シミひとつない壁紙。

おそらく僕はベッドで寝ているんだろう。目に映るのは天井に描かれた複雑な模様だけ。

瞼を閉じてしまおうかと考えていると、ガチャリ、と扉の開く音がした。

入ってきた人間を確認するために、首を持ち上げる。

「やあ、調子はどうだ」

入って来たのは見知らぬ女性だった。

知的な感じの、スレンダーな女性が軽く手を上げてあいさつをしてきた。

「まあ多分大丈夫です」

「なんだ、その多分って」

「自分が何故こんなところに居るのが分からないからです。今のところ何ともありませんけど、もしかしたら脳に異常があったりしたら自分じゃ分りませんしね」

面白いことを言うな、と笑みを浮かべながら同意を示す。

胸ポケットからタバコを取り出す。

「ここ、禁煙ですよ」

「固いこと言うな。それに、ここがどこだか知っているのか？」
「病院じゃないんですか？」

ここが病院じゃなかったらどこだろう。

白主体の壁紙にこの静かな雰囲気。どれをとっても病院としか思えない。

それに、この人と話していると妙に疲れる気がする。

こんな人が医者なわけがない。セラピスト、はもつとあり得ない。
なんだか、病院なのかどうか本気で分からなくなってきた。

「病院と言えば病院だが、少し違う」

そう言ったとき、ドアが開いて、今度は白衣を着た中年男性が入ってきた。何となく柔らかい感じの表情だ。

「こんにちは彼方くん。どうですか。どこかに違和感があったりはしませんか？」

「ええ、とくに何も」

優しくそうな顔つき。撫で肩。薄目の頭髮。雰囲気からか、一目でいい人だと思った。

「自己紹介が遅れたね。私はここの医院長を務める木許きもとです。この女性はこの病院の考案者の浅香泉あさか いずみさんです」

考案者。普通の病院で考案者、などという人はいないだろう。

「普通の病院というのは疾病や疾患に対して医療を提供し、病人を収容する施設のことです。しかしこの病院は、あなたのように呪血された方に対して呪術医を用いて救う施設です。イズミさんはこれ

を個人のボランティアとして行っていて、それを大きくしたものがこの病院です」

「だから、考案者。というわけですね」

よく分らないが分かったフリをする。

笑顔で頷くキモトさん。隣で佇む女性は相変わらず僕を見下ろしていた。

「では、私はこれで。彼方君。何かあったらそのボタンを押して下さい。すぐに駆けつけますから」

笑顔でそう言うと、お大事に、と言いながら部屋から出ていった。

「では私も帰るとしよう。まだ治りきってないんだから、安静にしているよ。」

それと、ここが私の住んでいる住所だ。治ったらまた来なさい。お茶くらいは出すよ。

それと、君の家は壊れてしまっただね。私が別に住むところを見つけておいたから、今度からそこに住むといい。荷物の整理や手続きもしておいたから。住所はその名刺の裏に書いてある」

唐突にそんなことを言い、質問も受け付けずにそのまま帰ってしまった。

狩獵日記 第14話

ガチャリ、という音で目が覚めた。

まどろむ意識は、なぜか心地よかった。

同時に、視界がぼやけているのも、世界を直視せずにいられるからか、とても心地よかった。

「・・・誰」

私は、このとき久し振りに声を発した。

誰か、という質問は、あまり意味がないことは知っていた。

首だけを動かして、扉のほうを見ると、そこには女性が立っていた。

何も答えず、腕を組んで私を見下ろしている。

「涼夜加奈」

不意に名前を呼ばれて、ドキリとした。

「君は、この人物に見覚えがあるか？」

そう言つて見せられたのは、あの日屋上で会つた男の人だった。

目の下にある傷が印象を強めていた。

「・・・ある」

そう答えた瞬間、あることが浮かんできた。

『この人、何か知っているのかも』

そんなことが頭をよぎつたとほぼ同時、意識にかかった靄が晴れた。

「あなた、まさか何か知ってるの？」

睨むように、その人に言つたが、まったく怯む様子はない。

それも当然なのかもしれない。

こちらは見た目からして病弱そうな女だ。同じ女ならば尚更力の差は分かりやすいものだ。

一息おいて、女性と言った。

「知っている」

「・・・教えて」

先ほどより鋭い口調で言った。

意識してではなく、自然と出た言葉だった。

「だめだ」

女性は表情を変えずに言った。

「君に教えたところで、私になんのメリットもない。それに、君は治療が必要な身だ。そうやすやすと、秘密を明かすことは出来ない」

そこまで言い切って、女性は立ち去ろうとした。

「・・・嫌」

私は、涙腺が緩むのを感じた。

「なんで、当事者よ？何で教えてくれないの？兄がいなくなっただのに、誰も何も知らないし、気が付けば人を殺しちゃってるし。ねえ、何で。何でなのよ！」

そこで、女性はため息をついた。

立ち止まって、こう一言だけ漏らした。

「君はハメられた。クラシキという男にな」

言い終わると、ガチャリという音が、空しく響き渡った。

次いで、自分自身の嗚咽も響いた。

狩獵日記 第15話

事務所にて、アサカは偉そうにパソコンの前でコーヒーを啜っていた。

「さて、どういふことなのか話して貰おうか。アサカ」

「そう慌てるな。物事には順序があるだろ」

「いいから。早く話せよ」

分かった分かった。と言いながら、アサカは紙袋からあるものを取り出した。

「それは？」

「これは、涼夜加奈が2月14日に作ったというチョコだ」

「それにしても魔が通ってる。1人で作った物じゃないな？」

「おそろくな。しかも一緒に作った人物は相当な腕だ。神隠しを見抜いている」

ポイ、と、緩慢に、ハート型に包装されたチョコをソファに投げた。

「神隠しだと？」

「ああ。涼夜加奈の兄は、神隠しされた」

あつた、ではなく、されたところがポイントらしい。

「そもそも、あいつに兄がいたのか。いや、もうすでにいないのか」

「そこが難しいところだ。もうすでにこの世にはいない。だからといって、この間まではいたのだから、やはり存在は在り。ということになるが、神隠しということは、最初からこの世には存在していなかった、ということになる」

「しかし、このチョココを持っていた人物は、その神隠しの影響を受けなかったという訳か」

そうだ、とアサカは満足そうに頷いた。

「神隠しというのは、ある人物が突如姿を消す。その際、その人物がいた、存在したという証拠が消える。もちろん記憶もだ。そして矛盾が無いように過去がうまい具合に改竄される。ただし」

ここで一呼吸おいて、また口を開いた。

「完全に過去が改竄されるわけでもない。“歪み”がどこに残る

場合がある。というかほとんどの場合、何かを匂わせる“それ”があるはずだ」

「それが、今回は何だったんだ」

「屋上に置いてあったらしいチョコだ」

「チョコだった?」

ああ、と言いながらアサカはたばこに火をつけた。

「涼夜加奈の兄が貰ってきたチョコを置いていたらしい」

「それが残っていたというのか」

「その通りだ」

「それで、それを行ったのは誰の仕業で、誰が獣なんかを呼び出したんだ? 神隠しと今回の殺人はどう考えても繋がらない。何か特別な理由でもあったんじゃないのか?」

兄が神隠しされた。そして、自分以外の人間の記憶から兄が未梢されたからといって、猟奇殺人の理由にはならない。

元は普通の人間だったはずだ。

「倉敷の仕業だ」

それを聞いて納得した。

「何となく予想はしていたんだ。そこで、涼夜加奈に写真を見せたところ、屋上で会ったと言っていた。チョコを置いていた場所だ」

「ということは、クラシキが涼夜耕輔を神隠しし、涼夜加奈を獣にした。そういうことか？」

「簡単に言つとそうだな。付け加えると、クラシキは、涼夜加奈を獣にするのと同時にある仕掛けをした」

「仕掛けだと？」

ああ、と頷き、また話始めた。

「一言で言つとだな。愛情が憎しみに変わった。といったところか」

アサカの話はこうだ。

憎んでいた相手を愛し、愛していた相手を憎むようになる。

プラスはマイナスに、マイナスはプラスになる。

「クラシキが好んでよく使う術だ。昔から人の心の研究には熱心だったからな」

アサカは懐かしげにそう言った。

正直、あまり興味のないことだった。

しかし、これでは話がおかしい。

愛しいと思う者を殺し、憎いと思う者を殺さないというならば、なぜ関係の無い人間が殺されたのか、という疑問が残る。

「それはだな、推測に過ぎないが、恐らく自分の能力を高めるためだろう。とある情報によると、最初の殺人より、最後の方がよりの確で素早かったそうだ」

「確かに最後はアイツ、躊躇いもなく心臓を潰しやがった。あと数分遅れていたら確実に手遅れだった」

「彼女という能力というのは、力や速度ではなく、脳の方だったと見える。」

徐々に狩りに慣れていく獣か・・・」

面白いじゃないか、などと言い、チョコを手を取った。

「それ、どうするつもりだ？」

「なんだカエデ。食べたいのか？」

「いらない。捨てろ」

そんなことをカエデが言うのと同時に、チヨコの包装紙に火が着いた。

無論火の気は無く、ただ掌に乗せていただけだ。

「これで向こうから寄って来てもらえば探す手間が省けるんだがな」

忽ちチヨコと包装紙は灰となり、風に流されるように窓の外へと飛んで行った。

そんな会話をしたのは、3月14日。

無風、の天気の良い日のことだった。

狩獵日記 第16話

治療後というのはなぜか眠くなってしまう。理由は分からないが、とにかく睡魔が半端じゃない。だから、大抵治療後は眠るかぼーっとしているかのどちらかだった。

そんな病院とも今日でお別れ。退院となる。

「哀愁を帯びる、という感じですか？」

心を見透かされた感じで、少しドキリとした。それも木許医師のいいところというか、相手の本心を見てくれるという面はさすがに医者、といった感じた。

初めて治療する際に、注射が苦手な僕の顔を見て、

『注射は苦手ですか？』

と聞いてきたことがあった。

何か不思議な力でもあるのではないか、などとも考えてしまうこともあったほどだ。

「そうですね」

何でも、僕の体に流れる血は呪血されたとかで、少量の血を抜いて、洗浄してから輸血をする。他人の血液では、拒絶反応を起こしてしまうらしい。

そのため僕は1日1回血を抜き、再度入れ直すという奇妙な体験をした。

それでも僕の場合は軽い方で、重い人では他人の血液を輸血し、拒絶反応を無理やり抑え込むという治療法を余儀なくされる患者もいるらしく、正直僕はほっとしている。

毎日少しずつ。これが意外にも大変で、結局まる１年を費やしたというわけだ。

それと、呪血された患者以外の患者。ようするに“本人たち”の医療法は凄まじいものだった。

これについて語ってくれたのは浅香さんだった。

『何、難しいことは無い。ただ単純に“何もせず”にいればいいんだ』

要するに、病院側は一切干渉せずに隔離し、定期的に“監視カメラ”で様子を見る。

誰にも干渉されなず、日の光を浴びることも許されず、食事のみが機械によって運ばれる仕組みとなっている。

話すことも許されず、四方を分厚いコンクリートの壁に囲まれた空間で生きていかなければいけない。

「病院側も、それだけ必至なんです」

そう言って木許医師は苦笑いした。

狩獵日記 第17話

ある日、アサカがこう言った。

「そついえば、話忘れたことがある」

「なんだ？」

「涼夜耕輔のクラスメイトに、不思議な奴がいたそうだ」

「不思議な奴？」

「ああ。なんでも、クラスの連中に、耕輔はどうした？と聞きまわっていたらしい」

「何だと？」

「この情報が本当だとすると？」

「本当もなにもないだろう。その情報は信用できるのか？」

「出来る。9割9分くらい信用しろ」

「じゃあ聞くが、そいつの名前は？」

「情報の提供者か？それとも、不思議な奴の名前か？」

「どっちも。いや、情報提供者のほうはいい。おかしな奴の名前は？」

「考えれば分かるはずだ」

「勿体ぶるなよ。さっさと教えろ」

アサカは一呼吸置いてから口を開いた。

このとき発せられる言葉を、根拠も無しに予想が出来た。

「・・・彼方真澄だ」

これを聞いてからだ。頭の片隅に必ずこの名前が残るようになったのは。

まったく、忌々しい話した。

しかし、聞かなければよかったとは思っていない。

事件の起きる前のことだ。俺はこう言った。

『プラスでもなければマイナスでもない』

これが関係しているのか。それとも、偶然なのか。

今にも泣き出しそうな分厚い雲。

肌寒い風が衣服を突きぬける。

コンクリートは濡れていて、雨が降ったのだと初めて気が付いた。

それもその筈。入院後、始めて外に出たのだ。

病室にも窓はあるものの、外の天気はまったくと言っていいほど気にしなかった。

夕方だというのに仄暗い。幾重にも重なった雲が陽光を遮っている。夕立ちでも来そうな天気だ。

電車に乗りながら、そんなことを考えていた。

退院後、靄が掛ったような頭は、すっかり晴れていた。

今の天気とは正反対だ。

これが、運命の始まりだなんて、思いもしなかった。

<神隠し>

人間がある日忽然と消えうせる現象である。

消えた人間に関する記憶や証拠は、矛盾がないようにうまく改竄される。

しかし、それには必ず歪みが伴う。

狩猟日記 第17話（後書き）

狩猟日記を最後まで読んで頂きありがとうございます。
そして更新が遅くて申し訳ありません。

“うまい表現”というものがなかなか実現出来ず、
『状況がよく分らない』など『意味不明』のようなことがあったと思います。（これでも相当必死です）

日々精進出来ればいいなと思っておりますので、引き続き『fate』をよろしく願います。

それでは、また次の物語で。

I s t h e f a t e b e l i e v e d ?
I b e l i e v e

第3章 再生理論 第1話

ながとしや
長門初谷。

この数年間、警察庁での要注意人物ナンバーワンを独占している殺人鬼。

不確かだが、数にして100を超える人間を殺しているとさえ囁かれる。

そんな彼が、昨夜遂に逮捕された。逮捕というよりは自首だ。勤務していた警察官に近づき、

「なあ兄ちゃん。警察署つてどこ？」

刑罰として死刑が確定している。急な有事ではあるが、捕まるとうの前から刑は確定。物的証拠も十分だった。

そして翌日、彼の精神鑑定を行われた。

数が数なだけに、もはや個人のレベルではないと判断し、組織、もしくは精神に問題があると予想。

「俺？そりゃあ精神はバリバリ安定してるぜ？何？なんで殺したか聞きたいの？理由なんてどうでもいいじゃん」

長門初谷の精神はいたって安定。医師の質問にも的確に答えることが出来ていた。

「俺は普通だ。ま、普通じゃないと言えば普通じゃないが、お前らも似たようなもんだぜ？」

医師は責任能力は顕在。意思能力も、との判断を下した。

「何かつまんねーな。なあ、何か面白いことねえの？そっだ、腹減ったな。そういえばここに来た理由忘れてたわ。なあなあ、カツ丼ない？ここ来ればカツ丼食えるって聞いて来たんだけど・・・。え？ない？マジかよ。意味ねえじゃん。じゃあ俺帰るわ」

そう言つて、警察及び精神科医の目の前から颯爽と消えて見せたのだ。

この事態に警察は対応に追われた。一度逮捕した殺人鬼を、しかも精神鑑定中に逃げられるなどあつてはならないこと。意地と名誉と威信に掛けて今まで以上の大搜索が始まった。

県の警察を総動員し、張り込み、聞き込みなど、24時間体制で行った。

長門初谷の目撃情報は数件。コンビニ等の防犯カメラに映った回数は10を超える。

捕まるのも時間の問題と、世間も信じて疑わなかった。

しかし、それからというものの、1か月、半年、1年と経つても長門初谷が捕まることは無く、巷では警察が極秘に逮捕し死刑にしたとか、軍隊によつて拘束されたなどという噂が立ち始めた。

そんな与太話とは裏腹に、この事件にはある1人の女性と長門初谷による壮絶な闘いがあつたとは思ひもよらないだろう。

再生理論 第2話

全てが止まって見える。

1秒がこの世の一生に匹敵するように長く感じた。

僅かな風でさえ暴風のように感じた。

星の光が目の前で炸裂する閃光のように感じた。

神に近づける気がした。

けど現実は違った。

超えることの無い一線が存在した。

それは人間であるがの所以。

ならば、人間の能力を最大限に伸ばせばよい。

それは簡単なこと。進化し続ける意。

進化を諦めた人間はもはや廃棄物同然。

進化し続けることにこそ存在意義を示すことができる。

俺は神を凌駕する。

滾る光を蔽う雲。
たぎ おお

無常を断ち切る原子の業火が燃え上がる。

無風。快晴。気温良好。

「ピクニックには最高の天気だな」

「それ、ソノダさんが言うのと似合わない」

「む。はつきり言うな」

「ソノダさんのいところからね」

日曜日の正午過ぎ。日本に住んでいる唯一血の繋がった、従兄弟である園田英司さんそのだえいじが遊びに来ていた。

とある出来事で、以前僕が住んでいた家は壊れてしまい、現在はマンションに住んでいる。

中々の中流マンションは意外と狭いが、一人暮らしの僕にとって大した問題ではなく、それなりに充実した日々を送っていた。

入院の報告は両親には連絡が通じず、ソノダさんの方に連絡がいったらしく、かなり大慌てで病院に駆けつけたが、玄関で追い返されてしまった。

そこで夜にでもこっそり侵入しようとも考えたらしいが、なんとか踏みとどまってくれたらしい。

ソノダさんは僕の両親に、僕の様子をたまにいいから確認して、少なくとも命を落とすことはないようにして欲しい。というなんともむちゃくちゃな契約をしたらしく、僕が入院したと聞いたときには嫌な汗をかいたと言っていた。

「お前が無事だったって聞いたときはほっとしたよ。色んな意味で」

「色んな意味、ね」

僕の両親が一体どんな顔してソノダさんにそんな契約したのかが気になるところだ。

ソノダさんは防衛医科大学を卒業後、自衛隊に入隊し、今の階級は尉官なのだそうだが、詳しいことは以前ソノダさんが説明してくれたが忘れてしまった。

訓練が半端じゃないって言ってたことは覚えてる。

そのお陰か、かなり筋肉質な体付きをしている。

医科大学を卒業したのに訓練をさせられることについては疑問だが、なんだかややこしくなりそうなので今まで聞いたことはない。

毎日訓練ばかりしているソノダさんは、筋トレに対する知識に富んでいる。

どこをどう鍛えるにはどうすればいいか。

何を摂ればいいのか。

どのタイミングで食事をすればいいのかを、僕は小さい頃に教え込まれた。

残念ながら、僕は筋トレの趣味もなく、運動部に入ることもしなかったので無用な知識として頭の片隅に追いやられている。

「それで、そろそろ行くんだろ？」

「うん。お昼頃伺いますって連絡したからね」

「ふうん。家はどの辺りだ？この近くに住んでるんだろ？」

「うん。朝日荘っていうアパートらしいよ」

「朝日荘ってめちゃくちゃ近いじゃん。ならまだいいな」

ソノダさんはそう言うけど、壁に掛けてある時計はすでに11時3

0分を指してる。

もちろん狂ってはない。一応携帯で時間を確認すると、やっぱり1時半。31分くらいだ。

そんなことはお構いなしに、ソノダさんはまた喋り始めた。

再生理論 第3話

「俺の高校のときの合宿は酷かったぞ。俺がラグビー部だったのは知ってるよな？」

「知ってる。フォワードだったっけ？」

「そう。その時の監督はさ『フォワードは体が命だ』って言って筋トレばかりやらされて、メシの時間になれば『とにかく食え。食わなきゃ付く筋肉も付かなくなる』って言って1人で炊飯器全てを平らげるなんて言われたこともある」

懐かしそうに言うソノダさん。学生気分の抜け切れていない新人社会人のようだ。

ソノダさんの通った高校は、ラグビーの名門校らしく、全国常連で過去に何度か全国制覇を成し遂げたことのあるのだという。

当時、スポーツ医学がハッキリと確立されていない時代、効率よく筋肉をつけるのかではなく、ガムシヤラにトレーニングをするというのが主流になっていた。

今で言うスパルタ教師というのも、その当時にはそう珍しいものはなかったらしい。

そうしたスパルタ教師は、生き物には限界というものがあるなどと考えもしなかった。

そうこうしている内に、ソノダさんの筋肉講座めいたものが始まった。

「筋肉が増える仕組みってのは、スポーツマンの間では常識になっている『超回復』っていう現象で筋肉が増えるようになってる」

「超回復？」

「そう。動物の体ってのは元々自然治癒力が身についてるだろ？筋肉を破壊して、自然治癒力によって筋肉が修復される。このときに修復される筋肉が勢いあまって増えるんだ。そのときの監督はこれを知らなくてな。毎日筋トレ。筋肉痛なんて知ったこっちゃない」

「でもさ、それを繰り返せば自然治癒力って上げることも可能じゃない？ほら、毎日筋肉をズタズタにしてるわけだし」

「うーん。まあ可能なんじゃないか？と言ってもほんの少しだろうけど。怪我の多いスポーツをやっている人間は自然治癒力は早いんだろうな。そんなものとは無縁の人間と比較すればな。」

それに、現代には薬っていう便利なものがあるだろ？薬に頼り過ぎると自然治癒力は落ちちまうんだよ。」

僕と会うのが久しぶりだからか、今日のソノダさんはいつにもまして饒舌だ。

ソノダさんの話はいつも、面白いかどうかは置いて、今話したように、人体に関する話がほとんどだ。

脳は痛みを感じる神経がないとか、火事場の馬鹿力は存在するか。たまには役に立つ話もあるけど、正直ほとんどが役に立たない雑学みたいな知識だ。

まあ知らないよりはマシだろうけど。

「じゃあそろそろ行くか」

話が切れたところでそう言って、ソノダさんが立ち上がった。

「行くか。って、ソノダさんも行くの？」

「当たり前だろ？お前の保護者なんだから」

多分、アサカさんを見ただけだと思う。

再生理論 第4話

「へえー、浅香泉さんねえ。近くなのか？」

「うん。地図が正しければ歩いて5分程度の場所だよ」

陽光煌めく昼下がり。時折り吹く風に目を細める。

すれ違う人も殆どいない。騒音という騒音も、ときどき通る車の音しかない。実に静かなこの街は、以前僕が住んでいたところも大して変わりなかったで、なんだか懐かしい。

昼食を終えた僕らは、僕の入院していた病院の考案者と呼ばれていた女性。浅香泉さんの家に向かっている。

時間までもがゆっくりに感じてしまうほど、ゆったりとした雰囲気。陽光によって作られる黒い影。時間的に、影はかなり小さくなっている。

家を出てから6分少々。アサカさんの住まいに着いた。

「ここが、その人の住まいか？」

「まあ、そうらしいけど」

予想として、豪華な家を創造していたんだけど、現実はずるかけ離れていた。

階段の黒い手すりの塗装はボロボロになっている古いアパートは、ベージュの壁はすでにベージュではなくなっていた。

また、その土地も異様な雰囲気を放っていた。

まだ昼だというのに、アパートの敷地内は、後ろに聳える竹林によって薄暗くも見える。

「まあ、とりあえず行くか」

「うん。そうだね」

と言い、敷地内に入ろうとしたソノダさんはピタリと足を止めてしまった。

「どうしたの？」

「ん？ああ。・・・俺やっぱいいわ。悪いな。また今度誘ってくれ。じゃあな」

そう言うと、元来た道を歩いて行ってしまった。

保護者として来たんじゃないのかと思ったけど、仕方がないので僕だけ敷地内に入った。

カンカン、という乾いた音が響く。

アサカ、というプレートの掛かった扉の前に来て、インターホンを押した。が、壊れているようなので仕方がなくノックした。

ほどなくしてガチャリという音とともに女性が出てきた。

「どうも。お久しぶりです。彼方です」

「・・・ああ、久しぶり。とりあえず入れ」

「お邪魔します」

玄関の上がり框かまちを超えて居間へと入る。

僕は驚いた。これは少し失礼かもしれないが。

中は外装とは違いとても整理整頓が行き届いていた。思っていたより広く、チリひとつない室内。高級物件を思わせるような、ツヤのあるフローリング。壁紙も白一色で、シワひとつない。少しオレンジがかった光が室内をより広く見せている。

という印象も、外の見てくれとのギャップのせいなのかもしれない。

「紅茶でいいかな？」

はい、と返事をする、アサカさんは台所へ向かいお湯を沸かし始めた。

ティーバッグを使うのかと思ったが、そうではなく、ポットに茶葉を入れて、沸騰したてのお湯をそこにいれた。

「本当ならポットとカップを温めたいところだが、生憎そこですると時間がかかってしまう。手抜きで悪いな」

ポットが冷めていると、沸騰したお湯の温度が下がってしまい、茶葉の旨みが抽出されないらしい。ティーカップも同様に温めておくというらしい。

紅茶を飲むのにそこまでする人を僕は見たことがない。

「安物のアッサムだ。味は保証しない。あまり自分で淹れるのは得意ではないんだ」

頂きます、と言って一口、口に含む。

渋みを含んだ甘味が舌の上を滑る。

得意ではないと言っている割にはとても美味しい。

「そうか、やっと退院したんだな。約2年か。まあ早いほうだな。キモトからは治療後の回復力が遅かったと聞いたんだが」

「僕にはなんとも。順調に回復しているとは言われましたけど」

「医者は揃ってそう言うさ。患者に『回復が遅いです』なんて言えないだろ？」

最もな意見だった。

それからは、ただの世間話になっていった。

家の住み心地はどうだとか、この人の現在の職業は小説家でそれなりに売れているらしいこととか。

それに医師免許や教員免許、その他の専門職に就くために必要な資格を多数持っていること。

なぜ小説家になったのか、という質問に対しては、単に物語を書くのが好きだからだそうだ。

本当に他愛もない世間話は続いた。以外にも、この人も世の奥様方のように話が長くなる傾向があるのかもしれない。それでも、その一つ一つが独自の観点を持っていて、納得できるとても興味深い話だったためあつという間に時間は過ぎて行つた。

「では僕はこれで。紅茶ご馳走様でした」

「ああ。またいつでも来てくれ」

はい、と一礼してドアを閉める。

ギシ、と軋む音が不気味に響いた。

階段を降りようと、手すりに手をかけると、錆びが手に付いた。塗装なんか、殆ど剥がれている。

夕方に林をバックにカラスなんかが鳴いていたら、それこそ呪いのアパートのようだ。

大家さんはどうしているのだろうか。直す気はないのだろうか。そんな考えたところで分かるはずもないことを考えながら、アパートの敷地から出て家へと向かった。

再生理論 第5話

「カエデか。遅かったな」

体をパソコンに向けたまま、ノックもせずに入ってきた少女を迎えた。

少女は手に持った荷物を床に置くとそのままソファーに腰掛け、怪訝な顔つきで話し始めた。

「さっきあいつがいなかったか？」

特になんの反応も示さない女性に少女は少し腹が立ったのか、眉間に皺を寄せる。

「どうしてだ？」

「私に礼がしたいといってな。もう1人いたが、立ち寄らずに帰ったようだ」

「そんなことを聞いてるんじゃない！」

立ち上がって声を張り上げた。

しかし女性は動じなかった。

動じずに、ため息を吐いてから話始めた。

「結界を専門とした符術師であろうと無いものを防ぐことは出来ない。現に私は、あいつが近付いてきていることはおろか結界に触れたことすら気がつかなかった。ここのアパートに張つてある結界は、物理的なものじゃないのはお前も良く分っているだろう？」

間接的とも言えるだろうか。

物理的な物なら近代兵器。その他火器類を使用すれば破壊は可能。コンクリートも素手で壊すことは不可能でも道具を使えば木端微塵にすることなど容易い。

いくら堅い物であろうと破壊出来ない物は殆ど無いと言ってもいいだろう。

熱で溶かすことも。

ミサイルを撃ち込むことも。

重機を利用して砕くことも。

堅い物があればそれよりも堅い物をぶつければ破壊することが可能。単純な物質の硬度や当て方の問題。

しかし物理的な物では無く。

素手で触れられずに。

あることすら気がつかなければ？

それは最強の城壁と成りうる。

精神に施す鉄壁の防御。

現に、ソノダという男はアパートを直前に引き返している。

自らを符術師と名乗る浅香泉。結界師としての能力は昔から秀でていた。

が、事実このアパートの結界はそんな大袈裟なものでもなかった。

「この結界くらい、誰にでも破れるさ。異界に繋がるわけでもないんだからな。最強の結界を張らなければあいつには効かないだろうね。・・・まあ別に害があるわけでも無い。放っておいても問題ないだろう」

そうは言うが、実際に問題は起きているがそれもまた放っておいても問題はないと、譜術師はそう判断をした。

「もういい。俺は勝手にさせてもらう」

「構わないよ。だけど、殺すなよ」

背中ですれを聞いて、桐生楓はアパートから出て行った。

再生理論 第6話

「いらっしゃいませー」

ほんのり暖かい店内。

店員の声がよく響いた。

アパートを出て少し。僕は近くにコンビニがあると聞いたのを思い出した。

思いのほか近かったので何となく得した気分になった。

まずは雑誌売り場へ。2年も病院にいては最近の情報に疎くなってしまう。そんな理由だった。入ってすぐ左に視線をやる。と、視線の先に男がいた。

その男は、正直かなり目立つ。

赤髪に、真っ赤なコート。

明らかにアンバランスというか、赤い髪とほぼ同色のコートはあまり似合っていない気がするが、男の顔立ちは綺麗でスタイルもいい。190センチはありそうな長身で八頭身も夢じゃないような細みの体はアイドルのようだ。

そんな、格好さえどうにかすれば芸能界にスカウトされそうな男は堂々と成人雑誌を読んでいた。

不覚にも見とれていると、不意に目が合ってしまった。

『ヤバッ』

ドキつとしたが、以外にも男は片手を上げて、よう、などと言っている。

僕は一応頭を下げておいた。

そして男はすぐに視線を元に戻した。

僕は男から出来るだけ離れた位置で適当に芸能雑誌を手にとった。

約10分間。パラパラと簡単に雑誌を読んだ。

誰が結婚したとか、誰が不祥事でどうなったなど、与太何だかどうだか分からないようなことを頭に入れる。

雑誌を棚に戻すのと同時に、異変に気が付いた。

2メートルはしっかり離れていた赤髪の男はいつの間にか隣にいた。それも成人雑誌を読んでいる。

「あの、なにか？」

そんな僕の声に少し遅れて反応し、ニヤリと笑った。

「いやいや。ちょっと君が気になってね。特に意味はないですよ。

別に、俺は君の体が欲しいとか思っただけから。あ、でも君結構可愛いね。名前は？」

「彼方眞澄です」

「マスミちゃんね。覚えておくよ。俺、長門初谷っていうんだけど聞いたことない？」

意外にもひょうきんな長門さんに、僕は首を横に振る。

「ガーン。結構有名だと思ったんだけどな。そうは問屋がよろしませんか。うーん。俺もまだまだ。精進が足りませんな」

実際にこの会話を一般常識が身に付いている人が聞いていたらパニックに陥か逃げ出すだろう。

しかしこの男。2年間閉じこもった経緯に加え、興味のないことはあまり覚ええないという性格上長門初谷の名を前に少しも動じずに、むしろいい人だなんて思っていたりしていた。

不幸中の幸いというのか、先ほど読んでいた雑誌にも長門初谷の名前は乗っていたはずだが、気にも留めずにパラパラとページをめくった以外にも鈍いこの男。

「まあいいや。そんなことよりさ、何か買ってくれない？今金欠でさ。就職出来ないしバイトも出来ないのです」

「それは無理な話ですね。そりゃあお金が無いわけではないですけど、見ず知らずの人のためにお金を簡単にあげられるほど持て余していませんから」

「なるほど。金はあるけど他人には渡したくない。そういうこと？」
パタン、と成人雑誌を閉じると真剣そうな声で言った。

「違います。あなた、きつと僕がお金をあげたらそれ、買うつもりでしょ？」

それ、とは手に持つ雑誌のこと。

長門さんは、ばれたか、なんて言って笑っている。

「そうか。しっかりしてるな。中学生？あ、高校生か。いいねえ若いて」

高校生の目の前で成人雑誌を読んでいる人に言われても説得力がないと思う。

店内の時計を見ると、そろそろ腹が鳴りだすころ。

「じゃあ長門さん。僕はそろそろ帰りますんで」

そう言っただけ僕は長門さんに背を向けた。

「そうか。じゃあ俺もそろそろ帰るかな。気を付けて帰れよ。女の子なんだから」

じゃあな。そんな言葉を背中であいて、反論しようと振り向いた。

「・・・いない？」

長門さんはそこにはいなく、店内を見回した。が、あの長身ならばすぐに見つかるはずなのだが店内に赤髪の男などいなかった。

再生理論 第7話

閑^{しずか}な夜。時折生暖かい風が赴くこの頃。周りに明かりは無い。
あるとすれば、青白く闇を浮き彫りにする月光。それに添えられた
星々。

ピチャ。

人気のない路地。星の光を背に浴びる頃。真っ赤なコートを着た長
身の男と10代の若い男だったものが3体。

巷で有名な、殺人鬼と称される男。長門初谷。

片手に、その辺に落ちていた鉄パイプ。長さはざっと40センチ。

ピチャ。

肉塊と化した3体のモノ。

いずれも無残な様。血の海に浸っている。

赤に朱が混ざり銅^{あか}となる。

深紅の液体が闇に照らされさらに深く。

ピチャ。

辺りは不気味なほどに閑だった。

事は5分ばかり前。

「よお兄ちゃん」

コンビニで成人雑誌を読む赤いコートを着た赤髪の男に目をつけた不良3人組は、彼を何者かも知らずに近づいていった。理由はたんに暇で、目に付いたから。その程度のこと。

「あんた、なんでそんな格好してんの？似合ってねえな」

ひゃひゃひゃと笑う3人に長門初谷は笑顔で対応した。

「そうか？あんたらの格好よりはマシだと思うぜ？」

雑誌から目も離さず言った。

金髪に不思議な形のピアスを右耳に付けたの男。

オレンジっぽい髪に、鼻ピアスの男。

安っぽいアクセサリ類をじゃらじゃらと付けたニキビ顔の男。

どこぞのバンドメンバーのような3人組に対して放った一言は紛れもなく事実であり、端から見ても明らかな言葉だった。

そんなことも分からずに、3人組は長門初谷に対して当然のように怒り、その場でボコる勇気の無い彼らは、人通りの少ないところで

リンチにでもして憂さ晴らししようなどと考えていた。

「兄ちゃん。ちょっと来てくんねえ？」

そんな言葉に、いいぜ、と不敵に笑う長門初谷に対して不気味さを覚えるでもなく、むしろチャンスなどと思いこむ不良たち。

コンビニから十数メートル離れた路地。人通りは皆無と言っても過言ではない。

辺りは驚くほど静かで、ここが街の中だということを忘れてしまいそうなくらい閑静だった。

長門初谷を先頭に、その後ろをニヤケながら歩く3人。

本来、この状況ならば走って逃げだすことも可能だった。

だがそんなことはせず、自ら細い路地へと進んで行った。

そして、街灯も無い、真っ暗な路地へと入った中頃。

「で、何の用？」

と振り向く長門初谷に対していきなり右ストレート。
人間の反射神経から考えて、まず避けられない1撃。

人間の反射神経は物事を感知して行動するまでに平均して約0.2秒。

反射神経を常に鍛えているスポーツマンで0.1秒前後。

そして殴りかかれた被害者は明らかにスポーツマンでも、常日頃から反射神経を鍛えているわけでも無い。

鈍い音は、閑静な裏路地に静かに響いた。

再生理論 第8話

不良の右ストレートは空を切る。
ブン、という音が虚しく鳴った。

距離にして約30センチ。外すはずもなく、それは紛れもなく“躲した”ことを意味していた。

「いやいや、君たちそんなことを考えていたの？あぶないじゃん。当たったら痛いだろう」

その言葉を、不良たちは正面からではなく後ろから聞いた。

「でも俺もそういうノリ嫌いじゃないぜ？何か男の中の男って感じ？そう、男っていう字を漢で書くくらい？」

いつの間にか赤いコートを着た男は、もとい漢は3人の後ろに立っており、その長身で3人を見下ろす形でいた。

「でも不意打ちは格好悪いぜ？やっぱ男は正面切って1対1。もちろん素手で殺り合う」

決闘スタイル。いいね、この響き」

そう言つて長門初谷は腕を胸の辺りまで上げてボクシングスタイル。

「ふざけやがって・・・！」

お決まりの文句で不良たちは長門初谷を威嚇し、途中で拾った、長さおよそ40センチの鉄パイプで殴りかかった。

「武器は無しですって」

ブン、と先ほどと同じような音が鳴る。

それと同時に、鉄パイプを持った不良の頭上から、首へかかと落としが直撃。

鉄パイプの軌道は上から下。

故に、上に飛び上がったのでは当たってしまう。

だが現実として長門初谷は上にいた。

カラン、という音とともに鉄パイプが地面に落ちた。

同時に頭がおかしな方向に曲がった不良の1人が倒れ込んだ。

素人でも死体と感知出来る死に方。

頸椎^{けいつい}の辺りが完全に折れ曲がっている。

それを認めるのと同じ時。長門初谷は落ちた鉄パイプを蹴り上げ、右手に備える。

コンマの静寂。

ゴグリ、と唾を飲む音が響く。

音は鳴らなかった。

否、音よりも速かった。

気がつけば辺りは血の海だった。

1人は顎から脳天に向かって鉄パイプを突き刺され、もう1人は正拳突き。いわゆるボディーブローにより拳から肘近くが腹部を貫通。

まさに一瞬の出来事。

瞬きをしていては見逃してしまう。

比喩でも誇張でも無い。

現実起きた、非現実。

時間にして1秒足らず。むろん長門初谷1人の仕業だった。

悲鳴を上げる暇も無い。

走馬灯を見る暇も無い。

鮮血を鏡の如く映し出し、そこに映るは返り血を浴びた赤い悪魔。赤いコートが赤に染まる。

「お腹空いたな。マズミちゃんの家にも行きましようか。あ、でも女の子の家に勝手に入るのもマズいな」

そう呟く殺人鬼。

ピチャ。

鮮血の液体が滴り落ちた。

長い長い夜の、一瞬の出来事。唯一の目撃者と言えば、夜空に煌く星と、一人の女性だった。

再生理論 第9話

辰の刻。ある少年が目を覚ました。

「ふわ〜」

大きなあくびをしながら伸びをする。

4月の前半。心地よい風と、桜が舞い散る。新しい生活が待ち受ける新年度。

それはこの少年。彼方眞澄も例外では無かった。

期待と不安と緊張が同時に来るこの時期は誰にとっても印象深い季節でもあるだろう。

「入学式か。緊張するな」

着替えのために新品の制服を眺める。やはり自分には少し大きいなと、それでも後で調度良くなるだろうなどと若者にしては珍しいことを考えていた。

狭い部屋の殆どをベッドが陣取っていた。

このベッドも入学に合わせて買った物だった。

シルバーの骨組に、下には何かを収納出来そうなスライド式の引き出しのある宮付きベッド。

運のいいことに、ベッドは部屋の一角にスッポリハマる形になったので、彼方眞澄の名を持つ少年は満足げな笑みを零していた。

他にも色々和新調したものはあったがどれもありきたりな物で、お洒落でもなく、それなりに地味な物だった。

落ち着いた部屋、たとえば聞こえは良いが、どこことなく寂しい気もするような部屋で、それこそ留年した大学生の1人暮らしとなんら変わらない生活臭のする空間だ。

少年は一通り部屋を見回してから、台所で朝食作りを始めた。

朝は簡単にフレンチトーストを。なんて、男子高校生らしからぬことを言いながら約10分。頭がクラクラするほど甘い香りを漂わせ、出来上がり。

「さて、食べようか」

そんな呑気なことを言っているのと同時刻。

ジリリリリ。ジリリリリ。ガチャ。

「なんだ」

「なんだ、とは随分な言い方ですね。久しぶりだって言つのに」

「来るのなら普通に来い。態々電話で来る必要ないだろ」

「あなた、自分で結界を張ったくせにそれを抜けると？」

「アンタなら出来るだろ」

「大変なんですよ。それなりにね」

チン。

今時珍しい黒電話の置く音が鳴った。

場所はアパート。浅香泉の住む所。

ソファには茶色い外套姿の女性が座っていた。

「ざっと、50年ぶりか」

浅香泉はその女性の方へと椅子をクルリと回した。

「まあそんなものです。正確には49年2か月13日ぶりです」

「いいよ。そんな細かいこと」

「細かいと今の仕事をこなすことは出来ませんよ」

「分かった分かった。それより、なんの用だ。まさか休暇を貰って遊びに来たとかじゃないよ

な？そんなことだったら今すぐ帰れ。私も忙しいんだ」

「まさか。私は前回、27年7カ月と9日前の休み以来休みを貰ってません」

「じゃあなんだ」

「仕事に決まっているでしょう？」

優雅に、上品に、ゆったりで話す女性。見た目は浅香泉より少し年上といった感じ。

長いストレートの髪が目立つ外国人。

名前はマリア・ファウスト。

「で、幹部の人間が態々。何なんだ？仕事の内容は」

「今回は比較的ラクだと思いますよ」

そう言っただけから一枚の写真を取り出す。

「長門初谷。あなたも聞いたことあるでしょう？」

その写真に写っているのは赤髪の男。カメラを見てピースサイン。

「・・・こいつか」

浅香泉は続けた。

「実際に会ってはいないが、恐らく純血だろう。仮に式神だとして、ここまで強力な式神を創れるのは本部の人間。それも幹部クラスでなければ出来ないことだろう？」

その話しに、コクリ、と頷いて見せるマリア。

「本部からの情報によれば、彼の能力は瞬間移動。自分の体を瞬時に移動させることが出来るそうよ」

そんな妖怪めいた人物の話を浅香泉は、酒の肴程度にしか聞いていなかった。

「・・・それだけならいいが」

「どういう意味？」

言葉だけの驚きに、気にするな、と浅香泉は制す。

「まあいいわ。それと、もうひとつ。私的にはこちらの方が重要だと思うわ」

「もうひとつだと？」

「仕方がありません。どちらも早急に対応しなければならないことですから」

少しの間。空気が流れる時間。

「『彼方眞澄への対処』です」

その言葉が発せられるのと同時に、2人の顔付きが変わった。

「・・・何故今なんだ？」

「本部の判断です。恐らく、このままでは何が起こるか分からない

から、という保身的な意味合いもあるのでしょうか」

「確かにな。理由はどうであれ、その判断には賛成だ」

その答えに、マリアは安堵の表情を見せた。

「それはいいが、本部はどうしろと？殺せとでも言ってきたか？」

「まさか。本部もそこまで残酷では無いわ」

「そうか？少し前まで魔女狩りと何ら変わらない策を講じてきた奴らがか？」

「それは仕方が無いわ。放っておいたらもっと多くの被害が出ていたのかもしれないもの」

その言葉に、反応せず、浅香泉はタバコに火を点けた。

「まあいいわ。私はこれで帰るわ。本部はあなたの判断に任せるって言ってたから、好きにして」

「そうか」

呟くように言うと、立ち上がって別の部屋へと入って行った。

それが、何となく、不貞腐れた子供のようにも見えてしまい、普段の落착きぶりからは考えられないことだった。

少しして、マリアは立ち上がってドアノブへと手を掛けた。

「じゃあ、お願いね。・・・ガブリエル」

その眩きは、扉の軋む音にかき消された。

再生理論 第10話

「以上、239名。本校への入学を認める」

そんな声が体育館に響いた。

いちいち、1人ひとり名前を呼んで返事をさせる。まるで軍隊のようだ。

そんなことはどうでも良かった。

このとき俺は神を恨んだ。

運命などと意味づけて、嫌がらせめいた偶然を起こす。

桐生さん、久しぶり、なんて、まるで同窓会で会った元友人に挨拶するかのような口調でアイツは俺に近寄ってきた。

偶然、というのか。しかし、ここを選んで失敗だった。

単に、事務所の近くだというだけで選んだこの高校の男女の割合は9：1。圧倒的に男子の多い学校で、それだけ男子が多ければ会う確率も高くなる。

自分で自分に腹が立つ。

しかし、それも、意外とすぐにおさまった。

今はとりあえずアイツと同じクラスで無いことを祈るばかりであったが、同じか否かということはすでに決定事項なので、俺が祈っても仕様が無いことだった。

『まあ、今更考えても』

なんて、諦め半分な思考で終わりにする。

「では、生徒は担任の先生の指示に従って教室の方へ戻って下さい」

そんな言葉が響くと、それまで静寂を保っていた空間がざわめき始め、暫くして、ゾロゾロと、まるで蟻の行列のように体育館の入口に生徒が向かっていった。

そんな中に入るのが嫌で、少し待っていると、不意に名前が呼ばれた。

「・・・何？」

「何？じゃないよ。桐生さん、久しぶりだね」

彼方眞澄がそこにいた。

「久しぶり」

「いやあ驚いたよ。桐生さんがこの高校だなんて。桐生さんならもつと上を狙えたんじゃない？」

ほんと、勝手だ。

久しぶり、なんてそっちが勝手に消えたんじゃないか。

桐生さん、桐生さん、と、こいつにイラついているのか、または高校を選んだ理由を話すのが面倒になったのか知らないが、思わずこう言ってしまった。

「苗字で呼ぶな」

そう言つて、悪態をついてみた。

そんなやりとりをしていると、いつの間にか人はいなくなっていた。体育館から出て行こうとするときに、後ろを振り返つてみた。

アイツは、何やら考え込んでいる様子で腕を組んで俯いていた。

「どうした？」

そう声を掛けると、ハッと顔を上げる。

「いや、何でもないよ。それより・・・カエデ、クラス一緒だね」

カエデ、と言う調子が、何となく無理をしている気がした。

言っているのは向こうなのに、こちらの方が気恥ずかしくなってしまう。

けど、何だかおかしくなつて、笑いそうなのを喉の奥で殺した。

ただ、そのあとの言葉によって一時洗脳されたような気分になった。

「・・・何だつて？」

「クラス、一緒。カエデ6組でしょ？」

再生理論 第11話（前書き）

前回更新から1か月以上も経ってしまった！

再生理論 第11話

「彼方眞澄」

「ハイ」

「桐生楓」

「・・・ハイ」

気だるさを声に出すと、ジャージ姿の担任教師はこちらを睨んだ。

だがそれに反応するのも面倒なので窓の外へと視界を向ける。

心地のいい風が入り込み、それが廊下へと抜けていった。

天気の良い日のことだった。

入学式が終わり教室へ戻ると、担任教師が出席を取り始めた。

理由はよく分からないが、恐らく先に帰った生徒。要するにバックした生徒がいないか確認しているためだろう。

「矢島巧」

「ハイ」

「よし、全員いるな」

廊下がガヤガヤとうるさい。他のクラスはホームルームが終わったのだろう。

先ほど連絡が入り、事務所には許可が下りない限り入れないことに

なつた。

面倒だとは思つたが、あまり興味がなかった。

ただ、目の前にその原因となる人物がいるということだけが、唯一の不満であつた。

選択肢は2つ。

今自分がいる現実を、真実だと信じ込み、何の気なしに生きて行くか。

楽しく仕事をして、楽しく遊んで、楽しく恋愛して、楽しく過ごす。

理想を目指して生きる人生は、もっとも意義のある生き方といっても過言ではないだろう。

それもそれで悪くはないだろう。

いや、むしろいいのかもしれない。

もう一つは、全てを知るか、だ。

普通に生きて、普通に死ぬか。

それとも、おとぎの国へ転がり込むのか。

ウサギを追いまわし、其処へ辿り付くか。

其処は虚実相互のトンネル。

世界の裏と表を繋ぐ連絡橋。

我は魔法使いと似て非なるモノ。

命を心に添えて、見事な程に現実を引き離す。

其は符を操りし者。

エデンを護りし熾の守護者。

『ピーツ。メッセージは1件です。メッセージを再生します。
浅香だ。いきなりで悪いな。君に用があつてな。電話したんだが、
そういえば今日は入学式だったな。まあそんなことはどうでもいい
か。今すぐアパートに来てくれないか。とても大事な用なんだ。
ピーツ』

そんな、本来ならば迷惑極まりないかつ自己中心的な内容のメッセージが入っていた。

しかし、人が人だけに行かなくては申し訳ない。

アサカさんといえば、僕の入院中の面倒事を全て片付けてくれた恩人。

行かないわけにはいかない。おまけにメッセージが入ったのは3時。1時間も待たせていることになる。

というわけで、僕は脱ぎかけた学ランを着直して出かける準備をする。

準備と言っても、先ほど学校の入学式から帰ってきたばかりなので何もすることが無い。

あえて言うなら、靴紐を結ぶくらいだろう。

と、玄関に腰をおろし、靴ひもを結んでいる最中の出来事だった。

何の素材だかは分からないが、見た目は頑丈そうな靴紐が、ブチッと音を立てて切れたのだ。

いや、そもそも昨日買った靴の紐が切れるなんてことがあるのか、と自問自答している矢先、早く行かなくては、という考えが浮かび、ソノダさんのお古のローファーを履いて玄関を出た。

このとき僕は気が付くべきだったのか。

再生理論 第12話

ガチャン、と黒電話の受話器を置いた。

「私は、好きにさせてもらっさ」

受けた依頼は2つ。ひとつは長門初谷のこと。殺すか、捕まえて本部に引き渡す。

もうひとつは、彼方眞澄のこと。こちらは私の判断に任せるらしい。煮るやり焼くなり好きにしろということだ。

それに、本部に引き渡せとは言わなかった。それは暗に『引き渡すな』ということだろう。

「煮るのも焼くのも好きではないからな。この方法しかないだろう。しかし・・・」

浅香泉は、フフ、と笑みをこぼす。

「アカシック・レコードか・・・。さすがに本部でも身近に置いておきたくないのかね」

静寂に包まれるなか、再び浅香泉は笑みをこぼす。

「何も無い、か……。楓も分かんとは、ますます興味が湧く」

「お邪魔します」

恐る恐る扉を開ける。

「ああ、いらっしやい。ソファーにでも掛けていてくれ。今お茶を持って行く」

奥からそう聞こえた。

相変わらず整理された廊下から居間まで行き、言われた通り、ソファに腰を下ろす。

そしてすぐにティーカップを持ったアサカさんが現れた。

「待たせたな。リラックスしていいぞ」

「すみません」

夕方、部屋の電気は付いていないため、薄暗い。

紅茶を啜る音が響くほど、このアパートは静かだった。

話しとはいつたい何だろうか。

「急に呼び出してすまないな。迷惑だったかな？」

「いえいえ。そんなことはないです」

「それは良かった。実はな、どうしてもと、友人から頼まれてな」

「ご友人、ですか」

この人の友人がほんの少し気になった。

少しの沈黙の後、アサカさんは口を開いた。

「君は、最近不思議な体験をしなかったか？」

唐突に、いや。唐突もいいとこだ。

危つく紅茶をアサカさん目がけて吹き出しそうになった。

そんなことを口走った女性は、いたって真面目だった。

「不思議な体験ですか？」

ああ、と、真面目に僕の目をじっと見る。

特に思い当たる節は無いので、いえ、特には。と否定を試みた。
すると、

「本当か？」

「え、ええ」

アサカさんは何故か疑っている。
そこまでして聞くことなのだろうか。

「そうか。では、君はなぜ入院したのか覚えているか？」

ここで、頭の上に“？”が浮かんだ。

何故ここで入院の理由が出てくるのか。

「覚えてますよ。もちろん。あれは・・・」

と、ここまで言って考えてしまった。

あれ？僕の入院理由って何だったけ？

入院の理由を忘れるなんてどうかしてしまったのだろうか。

「覚えていないか。では、その前に何かなかったか？」

「何か、ですか？」

「ああ。例えば、忘れものを取りに学校に行ってみたら、妙な転校生とバッタリ会ってしまったとか」

「ああ、そういえばそんなことも・・・」

その言葉を聞いて、ゾクリと、鳥肌が立つのが分かった。

なぜこの女性は知っているのか。

いや、そんなことは問題ではなかった。

疑問の矛先が自分に向いたのが分かった。

唐突もいいとこだ。

『何故僕はあのときのことを疑問に思わなかったのか』

夕方、ポツンと1人いた転校生。

ロッカーから響いたバカデカイ音。

何があった。

そして、何をした。

僕は次の日から、何食わぬ顔で、何も無かったように、普段通りの学生生活を送っていた。

ナニヲシタンダ。

疑問に思考が歪む。

「もう一度聞こう。君が入院した理由は？」

「それは・・・」

必死に考える。

そう、あれは確か・・・。

「後輩の、カナちゃんが、いて・・・」

そうだ。あの夜、なぜか僕の家には彼女がいた。

そして、奇妙な病院に入院した。

あの病院はいつたい？

呪血が、何？

呪術医？何だつて？

疑問に支配されていく。

体から脳まで。

疑問の答えが出ずに、脳が疼く。

イラつき、とは少し違う何かが襲ってくる。

僕は、いったいどうして疑問に思わなかったのだろう。

そして、今思う。

あれはいつたいなんだったのか。

「あの、――――」

ジリリリリリリ。

けたたましいベルの音。

テーブルの真ん中に置かれた黒電話が鳴りだした。

「その答えを知りたくないか？」

知識欲が駆り立てられる。

「おとぎの国を、覗きたくないか？」

探究心が、心の核となっている。

不敵に笑う彼女は、いつもの顔。

僕は、無意識に黒電話を取っていた。

『こちら本部。 ああ、成功したんだね。 では、始めようか。』

そう聞こえて、僕は気を失った。

眼が覚めたのはすぐで、変わった様子は無かった。

いや、変わったのは僕のほうだ。

再生理論 第13話

「お、この感じ。来てますか。うん。時間的にもいい。なんて言うか、吸血鬼が活動し始める時間帯？ 実際コウモリも飛んでますし、行きますか」

高層ビルの屋上。日もそろそろ沈む頃のことである。

非常に綺麗な夕焼けを前に、ニヤリと笑うそいつは、屋上のフェンスから飛び降りた。

赤いコートを、まるでコウモリのように広げて落下する様は、実に異様な光景だった。

そしてそのままコンクリートに激突する直前。

膝を曲げ、腰を曲げ、衝撃を十分に吸収し、そのまま勢いを横に受け流すようにして、まるでネコのように横の茂みの方に向かって跳ねた。

高さ的には、ビルの屋上なわけで、軽く30メートルは超えていた。

無傷で着地するそいつは、化け物と呼ばずになんと呼ぶか。

そして、茂みからは、いくら時間が経っても物音ひとつせず、時間が過ぎるばかり。

目撃者、1名。

20代前半の女性。

「では、まず最初の仕事だ。なに、簡単なことだ。ここの電話番号に電話して、私の名前を出せばいい」

「本当に、それだけですか？」

「ああ。強いて言うなら、聞いたことを一言一句、丸暗記か、それを簡潔にまとめるか、どちらかを選ぶくらいだ」

そんなことを言う辺り、この人は完全に僕を奴隷。もしくは便利な下僕辺りの地位に見ているんだろう。

実際その通りなので何も言い返せない。

「分かりました。では、早速かけてみます」

「待て。外で話せ。ここだと危険だ」

そう言われ、素直に出て行く。

アパートの敷地から出て、自分の家に向かいながら電話を掛ける。

「でも、ホントに変な番号」

1と0の羅列で、

「1、2、3、・・・20？」

20桁の番号なんて初めて見た。

長いコール音の後、出たのは若い男性だった。

再生理論 第14話（前書き）

狩猟日記、大幅修正しました。

8話～12話と14話～17話です。

出来れば見てやってください。

再生理論 第14話

小学校に上がって、暫く経った日のことだった。

その日は朝から憂鬱な天気だった。

晴れているわけでもなく、かといって雨が降るわけでもない。

はつきりしない中途半端な天気、長門初谷は嫌いだった。

『何事もハッキリ。0か100か』

そんなことを思いながらも、自然には抗えないことを知っていた幼少時代。

気を付けて、という母親の声を聞いて学校へと向かった。

家を出て右に曲がる。次に、その直線をずっとまっすぐ行って、コンビニを左に曲がって、歩道橋を渡ると学校が見えてくる。

それが彼のいつもの道のりだった。

大抵、小学生というのは近くに住んでいる友人。または、同じ地区内の人たちで班を成して登校するものだ。

お喋りを楽しみながら、ふざけ合いながら。

通勤する車などから見れば迷惑な行為ではあり、危険な行為だが、子供たちにしてみれば、自分が事故に遭うなど二の次で、事故に遭

うなどとは微塵も思っていない。

そんな無邪気さが、子供のいいところであり、成長に伴って徐々に薄れていくものである。

それは長門初谷も例外ではないはずだった。

「おい。チビ。お前何してんだ」

そんな言葉が、長門初谷に投げかけられた。

誰、と顔を上げると、そこにはいつもの友人。もとい知り合いの顔。

「おい、無視すんなよ」

長門初谷より頭一つ分大きい。

彼が大きいのでは無い。長門初谷が少しばかり小さいのだ。

「無視すんなって。チビのクセに」

成長ホルモンの異常。病名『成長ホルモン分泌不全性低身長症』。通称GHD。

ようするに、成長障害による低身長。

これが明らかになったのは最近。小学2年生の冬。

周りから、チビ、とバカにされるようになったのもこの頃だった。

当初、同級生の一部がバカにしていただけだったが、徐々に広がり、クラス全員が、そしてそれはさらに広がり、最終的にイジメに繋がった。

それに対して長門初谷は、

『どうせ、そのうち飽きるだろう』

と考え、無視を決め込んでいた。

最初は、比較的軽い、イジメの初歩的なことだった。

掃除のとき、机が運ばれていなかったり。

隣になった友人からは机を離される。

これらに対しても、長門初谷は無視していた。

しかし、それでは周りも面白くない。

そこで、もっと酷いことをして反応を楽しもうと、イジメは徐々にエスカレートしていった。

登校すると机が廊下に出されていたことは数え切れず。

体育の終わる度に彼の服は教室のゴミ箱に入っていたり、授業で使うノートや教科書にはラクガキで埋め尽くされていた。

なんてことは日常茶飯事で、高学年になると、暴力を振るわれるこ

とだってしばしば。

それでも長門初谷は耐えた。

親に心配は掛けたくない。掛けられなかったのだ。

長門初谷にとって、イジメは解決しようのない問題だった。

その理由が2つ。

ある日の、算数の授業中。担任が黙々と授業を進めている頃。

「先生、ナガト君が僕の消しゴムを盗みました」

そんな声が教室に響いた。

盗んだ、という言葉は語弊が有り、実際には“借りた”と言ったほうが正しい。

もちろん断りもいれた。むしろ向こうから、“貸してやるよ”と言っ
て来たのだ。

「ナガト。前に来い」

教師の低い声が響いた。

クスクスと、忍び笑いが後ろから聞こえてくる。

「お前は何度やったら気が済むんだ。いいか、盗むってことは犯罪だ。酷いことをすれば殺されてしまふ。お前は酷いことをした。本来ならば死刑なのだが・・・」

パシン！

容赦のない平手打ちが右頬を直撃した。

「これで許してやろう。みんなもいいな？」

「はい」

「さあ。分かったらさっさと席に戻れ」

中年男性。もとい教師。

長門初谷のイジメ。それは教師もグルになって行っており、これがイジメを解決出来ない理由の1つ。

教師という職は、ストレスの溜まる仕事だと、多くの人は言う。

子供の起こす問題。親からの理不尽な文句。それらの対応。同僚関係。

多くの問題を抱えながら、夜遅くまでデスクワークをこなす。

心的忙殺と呼ばれるほど、心理的ストレスが溜まる。

そんなとき、長門初谷は格好の的だったのだ。

誰かの物が無くなったとなれば、長門初谷に矛先が行く。

そして、理由はどうであれ、長門初谷が犯人になる。

絶好の攻撃対象で、ストレス発散の道具のようなものである。

そんな中、唯一安心出来るのは、自分の家。

「おかえり」

玄関を開けると聞こえてくる声。

家族は4人。

長門初谷の家は貧しかった。

母親が停職に就いていないことが原因だった。

けれど、母親が怠け者であつたりしたわけではない。

職に就くことが出来ない理由があったのだ。

そして、第2の理由。

長門初谷の病気。『成長ホルモン分泌不全性低身長症』とは、遺伝的障害が原因の一つに上げられる。

母親の遺伝子。染色体に異常があったのだ。

母親の病名。『ダウン症候群』。

ダウン症と呼ばれる、染色体異常を形成することで生じる先天性の疾患群。

低身長、肥満、筋力の弱さ、頸椎の不安定性、眼科的問題、難聴があり、ストレスから来るうつ症状を示す者もいる病。

治療については確立した方法はまだないが、治療法の有無など、治療費の払えない家族にとって関係の無いことだった。

そんな家族の家計を支えていたのは長門初谷の姉だった。

学校に通いながら、毎日夜遅くまでバイトをし、何とか生活をしていた。

そんなギリギリの生活。母親にはもちろん、長門初谷は、イジメの事実を誰にも話すことが出来なかった。

そうした状況に、打開策が出ることは無く、いつの間にか長門初谷は中学生になっていた。

しかし、回りは見知った顔が3から4割。

イジメがなくなる確率は、影響を考えても五分以下だと予想していた。

そして、入学式当日、帰りのホームルームが始まる前。

「ねえ君。ちょっと来てくれない？」

ふと顔を上げる。

見知らぬ声の主は、同じクラスの男子3人組み。

名前は、よく覚えていなかった。

トイレに来てくれと言われ、後を追って行った。

と、入ると同時に無理やり服を引っ張られて個室へと放り込まれた。

その衝撃で便器に頭を打ち、軽い眩暈に襲われた。

意識がグラつく中に聞いた会話は、こうだ。

「今だ。早く。そうだよ、それ。早く持ってこい」

「なあ、いいのかよ。こんなこと」

「構いやしないさ。それに、やらなかったら、俺達が同じ目に遇うのかもしれないんだぜ」

意識がハッキリしたのは、頭上から大量の水が降ってきてからだつた。

全身がズブ濡れた。服がいつもの倍以上重く感じる。

暫く呆然とした後、個室から出ようとしたときだった。

扉を押す。が開かない。

次に引いてみると、また開かない。

閉じ込められた。

上を見上げると、個室の扉は異様に高い。

便器に乗ってよじ登れる高さではなかった。

諦めて、便器に座って頂垂れた。

そうしたとき、腹の底から込み上げてくるものがあった。

「・・・期待するんじゃない」

そう呟き、目から涙が一滴だけ零れた。

長門初谷を見つけたのは、放課後、見回りに来た教師だった。

結局、小学生時代と変わることのない。いや、エスカレーターした生活が始まった。

再生理論 第15話

中学に上がってから1年が経とうとしていた。

行ってきます、と、いつも通り笑顔で家を出る。

その日の天気はくもりのち雨。

姉も、雨が降るかも。早く帰ってきたな。と、傘を差し出す代わりにそう言った。

中途半端な空に対し、憂鬱な気分で家を出る彼。

学校に着くと、上履きが無くなっていた。

そして、“いつも通り” 1日裸足で生活を送る。

もはや日常化してしまっていたイジメは留まることをしらなかった。
止めようとする教師すらいなかったのだ。

雨が降り出したのは帰りのHRが終わったころだった。

「ただいま」

雨が降っていたためか、帰りはとくに何事もなく帰宅。

が、家はどこことなく、自分の家ではない気がした。

しかし、表札には長門の文字が刻まれており、間違いなく自分の家である。

シーンと静まり返る家。

“おかえり”という声がいつまで経っても聞こえてこなかったのを、不思議に思った。

買い物にでも行ったのかと思ったが、靴はあった。

玄関に一步入ると、異様にジメジメした、粘つくような湿気があった。

嫌な予感というものは大抵当たることを、彼は当時から知っていて、このときひしひしと感じ取っていた。

玄関で靴を脱ぐのと同じ時、生臭い匂いが充満していることに気がついた。

いやに静かで、いつもは自分の部屋に向かうはずだったが、学生力バンを置くのも忘れて居間へと向かった。

- - - - -そこは、赤か
った。

夥しい血液が居間を侵食し、鼻孔を突く、濃厚な匂いに脳が揺れる。
所々にあるモノから、今なおじわじわと流れる赤い液体。

家具類から、床から壁。壁から天井が赤色で染まり、まるで異界に
でも迷いこんだかのような景色。

「- - - - -え」

茫然と立ち尽くす。訳が分からなかった。

バラバラ死体、という言葉では生ぬるい、四肢が体から離れているような分かりやすいものではなく、文字通りバラバラに、数十センチずつくらいに、無数に肉片らしき物が飛び散っていた。

「おかえり。早かったわね」

ここで初めて、目の前に人がいたことに気がついた。

「・・・」

お嬢様めいた雅さで、赤い液体をペロリと舐める。

「見られちゃったら、仕方がないわね」

血が唇から零れる。

「・・・フフ」

彼女は、これ以上ないくらい優雅に。

「
・
・
・
フ
フ
フ
」

歌^{わら}
っ
た。

再生理論 第16話

「アサカさん、ありましたよ」

「貸してくれ。まったく、どうも地味な作業は苦手だ」

「というか、アサカさん、殆どコーヒーを啜ってるだけじゃないですか」

「これも仕事のひとつだ」

そう言うと、やっとやる気を出してくれたのか、タバコの灰を揉み消し立ち上がった。

正直、20数年分の新聞から、1人の名前を探し出すのは容易なことではなかった。

この部屋にはパソコンは無い。いやあるのだが、インターネット回線が引かれていない。

ネットカフェにでも行けばいいんじゃないかという提案は、無言で否定された。

「“惨殺事件”か。ベタなネーミングだな」

そんな見出しにダメ出ししつつ、パラリとページをめくる。

「まさか、長門初谷の名前が15年前にも出ていたなんてな。よくマスコミが嗅ぎ付けなかった。小さな事件だから、とは説明しにくい、どうでもいいか」

几帳面そうで、案外面倒くさがり屋な人だ。とは口に出さずにおく。

「それで、どんな感じですか？その事件の概要は」

「至ってシンプルな事件だ。長門家の長女。長門岬^{ゆり}が母親の長門純^{すみ}を殺害。その方法は未だ分かっていない」

「確かにシンプルですけど、嫌な事件ですね」

家族を殺す、なんて、イマドキ珍しくもないんだろうけど、やはり親族を殺すというのはイメージが悪い。いや、イメージの問題では無いんだろうけど。

「お前さ、事件に嫌もクソもないだろう。いい事件なんても、今までにあったか？」

「そりゃないですけど」

事件を定義すると、“問題となるような出来事”だ。

問題になるような出来事で良いことなんて、恐らくないだろう。

「まあ、どちらかと言えば、この事件は“嫌な”方に分類されるだろう」

「嫌なほうって、何かあったんですか？」

「ああ。なんでも、通報を受けた警察が駆けつけたとき、居間は血の海と化していたそうだ。床から天井まで。壁紙が元から赤いんじゃないかっていうくらいにね」

「でも、犠牲者は長門初谷と長女を除いた家族全員ですよ？何人家族かは知りませんが、血の海くらいにはなるんじゃないんですか？」

想像すると吐き気がするが、惨殺というと、イメージ的にはそっちの方がしっくりくる。

「それがな、犠牲者は1人だけなんだ。さっきも言っただろ？“長門岬が母親を殺害した”と。血も全て母親のものだったそうだ」

「ってことは、1人の血で部屋を血の海に、ってことですか？それはありえないと思いますけど」

僕の反論を無視して、本日3本目のタバコに火をつける。

「死体の状況は、俗に言うバラバラ死体で、まるでミンチにされたくらいに、見事にバラバラだったらしい。まったく。誇張された記事なんか読みたくないな」

「それにしても、よく被害者が1人だけで済みましたね」

「狙いが母親だったらしいからな。計画を立てた上で、それ以外の殺人は犯さず、と記事に書いてある」

カサリ、とアサカさんが新聞をめくった。

「狙いが母親、なんて、まるで犯人に聞いたみたいですね」

「信用出来ないか？」

「ええ。だって、未だに捕まっていないのに、どうして『狙いは母親だった』とか『計画を立てた』なんてことが分かるんですか？証明になるような物でも見つかったんですか？」

「あのね、証明になるようなものっていうのを証拠って言うの。それに、この事件には目撃者がいたんだよ」

え?!と素で声を出してしまうほど驚いた。

対してアサカさんは澄ました顔でコーヒーを啜っている。

「目撃者って、近所の人とかですか？家族はいなかったんですよ？いたらさすがに気がつきますもんね」

殺人の起きたとき、家にいれば、いくらなんでも物音で気が付く筈と予想していて当然だろう。

しかし、アサカさんの発言でそんな勝手な憶測はぶち壊された。

「いたよ。殺人現場は居間だ。2階にいれば、そう奇妙な物音がしない限り不審には思わないだろう？他の家族がいれば尚更だ」

確かにそうだろうけど、ということとは。

「あの、まさか、家に家族がいるのに、その家の中で殺人を犯したんですか？」

ああ、と言うアサカさんはいつも通り澄ました顔。

まさか、というか、なんだろう。このキモチ。

更に、気が付いたことがもうひとつ。
第六感でヤツ。

「あの、その目撃者ってまさか・・・」

「長門初谷。のちにY市一の殺人鬼となる、幼い少年だ」

ああ、なんていうか、さすがに、驚きとかを通り越して、ただ黙ることしか出来なかった。

いや、とりあえず意識を保てたことを褒めてもらいたいくらいだ。

再生理論 第17話

緩い下り坂に沿うように、似たような住宅が並んでいる。特に目立った家も無く、それぞれが微妙に違う形をしていた。

ほとんどの家庭が、サラリーマンが必死に仕事をしてようやく買った、というふうに見れた。

そう思うのも、当の本人も同じような家を、必死に仕事をしてようやく買ったのが先月のことだったからだ。

正午過ぎ、昼の眠気に襲われるよりも早く、石島いしじまはいつもの仕事場に向かった。

「あ、ここでいいです」

と言ってタクシーから降りた。

集合場所と決めていた場所ではないところに、待ち合わせの相手がいたからだ。

タクシーのドアが閉まる音に気が付き、振り向いたのは、少しばかり若い刑事だった。

「あ、石島さん。御苦労さまです」

抑揚の抑えた声だった。

「これから御苦労するんだけどな。で、どうだった？」

それを聞いた若い刑事は頷いて手帳を開いた。

「石島さんの言ったとおりでした。長門初谷確かに医師を志していました。

県内の大学に進学したかったそうですが、経済的に苦しいという理由で断念し、独学で学んだそうです」

ここで一呼吸置いて、また話始めた。

「このときすでに、校内の成績はトップクラスで、全国統一の模擬試験では上位。特に理系がズバ抜けていたそうです」

以上です。と言って、若い刑事、酒井は手帳を閉じた。

それを石島は腕を組んで聞いていた。

「そうか。それはご苦労だったな」

酒井は、恐縮です。と言って頭を下げた。

ここ数年、巷を騒がせている事件は、正直な所行き詰っている。

数えきれない程の目撃件数は、殆ど役に立っていなかった。

一定の場所に留まるわけでもなく、特定のルートを移動しているわけでもない。

目撃される場所はまちまちだが、最近は一県で頻繁に目撃されている。

「長門には、何か目的があるんでしょうか？」

「ハア？」

酒井が言った言葉があまりにも唐突過ぎたため、石島はおかしな声を出した。

「動機が、はつきりしてこないんです」

そう言つて腕を組んで俯いた。

「動機ねえ……。精神に問題があるんじゃないのか？」

珍しい話ではない。

精神を病んだ人間が狂気し、殺人に手を出すなんてのは。

自覚がないが、すでに精神的におかしいという人間もごまんという。

石島はその類の事件じゃないのかと、自信はないがそう踏んでいた。

「もしくは、幼少の頃に酷くイジメられて、その復讐とか」

「じゃあなぜもつと早く“殺す”という感情が芽生えなかったんでしょうか。卒業してからは学生時代の友人とは縁を切ったはずですが、それがなんで今になって殺人なんていう行為をしようなんて思ったんでしょう」

反論されてか、石島は不満を顔に出した。

そもそも今言った意見は適当に言っただけで、特に根拠があるわけではないのだ。

調べを進める内に、長門初谷という人物は幼少時代に同級生。また他は他のクラスから酷いイジメをうけていたことが分かった。

当初、上の意見では『イジメに対する復讐ではないのか』というものだったが、被害者はどれも長門と繋がりのない人たちばかりで、それを報告すると『では復讐するならば誰でもよく、自分は強いんだという自己主張に似た物だ』という、なんとも適当な意見しか出してこなかった。

「上の意見なんかアテにしてなかったけどな。それにしてもこの事件、厄介というか。なんというか、な」

「そうですね。死んだ人間が生き返ったわけですからね」

「まあ書類の上ではな」

15年前、長門初谷の母親の純は、長女のユリに殺害されている。

帰宅した、当時少年だった長門初谷は、その死体を見てパニックを起こし、家を飛び出したという報告がされている。

そのとき、運悪く乗用車が通り掛かりはねられてしまった。

目撃証言では、長門宅から1人の少年が道路に飛び出したらしい。その目撃された少年の特徴が長門初谷と一致したのだ。

長門初谷を撥ねた車は急ブレーキをかけたが、雨が降っていたためにスリップしてしまった。さらに運の悪いことに、対向車線を走っていた大型タンクローリーに衝突し、炎上、爆発。

タンクローリーの運転手のみが重体となり、病院に搬送され何とか命を取り留めた。

しかし、現場の状況は凄まじく、乗用車の運転手と長門初谷はその場で即死。

長門初谷に至っては、死体すら見つからない状態だった。

事故後、いくら搜索しても死体は見つからず行方不明とされ、生死不明の失踪期間が7年以上経った。
法律上の死亡である。

しかし近年、突如として現れた殺人鬼が、自分は長門初谷だと名乗ったのである。

最初の被害者の傍に手紙が残されていた。

『手を加えし者としてこれを残す。 長門初谷』

そしてその手紙に残されていた指紋が、死亡とされていた長門初谷のものと一致したのだ。

「動機さえ分ればどうにかなりそうですね。それにしても石島さん、よく分かりましたね」

「何がだ？」

酒井が腕を解いた。

「長門初谷が医師を目指していたことです。そんな話し、一度も出てきていないのに」

「ああ、それはだな」

石島は答えに困った。

知らない男から聞いた、なんて言っても信じてはくれないだろう。

「まああれだ。刑事の勘というやつだ」

酒井は顔をしかめて、溜息と同時に、そういうことにしておきます。と言った。

この酒井という男は中々話しの分かる男だ。

余計なことは聞かず、必要なことだけを。

言いづらいことは聞かずに察するという、刑事に必要な能力を、先天的か、後天的かは分からないが、この男は身につけているのだ。

数週間前、俺の『長門視野は、医者を目指してたんじゃないか』という意見に対して、酒井は特に探ろうとするわけでもなく、不思議そうな顔をしてから『長門初谷の友人に聞いてみます』と言ってジャケットを羽織った。

本当に苦勞をかけたが、これで裏を取ることが出来たため、正式な報告書をつくれる。

「それで、これから長門初谷の教師だった男に会いに行くんですね」

不意に声をかけられ、まともな返事が出来なかった。

「今日はそのために来たんですよね？」

「あ、ああ。そうだったな」

「もう。しっかりしてくださいよ。また長門初谷に逃げられていますよ」

それは2年前のことだった。

「追い詰めたぞ、長門初谷。いい加減諦めろ」

「刑事さん。あんた強気じゃん。俺殺人鬼だよ？もつと怖がったら？」

そんなやりとりをしたのは、狭い路地裏の行き止まりになったところだった。

拳銃を構える先には長門初谷と壁。その壁も、高さは優に4メートルはある。

よじ登ろうとしたところで無理な高さだ。

「ここで撃ち殺されなくなったら、大人しく壁に手について屈め。抵抗しなければ手荒らな真似はしない」

「そう。意外と優しいんだな。あんた。でもさ、ここで捕まったら俺、処刑台行きじゃん？だったら何の意味も無いじゃん」

「・・・それは裁判で決めることだ」

「嘘だな。まあ俺がここであんたを殺すっていう選択肢もあるわけだ」

ニヤリと笑うそいつは、およそ人間の出せる殺気ではなかった。

それに石島はまったく動じず、拳銃を構えたまま逃げようともせず、口を開いた。

「それは無理な話だ」

「どうして？」

「俺は銃を持つてる。お前は丸腰。弾を避けられるんなら話は別だけどな」

そう言つて数秒。パンという銃声が木霊した。

引き金を引いた音に間違いなく、それは長門初谷に向けられた物。

しかし、そこに長門初谷の姿は無い。

チツ。避けやがった。と心の中で思う暇もなく、壁の上にいる長門初谷に向けて立て続けに引き金を引いた。

2発。3発と、鋭い銃声が響く中、長門初谷に当たった弾はゼロ。合計6発。弾が切れるまで撃ち続けた結果、周囲の壁に傷をつけただけだった。

「だから。無理。そんなものが当たるくらいなら俺、とっくに死んでますよ」

溜息を付きながら、長門初谷は不適に笑った。

対して石島は、弾の切れた拳銃を仕舞うと同時にあるものを取り出した。

「じゃあ、これはどうだ」

楕円形の、不格好なものは、パツと見手榴弾のようだった。

しかし、それに間違いはなく“手製の手榴弾”であり、狭い路地で

の威力は拳銃とは比べモノにならない。

「それ、刑事が持つ者じゃないでしょ」

「まあな。だけど、作るくらいなら誰にでも出来るさ」

そう言って、ピンを引き抜いた。

「殺人鬼相手なら、正当防衛とでも言えるしな」

「でも、手榴弾を作るとは違法だろ？」

そう言いきらぬ内に、石島は手榴弾を投げた。

約2秒後、先ほどの乾いた音とは逆に、ドガンという音と、飛散した破片が壁にぶつかる音がした。

逃げ場は無い。三方を壁に囲まれ、残りは自分が塞いでいる。かならず直撃するはずだった。

しかし、

「だから、死にませんで。そんなんじゃない」

そんな声が頭上からかけられた。

いつの間にか長門初谷は頭上にいた。そしてそのまま重力に身を任せるようにして、踵落としの体制のまま落ちてくる。

それを石島は寸前の所で、後方に体を反らすようにして間一髪のところで避けた。

「へえ。やるじゃん。格闘技でもやってたのか？」

そんな呑気な言葉とは裏腹に、懐に入っただのを良いことに長門初谷は死角からのアッパーを狙った。

それを無理やり体を捻って躲す。

躲されたことに驚きつつも、逆の手で首を狙って手を伸ばしたそのときだった。

ガツチリとその手を掴まれた。

2度も死角からの攻撃を躲した上に、追い打ちのために伸ばした手を掴んだのだ。

「お前、まさか・・・」

何かを言いかけたそのとき、『おい、こっちだ！』という、声が響いた。

応援に駆け付けた警察が集まって来たのだ。

長門初谷は小さく舌打ちをし、石島を睨むと、どこかへ消えてしまった。

再生理論 第18話

「お邪魔しました」

そう言つて扉を閉めた。

外に出ると雨が降っていた。

どしゃぶりだ。これではあまり傘の意味がないが、ないよりマシと思ひ傘を広げた。

階段を降りて、道に出ると、1人の女性が仰向けで倒れていた。

激しい雨に打たれて、びしょ濡れになっていた。

年齢は20（ハタチ）くらいで、穏やかな顔つきをしている。青白い顔をしていたため直感的に死んでいるのかと思つたが、脈はしっかりとしていた。

彼女を背負い、傘を肩の辺りに挟んでアパートに戻つた。
見た目以上に華奢なその体は驚くほど軽かつた。

そして、玄関まで着いたところで彼女は眼を覚ました。

「あの」

「あ、気が付いた？」

「あなたは？」

彼女は割と落ち付いた様子で僕に問いかけてきた。

僕は自分の名前と、誤解を招かぬように、道端に倒れていたこと。雨に打たれてびしょ濡れになっていたので最寄りである知人のアパートに運ぼうとしたことを伝えた。

アパートに入ると、アサカさんは先ほどと変わらずコーヒを啜っていた。

とりあえず要件を伝えると、『シャワーでも浴びてきなさい』とぶっきらぼうに放った。

「さてと。お前も厄介なの拾って来たな」

彼女がお風呂に入っただのを確認すると、アサカさんは口を開いた。

「厄介って。そんな言い方ないじゃないですか」

「いいや。厄介だ。ただの小娘ならまだしも、あれがねえ」

そう言うアサカさんは、迷惑そうな口ぶりだが、内心楽しんでいるように見えた。

「・・・何かあるんですか？」

「まあな。あの手の人間は稀だからな。・・・お前、結界が張ってあること、忘れたんじゃないだろうな」

そうだ。このアパートには結界が張ってある。無用なものを入れなためだとアサカさんは話していたが。

普通の人間には見ることも、触れることさえも叶わない壁がある。それがここの結界だ。

「結界が効かないってことは、普通じゃないってことだ。それもありね」

「結界の効果が薄くなっていたとかってことはないんですか？」

「お前、私をバカにしてるだろう。まったく・・・。」

ため息をひとつ吐いて、こう言い放った。

「自分の家で人が死んだら、誰だっていやだろう」

それから暫くして、シャワーの音が止んだ。

少ししてから、少し濡れた長髪をそのままに、彼女はアサカさんの服を着て出てきた。

「大丈夫？」

僕がそう尋ねると、彼女は元気になったようで、無防備な笑みを向けた。

「ええ。大丈夫です。ありがとうございます」

「そう。よかった」

彼女はもう一度微笑み、アサカさんの方を向いた。

その瞬間、彼女の顔が歪んだ。

恐怖。憎悪。嫌悪。その全てが混ざり合ったような。まさにそんな歪みがあった。

「・・・元気になって良かった。服のサイズもちょうど良さそうだな」

「はい・・・。大丈夫です。ありがとう、ございました」

そう言いながら、彼女の顔は徐々に青ざめていき、アサカさんが立ち上がると彼女は脇目も振らず、アパートを飛び出していった。

「あ・・・!」

雨はまだ降り続けている。そんな中、彼女は傘も持たずに逃げるようにして走り去った。

「もう！何したんですか！？危害が無いなら、ここにいても問題はない筈でしょう!？」

「何も。ただあいつが勝手に私の記憶を読もうとした。だから、頭から追い返した」

澄ました顔のままアサカさんは慣れた手つきでコーヒーを淹れている。

「今までで初めてだったんだろうな。追い出されるなんて。それに、

逆に感謝してほしいくらいなんだがね」

「感謝なんて・・・」

「あいつね、あのままだったら死んでたよ」

思いもよらぬ言葉に、僕は目を丸くした。

「死ぬ？そんなこと・・・」

「あるよ。人間、情報量の処理には限界があるんだ。パソコンだって、ありえない情報量を一度に処理しようとすると、フリーズするだろ？それと同じだ。パソコンしかり。脳しかり。どっちも似たようなものだ」

「・・・意味が分かりません。だって・・・、ただの記憶でしょう？」

「ただの記憶だ。だからこそ危ないんだ。脳が死ぬってことは、人そのものが死ぬのと変わらん。概念的には別だが。逆に、心臓が停止 死というものもあるがね。医学的には“生命活動が不可逆的に止まる”というのが死の定義だ。死の定義程分かりやすいものはないね。死者は蘇れないってことを大々的に発表してるんだから。話が逸れたな。記憶の何が危ないか。それはフィルターが無いからだ」

「フィルターが無いって、どういうことですか？」

「そのままだよ。例えば、軽く腕を殴ったとしよう。痛みは感じるだろう？ただ、それは大した痛みでは無い。それは何故か。神経まで刺激があまり届いていないからだ。では何故届かないのか。それはね、間に皮膚というフィルターがあるからだ。まあこれは外部からの物に対してだが。・・・脳にフィルターは無い。だから、記憶は入ることが出来る。邪魔されることなくすんなりとね。ただ、入った先はいつぱいで、これ以上は入ることが出来ない場所だとしたら、戻るしかない。しかし、記憶の場合、戻るといった概念はない。戻れるとか、戻れないの問題じゃない。入れることしか出来ないんだよ。記憶ってやつはさ。人間は、一度脳に入れたものを失くすことはない。どこに仕舞ったか忘れるだけだ。人間精々生きても100年前後。その間に、脳の容量以上の情報は入らない。だから、脳に耐性が無い。パンクしたら、そこまでってことだ」

「でも、脳の容量って無限ではないんですか？」

「無限ではないとは言いい切れない。しかし、一度にそう多くの情報は記憶出来ない。それが脳というものだ。・・・少し実験してみるか。お前さ、今から20個数字言っから、暗記してみな」

「え？あ、はい」

そう予告してから、アサカさんは0～9までの数字をランダムに言っっていた。

無論、そんな覚えられないはずがない。

「よし。じゃあ最初から言ってみな」

「えつと……。ダメです忘れちゃいました」

「まあそんなもんだろ。最初の数字はね、4だ」

そう言われると、そんな気がした。

「一度脳に入っただ。忘れないってことは、きっかけがあれば思い出せるってことだ。今4と言ったから、思い出すことが出来たんだ。もう一度言えば、3桁目までは余裕で暗記することが出来るはずだ。このように、脳は何度もある事柄を繰り返し返すことによって印象を強め、安易に思い出すことが可能になる。そうして、人は訓練を繰り返しながら徐々に覚えられる数、個数を増やしていくことができる。彼女の場合、この過程がない。繰り返しを必要としない。彼女は雑多な記憶として扱うのではなく、当然のこととして記憶を扱うんだ。自分の名前のようにね。だから、どんなに数が多かろうと、複雑であろうとも関係のないことになる。ただ、それがね、人間の限界を超えた莫大な量となると話は別だ。一生かけても覚えられない記憶を、一瞬にして脳に詰め込むんだ。自殺行為もいいところだ」

驚いた。そんなことで人は死ぬのかということ、どうしてアサカさんがそんな記憶を持っているのかということも含めて。

そこまで説明を受けて僕は、そうですか。としか言えなかった。

「人間のくせに他人の記憶を読み取ることが出来る。恐らく系統だるう」

彼女のことは分かった。

ただ、問題は別にあった。

再生理論 第19話

シャワーを浴びてから一杯やる。それが山内雅史やまうち まさしの日課だった。

喉の渴きを潤す酒がここまで旨いものだと感じいたのは30を過ぎてからだった。

それまで彼は酒というものに無縁だったのだ。

元々人づきあいが苦手で積極性も無いため友人と呼べる者は殆どおらず、中学、高校とイジメに近い扱いを受けていた。

部活動にも参加せず、余計に積極性のなさに拍車が掛かった。

教師になってからも、イジメこそはないものの、似たようなものだった。

故に飲み会など、片手に足りる程度の回数だった。

学生時代から人生はあまり変わっていなかったが、それなりに慣れた気がしていた。

10年余り、自分の人生ほど憂鬱という言葉があつた人間はいないだろうと、彼は自嘲気味に感じていた。

そうして彼が教師になってから7年が過ぎた頃、ある事件が起きた。

新しく自分が担任を受け持つことになったクラスに、障害を持った子がいるということが分かったのだ。

生徒の名前は長門初谷。

障害といってもただの低身長症だということを聞いて、安心した。

もしも知的障害などの生徒だったら余計な手間が掛かる。しかし、低身長症ならば、他の生徒とさほど変わらないので問題はない。

そんな思いが彼にはあった。

初日。長門初谷を見て、なるほどと思った。

明らかにクラスメイトに比べて小さい。それも2、3センチではない。10センチ程の差はゆうにあった。

さらに、その日分かったことがあった。

長門初谷はいじめられているということだった。

長門初谷は何か発言するわけではなく、何か特別な行為もなく、ただ周りが淡々といじめているのだ。それも男女見境なく、クラス全員がだ。罪悪感も感じていないようだった。

無視を決めつけるなどという易しいものではなく、それはいじめが長く続いている証拠でもあった。

もしこのいじめを解決しようとするれば、恐らく矛先は自分に向く。見て見ぬふり。それがこれまでの経験上一番だと思っていた。しかもっといい方法を思いついた。

自分もいじめに加担することだった。

これは、日頃のストレスを解消するには最高の方法だと思った。

これまでもイジメのあるクラスを受け持ったことはあった。しかしどれもこれも今回ほど酷くもなく、個人、またはその周辺のグループがイジメを行っているだけだった。

だから、今回ほど酷いイジメはむしろチャンスだと思ったのだ。

初めては算数の授業中だった。

ある生徒が、長門初谷に消しゴムを盗まれたと言った。

山内に本当かどうかは興味が無かった。

長門初谷を呼んだ。

そうして適当に何かを言って、頬をぶった。

そのとき響いた音と掌に残る衝撃は、これ以上にないくらいに心地の良いものだった。

癖になりそうだと思ったが、さすがに外傷の残るような行為は避けようと、それ以来手は出さなかった。

その代わりに、教師という生徒には無い権限を使って何度も酷いことをした。

掃除当番はもちろんのごとく、ほとんどが長門初谷になり、何かの罰だといって強制的にやらせた。

悪いことだとは分かってる。だから何だと言っただ。

自分のやっていることが裁かれるならば、今まで自分を蔑ろにし、口々に相手をしなかった人間も裁かれるべきだ。

それが平等ってやつだ。

山内はそう心の中で思っていた。

そうしてこの日の夜。コンビニで初めて酒を買った。

高揚した気分に加え、風呂上がりで喉が異常に乾いていたせいで、それは本当に旨いと感じた。

これから少なくとも1年はこうした気分が味わえるのだと思うと、これまでの人生などどうでもいいように思えてきた。

結局そのクラスを2年間受け持った。そうして彼はほぼ毎日、帰りの途中のコンビニで酒を購入した。

それ以来、風呂上がりに酒を飲まないで眠れなくなってしまったのだ。

そうした習慣が20年も続いていた。

先の健康診断では、酒を控えるように言われたが、それは無理だった。

酒を飲むたびにあのときの記憶が蘇ってくる。酒は、自分になくはないものだった。

そして今日も目が覚めると、顔色はそう良くはなかった。体質のせいか、いつものことだ。

最初は驚いたが、今は慣れた。どうってことはない。二日酔いの類だと自分に言い聞かせて納得した。

天気は晴れというわけでもないが、曇りというほど太陽が隠れているわけでもなかった。

今日はせっかくの日曜だ。しかし、日曜だからといってどこかに出掛ける予定もない山内は、また布団に潜ろうとした。そのときだった。

ドアにつけられたインターホンが鳴った。

それは本当に久しぶりのことだった。

訪問者など、ここ何年もない。

ドアを不用心に開けると、そこには警察らしき人物が2人立っていた。

再生理論 第20話

インターホンを押して暫く、小太りの男が怪訝そうな表情で出てきた。

「警察の者ですが」

酒井がそう言いながら手帳を見せた。
それをちらりと男は見た。

「長門初谷の件でお聞きしたいことがいくつかありまして・・・」

「はぁ・・・」

長門初谷の名前を出したところで、男の表情に一瞬焦りが見えたのを石島は見逃さなかった。

「ご存じですよね？」

「ええ。もちろん。一応生徒でしたから」

そう言ったところで、男の顔が青白いことに気が付いた。

「お酒を飲まれました？」

警察が来たことに動揺しているのかと思い、訊いた。

「ええ。まあ」

二日酔いか。

酒を飲んだ次の日はたまにこうなることがある。一昨日の朝は自分もそんな感じだったことを思い出した。

そつと家の奥を見ると、乱雑に何本もの缶ビールが転がっていた。

複数の証言からこの男が昔長門初谷の担任をしているところに長門初谷をいじめていたことが分かっている。

「まず最初に確認しておきたいことがあります。これから質問するいくつかの内容に関して我々警察は一切罪を問いません。それをよく理解して頂きたい。いいですね？」

山内はこちらの要件を察したのだろうか。少し間を置いてから頷いた。

「あなたが長門初谷の担任を受け持っていた頃、長門初谷はクラスでいじめを受けていたという証言を当時生徒だった方数名から聞くことが出来ました。それはご存じでしたか？」

「ええ・・・」

歯切れの悪い返事が返ってきた。額には汗が滲んでいた。冷や汗か、または単に暑いからなのかは分からなかった。

「それと同時に、あなたもそれに加担していたという証言も同じように取れました。このことに何か間違いはありませんか？」

「いえ。あの……。そのことに関してはですね……」

「もう一度言います。警察は一切罪を問いません。あなたがどのような卑劣な行為を当時していたと、被害届けは出されていません。恐らく証拠ありませんから。言い訳など結構です。今はそれよりも大変な事件を追っているんです。それを理解して頂きたい。確認の意味で聞きます。貴方は当時、長門初谷のいじめに加担していましたね？」

石島が厳しい口調でそう口にした。

山内は先ほどよりさらに間を開けて、はい。とだけ答えた。顔が青い。緊張しているのだろう。

まるで生徒が説教を受けているようだと思っただ。

「分かりました。では次の質問です」

「え？あの……。長門初谷のことだけじゃないんですか？」

「ええ。そうです。ちょっと、これを見てもらえますか？」

そう言つて酒井はA4の大きさの紙を3枚渡した。
それは30名ほどの名前が載つた名簿だった。

「その名前に心当たりは？全部でなくてもいいです。1人でも2人でも」

「・・・ええ。あります」

「あなたの元生徒、ですね？」

そうです。と、山内は不安げに頷いた。恐らく忘れてしまった名前があつたのかもしれないが、それは些細な問題だ。

「これは実は、長門初谷に殺害された被害者の名簿の一部なんです」

細かつた目を大きく見開いている。

今まで10数年間受け持ってきた生徒の名簿と長門初谷に殺害された者の名簿が一致するなど、夢にも思わないだろう。

恐らく山内は自分の生徒だった者が死んだとしても、大して気に留めず、テレビで放映されてもまったく気にしなかった。それ故の驚きだろう。

「長門初谷の殺害には法則が無い。確かに全て長門初谷という人間に関係のないものばかりが殺されていた。しかし、そこにこのあなたという教師が関わった。それで全てが見えてきたんです」

長門初谷の殺人は無差別ではない。狙いがあるのだ。

「今見せた名簿は本当にほんの一部。後々全て確認を取っていただきますが、その被害者と長門初谷の繋がりが、あなたです。被害者は全てあなたの元生徒だったんです」

当初、それに気が付く者は誰もいなかった。

山内の名前が挙がった後、暫く経ってからのことだった。

被害者はその地域ごとに、1日1〜3人ずつなどハイペースで殺され、そして間を置いてまた別の地域でハイペースに殺人が犯されてきた。それを繰り返し行うのが長門初谷の殺人だった。

殺人を行う期間に殺された人間の通っていた学校が共通していることは気が付いたが、あまり重要視されてこなかった。しかし長門初谷の幼少時代を調べているうちに山内の名が挙がり、そこからは早かった。

しかしここでおかしなことが起きたのだ。

酒井はその問題の内容を語ろうと口を開いた。

「大場宏おおはひろという方をご存じですか？いえ、ご存じですよね？」

「え、ええ・・・」

「彼も長門初谷同様にあなたからいじめを受けていた、あなたの生徒。間違いありませんね？」

「はい・・・」

「ですが、彼は生きています。長門初谷に襲われていません」

本日何度目か。山内は驚きと困惑の表情をした。

「あなたの元生徒でありながら長門初谷に殺されていない者は数名います。まずは大場さん。他に、菅原すがはらさん。宮岡みやおかさん。村山むらやまさん。他にもつといますが、このくらいにして・・・。それで、この数名は今なお殺されずに生きているんですが、その理由は何なのか。この方たちには失礼ですが、誰しもが殺されると予想をしていました。その理由として、この数名には共通点があるんです」

「・・・・・・」

山内は俯き、何も話そうとしない。

酒井は構わず続けた。

「あなたにいじめられていた。それがこの方たちの共通点です」

再生理論 第21話

彼女に出会ったのは、それが2度目だった。

晴れた日に、青い空にとっても似合うその姿に見惚れてた。

「あ……。あなたはこの間の・・・」

最初に声をかけたのは彼女が先だった。

「あ、久しぶり。どう？調子は」

「この通り絶好調です。本当にありがとうございました」

「それは良かった。あのあとすぐ出ていっちゃうから、心配だったんだ」

「あー……。すみません。余計な心配かけちゃって。でも、もう本当に何ともないですから、心配なさらないで下さい」

そう言っただけで彼女を微笑んで見せた。
本当に何ともなさそうだった。

どこか店に入るわけでもなく、特に足を止めようともせず、僕は目的地を決めずに歩いていた。

10分ほど歩くと、静かな住宅地から離れ、大通りに面した歩道に出た。僕はそこの交差点で信号が青になるのを待った。

横断歩道の手前で止まった彼女はポケットからデジカメを取り出して、交差点の真ん中辺りを撮影した。

1枚だけ、パシャリと撮ると、キョロキョロと周りを見回した。

そうしているうちに信号は青に変わり、何事も無かったかのように渡った。

彼女はそれから、交差点や視界の悪い曲がり角などに来るたびに、それらは全て人の少ないときを選んでシャッターを切っていた。

その姿を僕は黙って見ていた。

邪魔をしては悪いというのもあったが、何となくその光景を見ていたかった。

そんな沈黙を破ったのはまたしても彼女の方だった。

「私、写真を撮るのが趣味なんです。小さい頃、写真家になるのが夢だったんです」

『夢“だった”』

その言葉には、懐かしむような響きも、自傷めいたものも、何もなかった。

「今は違うの？」

「はい。諦めた、ってとこですね。もうだいぶ昔の話になりますけどね」

パシヤリ。

話しながら交差点を撮影した。

「あ……」

彼女が声を出すのと同時に信号は青に変わり、また同時に、彼女は隣にいた女子高生の腕を掴んだ。

「……え？ちよつと、何ですか？」

僕はその急な行動を見て呆気に取られた。

だから、信号を無視して通ったトラックに気が付くことはなかった。

「あ、すみません。昔の友達に似ていたので……」

「え……。はあ」

困惑した表情で、曖昧な言葉を残して女子高生はその場を小走りで去って行った。

「人違いでした。やつちやいましたね。まあ気にしても仕方がないですから、そろそろ日が沈んできたことですし、帰りましょうか」

そう言った彼女は、何故か嬉しそうに笑った。

「どうぞ。これ差し上げます」

「え、いいの？」

帰り道、彼女との分かれ道で、彼女はデジカメに挿入されていたSDカードを抜いて差し出してきた。

そのときはすでに日は沈みかけており、僕らの影は長く延びていた。

「つたない腕で撮影したものですけど、見て下さい。きつと1枚くらいいい写真がありますから」

「そんな。悪いよ」

「いえ、どうか受取って下さい。それとも、迷惑ですか？」

そんなことを言われると受け取らない理由が見つからない。

僕は結局そのSDカードを受け取った。

受け取ったSDカードはほんの少し暖かった。それはデジカメに入っていたためなのか、そもそもデジカメに入れて撮影しただけで

暖まるものなのかは僕にはさっぱり分からなかった。

「あ、すみません。やっぱり少し貸してもらえますか？」

「はい。どうぞ」

何か思いついたのか、先ほど渡したばかりのSDカードをデジカメに挿入した。

「せっかくなんで、記念撮影しましょう」

そう言って彼女は僕の隣に来て、手を伸ばしてデジカメをなるべく遠ざける。

「じゃあ撮りますよ。はいチーズ」

パシャリ。

結局その日、僕らはお互いの名前も知らないまま過ごした。

そして彼女的能力については、触れなかったのではなく、完全に僕の頭の中から消え失せていたというのが事実だ。

嘘じゃない。どうしてそんな大切なことを忘れるのかと言われると、

僕には分からない。

ただ、あのときはその方が普段通りに接することが出来たことは事実だった。

ただ、僕はそんなことを考えている余裕など、本当に一瞬しかなかった。

自分が夢を見ているんじゃないかと思うような出来事が起きたのだ。

彼女からデジカメのSDカードを渡されてから2日後、アサカさんのアパートでそのSDカードの中身を見ていた。

何故アサカさんにアパートなのかというと、僕には手に負えないレベルの事態だつてことが、僕にでも分かったからだ。

数十枚の写真を見終わると、アサカさんは一度伸びをしてから口を開いた。

「イメージは現実を引き込むんだ」

いったい何のことなのかさっぱりだ。

殆どの場合、僕に到底理解しえないことをアサカさんは話す。それでも、断片的にはあるが、理解出来る部分がある。僕はそれを聞き洩らさぬように聞いていた。

「想像というのは、人間の脳で創造されるただの妄想に過ぎない。それは現実に左右されることなく、サラサラと創りだせてしまう。

そのため、現実では不可能なことさえも可能にする」

抑揚の抑えた声が部屋に響く。

「しかし、想像は想像。現実に影響されないのが一般的な想像だ。しかし、例外がある。イメージが現実を引き込むことが稀にあるんだ」

おかしい話だと思う。思うが、口には出さないでおく。

「非科学的だと思う。しかし、これはある意味科学だ。解明されていない、未知の科学。彼女の撮った写真は、恐らくそういったものが介入しているんだろう」

「イメージが、現実を？」

「その通り。それでもいくら人が死ぬところを想像したところで、本当にその人が死ぬなんてことは滅多にない」

彼女のSDカードに保存されていた写真には、ありえないものが映っていた。

心霊写真の類では無い。むしろ現実的過ぎる。

交差点などを撮影したはずの写真には、人の死体が映っていた。それも事故にあった直後の様子が、だ。

しかもその写真に写っていた人物に僕は見覚えがあった。

その写真に写る人物は横断歩道を渡ろうとしていた、彼女が友達と

間違えた女子高生だ。

ありえないと思った。現実には女子高生は事故にあつたわけではない。平然と歩くその姿を僕はまだ覚えている。かなり鮮明にだ。

「それで、これを撮ったのはあの女だと言ったな。詳しく話せ」

そのときの状況をということだろうか。

実際、特に何か変わったことは無かった。一瞬そう思ったが、違った。

彼女は、交差点や視界の悪い曲がり角ばかりを撮影してた。

かなり不思議な行為だ。

移す対象が無い場所ばかり撮影していたからだ。

それをアサカさんに話すと、彼女は嬉しそうな顔をした。

「そういう場所を撮影することは、そんなにおかしなことか？」

アサカさんの口から出た言葉は、意外にも否定だった。

「おかしな写真を見たから、他のこともおかしな事だと思い込んだんだ。これも一種の『イメージが現実を引き込む』現象だ」

ああそうなのかと、納得しかけたが、よく考えればそれはやっぱりおかしなことだ。

「お前も鈍いな。写真をよく見ろ」

ほら、と言いながら1枚の写真をズームしていく。

画質はかなり悪くなったが、何をアップにしているのかは分かった。

「お供え物・・・」

彼女の映した写真には、お花やジュースなどのお供え物が映っていた。

それは、以前そこで交通事故があったということの証拠だ。

「お前は不思議な写真を見た。だから視界の悪い交差点などを撮影していたことを『おかしな行為』と決め付けた。だけどそれは違った。その理由は、撮影した写真には、どれもお供え物が映っていたからだ」

まったくその通りだった。

「でも女子高生の死体が映った写真だけは別ですよ。あれはどう考えても常識的じゃないですよ」

そう言ったが、アサカさんはそれを無視した。

「ここで別の疑問が浮かんでくる。それは、何故一緒にいたお前が“お供え物を撮影している”ことに気が付かなかったかってことだ」
はっとした。

そういえば、お供え物が映ってるなんて、言われるまで気が付かなかった。
思えばそのとき、何故そんな所を撮影しているのかと、疑問すら持たなかった。

僕は寒気を感じた。

「おかしいと思わないか？写真を見た人間の方が撮影現場にいた人間よりも先に気が付くなんて」

これから何か恐ろしいことに気が付くような気がして、冷や汗が流れた。

そして予想通り、アサカさんは恐ろしいことを言った。

「彼女は記憶を読むだけじゃない。ある程度記憶を操作することが出来る」

そう断言した。

「それで、この写真についてだが。恐らく彼女は関係ない。カメラの方に問題があるな。・・・そのカメラの色は？」

「確か、濃い赤紫です。ワインレッドっていうか」

確かに僕の記憶ではそんな感じの色だった。

「赤か・・・。分かった。もついいよ。後でまた連絡する」

そう言うと、アサカさんはパソコンの方を向いた。
女子高生の事故写真が映ったディスプレイを消して、ネットを開いた。

そこまで見て僕はアパートを出た。

『彼女は記憶をある程度操作することが出来る』

その言葉が頭から離れなかった。

彼女の能力を忘れていたのは、恐らくそのせいだ。

しかし、やはりそれのおかげで普通に接することが出来たことは事実以外なものでもない。

再生理論 第22話

警察が出て行つて数分、山内は呆然としていた。まさか自分がここまで事件に関与しているとは思ひもなかったからだ。

ニュースで長門初谷の名前を聞いたとき、そういえばそんな生徒がいたなと思い、同時に、そういえば死んだような気がしたが、思った。

確かに、長門初谷には相当酷いことをした。しかし、罪悪感の欠片も無かった。

自分は殺されてもおかしくはないはずだったが、何故殺されないのか。

山内は、自分が意外にも冷静なことに驚いた。

もしかしたら、自分の居場所を知らないのではないかと思った。殺さないのではなく、殺せないのではないのかと。

だから、自分の元生徒に自分の居場所を聞き、殺しているのではないか。

自分と同じ、いじめられている生徒意外を。

今もなお、自分の居場所を探して回っているのだと思うと、恐ろしくなってきた。

しかし、仮にそうだとすると、何故長門初谷は自分の生徒を知って

いるのか。

そして、何故いじめられていることを知っているのかという矛盾が出てくる。

そんなことが分かるなら、自分の居場所くらい簡単に見つけられるだろう。

そう思った瞬間、視界がブレた気がした。

棚がカタカタと音を立て、それは徐々に大きくなっていった。

『地震か・・・』

テーブルの上に転がっているカラの缶ビールが転がり落ちた。

被害は特になく、数秒後、それは収まった。

このところ頻繁に地震が起こる。

週に1回程度か、とにかく毎日ではないにしろしょっちゅう地震が起こるのだ。

これは、そのうち大地震が起こる前兆ではないのかと山内は予想していた。

しかし、山内のこの予想は外れていた。

地震なんかではなかった。

湿った空気。寂れた空気。隙間から差し込む陽光は完全に沈みきっておらず、オレンジ色でコンクリートの床を照らしている。

無人の廃工場には不良たちの残したスプレーによるラクガキが隙間無く壁を覆っていた。

廃れた工場の中は、工場だった面影がないくらいに、ただコンクリートの床が広がっているだけだった。

そこには長門初谷がひとり、ポツンと佇んでいた。

瞬間の出来事だった。

何も感知することが出来なかった。

何も無かったから。

物質と物体がひとつになり、重なり合う。

混同した何か。

一方はそれに抗う術さえ持たず、認知するより遙かに早く還る。

瞬間、何かが弾ける音がした。

破裂音めいた音響と同時に、灰色の床は赤く染められた。

そこに立っていたはずの長門初谷の姿は消えており、そこには大量の赤黒い肉片が飛び散っていた。

再生理論 第23話

「はいこれ。依頼」

パソコンのディスプレイを見たまま、1枚の紙を差し出してきた。

「僕に渡すんですか？」

「調査してこいってこと。よかつたな。その家、ここから2駅しか離れていないらしい」

その紙には依頼の内容と、ご丁寧に住所と周辺の地図が書いてあった。

依頼の内容を読んで、少し馬鹿らしくなったので声に出した。

「『閉めたはずのドアが開いていた。地震でもないのに棚が揺れる。いきなり花瓶が落ちた』って、なんですかこれ。完全にポルターガイストじゃないですか」

「バカか貴様は。どうしてここにその依頼が回ってきたと思う」

抑揚のない声で、冷静にそう言った。

「誰かの仕業ってことですか？」

「そう。ポルターガイストに酷似しているが、これは違うな」

アサカさんにはそう断言出来るだけの根拠があるらしいが、恐らく僕には理解出来ないことだらけなのであえて聞かないでおく。

「警察が捜査したところ侵入した形跡は無く、証拠になるようなものも無かった。どういう意味が分かるか？」

こういうところで性格の悪さがでるんだよね何て、僕は口に出したら殺されかねないことを思った。

「家の中に入らずに、閉まっているドアを開けて、棚を揺らして、花瓶を落としたということですか。何者ですか、この犯人」

「それを調査するのがお前の役目。まあそうだな。家の前で張り込みでもしてみればいいんじゃないか？」

「適当ですね。そんなんで本当に犯人なんか・・・」

「分かるよ。それで」

僕の言葉を遮るように、後ろから声がした。

いつの間に入ったのだろうか。開ければ軋む古い扉が、今回は無音だった。

「カエデはすでに見当が付いてるみたいだな」

「最初はRSPKだと思ったけどな。けどそんなことはどうでもいいよ。それよりもさ」

「分かったか？」

「ああ。あいつ、読み取り専門だろ。自分が読まれたことに気づいてないよ」

2人は何事もなく、当たり前のように話を進めたが、僕は待ったをかけた。

「ちょっと待って下さい。RSPK?・・・えっと、何ですかそれ」

僕を見るその2対の目は『そんなことも知らないのか』と言いたげだった。

ため息をつきそうな間を開けて、アサカさんが説明してくれた。

「再起性偶発念力現象。ポルターガイストとは違うが、その力テゴリのようなものだ」

分かるか?と聞いてきたが、僕は首を横に振った。

「ポルターガイストはオカルト現象ですよ?その力テゴリってどういうことですか?」

ポルターガイストは、霊的な現象であって、それだけのものだと思ってた。

それにも力テゴリ。つまり種類があるとアサカさんは言うのだ。

「RSPKっていうのはな、思春期のこどもが無意識に働かせる念力のことだ。現象はポルターガイストと殆ど変わりはない。では一般的なポルターガイストと何が違うかというのだな。RSPKの場合、同じ現象が繰り返し起こるんだ。毎日のように、決まって棚から物が落ちる、とか。だが依頼主に聞いたところ、特に同じ現象ばかり起こっているわけではなさそうだからな。これは違う」

そういうことか、と納得した。

「だからさ。もういいよ。そんな話は。それよりもアイツのこと。もういいだろ？」

「ダメだ。それに、きっと必要ない」

「必要ない？ どうしてだよ。もう用無しだろ？」

「確かに用はないが、ダメだ。あれは人間だからな」

「・・・チツ」

カエデは小さく舌打ちをしてからソファーに腰を下ろした。

「でも確かに、要注意人物だよ。あいつ」

「素性、分かったのか？」

「ああ。あいつのことならあいつより詳しいよ。脳髓の底から全部分かる」

「そうか。まあ相手の能力が仇になったってところか」

2人が言う『アイツ』とは、恐らく彼女のことらしい。

「彼女について、カエデ、何か分かったの？」

「だから、さつきも言っただろ。全部分かったって」

「全部って。じゃあ名前は？」

「名前なんて重要じゃない。重要なのは、何者かってことだ」

何者か。確かに彼女は普通じゃない。

「普通じゃない奴にとって、名前なんて重要じゃないんだよ。名前っていうのは個人を特定するものであって、それ以外に個人を特定出来るものがあれば、この際名前なんてものはいらない」

「名前なんていらない……」

そつえば、彼女は自分から名乗らなかった。

それを言いかえれば、名乗る必要がなかったのではないか。いや違う。名乗りたくなかったのではないか。

「マスミ。お前、騙されてるよ」

カエデの言葉が頭に響いた。

頭が真っ白になって、座ったままなのに、ヒドイ立ちくらみにあったような感覚が僕を襲った。

再生理論 第24話

「壊れたか。これでもう記憶を操られることもないよ」

「すみません。ありがとう。カエデ」

「世話掛けるなよ。別にいいけど。．．．仕事に支障が出るのは嫌だから」

「それで、依頼のことだが、．．．実はこの依頼、すでに他でも取り扱ったことがあるんだ」

取り扱った。依頼が他にも回されたってことだ。それなのにここにも回ってきたってことは。

「解決出来なかったんですか？」

そうだ。と頷くアサカさん。そんな依頼を僕に託さないでほしい。

「他といっても、ウチみたいな事務所じゃなくて、特定の人物にだ。霊能力者とか神社の神主とか。まったく。依頼主は完全にオカルト現象だと思ってるらしいな」

オカルト現象ではない。ポルターガイストとは無縁。全て人の手によるものだから、霊的な力を持った人には解決出来っこない依頼だとアサカさんは言う。

しかし、次の一言で状況を一変させた。

「そうして解決出来なかった依頼がウチに回ってきたんだが、話はこれだけじゃない。これ見てみる。近くの病院からの報告書だ」

なぜそんなものをこの人が持つてるのか。そんなこと、聞くだけ無駄だと思い胸に仕舞った。

「この調査に行った奴、どうやら記憶を司る脳の部分の機能を失ったらしい」

「記憶を失うこととは、別なんですか・・・？」

「別だな。記憶を失うんじゃない。自分の名前が分からないとか、そんな程度のものじゃなくて、もはや自分が人間であるのかどうか分かっていないような状態。動く植物人間と誰が称したかな」

僕は一瞬それを想像してしまい、恐ろしさとともに寒気がした。

「記憶喪失っていうのはね。記憶の一部が欠ける。喪失することを言うだろ。けどこれは、記憶喪失なんてものじゃない。機能の抹消、考えるということさえ忘れてしまったんだ。もはや肉と骨と血で形成された植物だよ。残っているのは本能だけだ」

「・・・あの、やっぱり僕行かなくていいですか？この依頼」

「だから、大丈夫だって。そんなことはもうあり得ないよ。お前にとって何の問題もないから、行つてきなさい」

すごく怖い。

同時に、どうしてそうなったかが気になった。

けど、それを聞いてしまうのはもっと恐ろしいことのような気がした。

今までの話しの流れからして、この事件はあることと完全に結びついてしまってるのだから。

「記憶の操作も、ここまでくれば大したもんだ。これじゃあ人を操ることも、遅かれ早かれ不可能ではないな」

仕事の説明は以上だ。そう言ってアサカさんは紫煙をくゆらせる。

僕が立ち上がるよりも少し早くカエデが立ち上がってアパートから出た。

やはり扉は軋む。

アパートから出ると、日はだいぶ傾いて、少しひんやりとした空気が流れた。

そろそろ季節は秋を終えようとしていた。落ち葉が風に流される音が季節を感じさせた。

「アイツの名前だけだな」

アパートを出てすぐ、カエデがそう切り出した。

「確か、長門、とかいったな。下の名前は忘れた」

吐き出すように言って、カエデは自分の家へと向かって歩き出した。乾いた風は、僕の気持などお構いなしに空気を流す。

再生理論 第25話（前書き）

更新頻度はひどいものですが、絶対に途中で打ち切りなんてことは致しません。絶対に。本当に。

まだ飽きずに読んで頂けるのであれば、それは本当に涙が溢れるほど嬉しいです。

これからをもっと頑張って更新出来たらなあ思います。

再生理論 第25話

アサカさんから託された依頼は、意外な形で決着がついてしまった。

依頼初日。依頼場所まで30分もかからずに着いた。

時間は昼の2時。秋でもさすがに照りつける太陽に暑さを感じずにはいられなかった。

すれ違う人はまばら。閑散とした住宅街。

駅を出るまではそんな想像をしていた。実際駅から少しの間は想像通りだった。

しかし依頼主の家に着くと、想像以上の人ばかりとざわめきが現れた。

緩い下り坂。それに沿うように似たような住宅が並んでいる。

特に目立った形の家は無く、それぞれが微妙に違う形をしていた。

その中で異質な空気を放っている一軒。

玄関の周辺には黄色いテープ。紺色の制服に身を包んだ人たちがせわしなく動いている。

黄色いテープの周りにはそれに張り付いたように隙間なく様々な人がそこにいる。

ドラマなんかでは見たことはあるが、現実に見るのは初めてだった。まるでドラマの撮影でもしてるかのような錯覚さえ覚えた。

僕はその光景に暫く立ちつくした後、来た道を辿った。

今日のことを、その日のうちにアサカさんに報告した。

「悪いな。本部からの連絡もたった今だ。まったく。迷惑な依頼主だよ」

「悪いのは犯人ですよ。どうしてこんなことに・・・」

依頼主を含む、その家に住む全員が死亡したらしい。
死亡したのは今日の早朝のこと。匿名で警察に通報があり、駆けつけた警察官は惨事を目の当たりにしたらしい。

家族構成はいたって普通の4人家族。夫婦に子供が男女2人に、犬が1匹。近隣の住民によれば、半年ほど前に引っ越してきたばかりで、特に目立った様子もなく、本当に平凡の家族だったそうだ。

これは調査書類に書かれていたことだ。

「現場は壁から天井まで真っ赤になるまでに血の海。死体はバラバラ。どれが誰の死体なのか分からないくらいに、見事にバラバラ。この猟奇的殺人の犯人だが・・・」

「長門初谷、ですか？」

「まあ少なくとも警察はそうみるだろう」

Y市で生まれた猟奇殺人鬼。彼はそう呼ばれている。

一度会ったときはそうとは知らずに話していたが、僕にとっては特に悪い人ではない。いたって普通のふざけた人だ。

その殺人鬼の仕業だと、アサカさんは断言しない。どうだろうかと、腕を組んで考え込む仕草をする。

「何か理由があるんですか。長門初谷を疑うに留まる理由が」

「まあ証拠も今のところ無いわけだしな。それよりもだ。今回の殺人。そして、長門。なにか繋がらないか？」

「・・・何かありましたっけ？」

「15年前に、長門家の長女が自分の母親を殺した殺人事件だよ。あれもバラバラ死体だった」

ああそういえばと、何時間も新聞とにらめっこをしていたのを思い

出した。

「15年前の事件では、未だに物的証拠が出てきてない。時効も迎えた。長門岬を犯人と示すものは目撃証言と状況証拠のみ、というのは分かっているだろう？」

「はい。それが、どうかしたんですか？」

「現在の法律では、証言だけで犯人を捕まえることは出来ない。信憑性の問題でね。状況証拠でも同じことが言える。ということはね、15年前の犯人は長門岬ではないという可能性もあるってことだ」

犯人を断定出来るだけの状況、目撃。それが揃っていて、警察も被疑者として長門岬を公表していた。

どう考えても彼女しかあり得ない。警察がそう認めたのだ。しかしそれを、アサカさんは真っ向から否定した。

15年も前に、すでに犯人と断定されていたのが、今になって犯人ではないと言うのだ。

「じゃあいったい誰なんですか？」

「さあな。でもよく考えてみる。15年前の事件を目撃者は誰だった？」

「長門初谷ですね」

「そうだ。しかし、長門初谷は目撃した直後どうなった？」

「その後、ですか？」

よく分からない僕に、当時の新聞を投げて寄こした。

そこで僕は、さらに衝撃的な事実を目にした。

「まさか……。でもそんなことって……」

「そう。長門初谷は死んだことになってるんだよ。交通事故でな」

「でも、今は普通に生きてるじゃないですか」

「そうだな。だが、それも最近のこと。これまでの10数年間、彼は何をしていた？死んだのなら、その目撃証言とやらはどこから出てきた？矛盾だらけだよ。その事件は。まあそもそも、可能性だからな。私の言ったことは」

確かに長門初谷は死んだはずだ。そう記事にも書かれているし、仮に今有名な『殺人鬼、長門初谷』が当時の目撃者となっている長門初谷と同一人物だとして、交通事故に大爆発。その状況の中、生身の人間が生きてることなどあり得るのだろうか。病院などにも行かずに。

矛盾することばかりだ。分からないことも多すぎる。

「だから私はこう考える。殺したのは長門岬ではない。そして、今回の事件も、長門岬の仕業でも、長門初谷の仕業でもない何者かの仕業だ」

筋を通すには、恐らくそれしかないだろう。それでもやっぱり僕はひっかかっていた。

「15年前の事件と今回の事件、犯人は同一人物なんですか？」

「そうだな。こんなことが出来る人間がそこらじゅうにいたら、大変なんてもんじゃなくなる。まあカエデは分かってるんだろうけどな」

「カエデが、ですか？」

「ああ。そうだろう？」

「ああ。分かってる」

いつからいたのだろうか。カエデはドア近くの壁に身体を預けて立っていた。

澄ました顔はいつも通りで。いや、むしろ楽しそうなのにも感じた。

「15年前の事件。今回の事件。そして、依頼。全部繋がるんだよ。1人の女でな」

抑揚の抑えた声が響いた。

「だから、今回の依頼はこれで終わり。金も出ない。キレイさっぱり。お前の出番は無いよ。そうだな。交通費程度なら出してやらないこともないが」

「いいです。どうせ後で返せとかって言うんでしょ」

「返せとは言わない。その分サービスして働けとは言つかもしれんが」

こついう人だ。朝香泉さんは。

「分かりました。僕は帰ります」

それだけ言って、僕はアパートを後にした。

ドアが閉まったのを認めてから、朝香泉は口を開いた。

「カエデ。仕事だ」

「分かってる。」

「そろそろ限界だそうだ。本部も何かと厄介事を抱えてるらしい」

「そんなのいつものことだろ。それよりさ。長門初谷をやれってことは・・・」

「そう。あいつもだ。どちらが先でも構わんそうだ。早急に、このことだ」

「事後処理はどうなんだ。本部に任せられるのかよ」

「そのくらいはやってもらわないと困る。一応お互いに仕事なわけだしな。厄介事がどうこの問題じゃない。やらせるよ」

「そう。分かった」

感情のない声のやりとりが終わった。

感情の無い眼差しをそのままに、少女はアパートを後にした。

その足で仕事へと向かった。

再生理論 第26話

死を凌駕することは可能なのだろうか

どのような力を持って生まれたとしても、それは不可避の事実なのか
可能性の問題じゃない

それらは、運命なんて言葉じゃ片付けられない絶対のことで

人間の抗うことの出来ない次元で

神にすら到達し得ないことなのか

仮にもしそうならば

神に近付くことすら許されない人間に

何が出来るといふのだろうか

足元にすら及ばないとか、そういうレベルじゃない

人と神

それは越えるべき存在ではないもの

比較すらさえされることのなかったふたつ

人知を超えたレベルでの境界が

遙か彼方に、認知すらされずに

確かにある。

それほどまでに絶対のものを

力ではなく

まっとうな人間として

これを断ち切る

私は神を凌駕する。

僕はそれが偶然には思えなかった。

それはただ、必然とも思えないことだった。

日が傾き始めてきたころ、学校帰りの学生の姿もある、ありふれた風景の中に僕は溶け込んでいた。

特に目立つ物も人もなく、昨日と変わらないであろうその風景は、なんだか物悲しくも哀愁を感じさせる風景でもあった。

いつか彼女が写真を撮った交差点の横断歩道の手前まで来たときのことだ。ふと、見覚えのある後ろ姿を見つけた。どこにでもいそうな女子高生だが、僕には見覚えがあった。

友達と間違えた、とか言ってたっけ。

この間と同様にひとりだった。

少し大き目の通りだが、人通りはなぜか少なかった。今日の前にある横断歩道で信号待ちをしているのも、その女子高生だけだった。

声を掛けようなどとは思わなかった。僕のことなど覚えてるはずもないからだ。

ぼんやりとそんなことを考えているうちに信号は青に変わった。

渡るはずだった僕は、渡らずにそれをぼんやりと眺めていた。

それは一瞬だった。

馬鹿に大きな物が目の前を横切った気がした。

何かがぶつかる音と、甲高いブレーキ音。人の悲鳴は意外にも聞こえず、辺りは一瞬だけ静まり返った。まるで時間が止まったかのよう

に。
交差点の真ん中には、人だったものが横たわり、その辺りには真っ赤な血がコンクリートを染めていた。

交通事故だ。

暫くはそこで立ち尽くしていた。

腰を抜かしそうになりながらも、意識は割とハッキリしていたような気がする。

ただ、何も考えられずに立ち尽くすだけ。

人が集まり始めたときになって、僕はようやくそこから動いた。

半ばパニックになりながらもアサカさんのアパートに足を向けた。

傾き始めた日は、いつの間にか沈んでいた。

雨が空から離れることのない、晴れた夜だった。

音の無い世界。それに溶け込む2人。

桐生楓は、堂々と。

もう一方は優雅に。

そこに居る者として相応しい立ち振る舞い。

彼女は、桐生楓が声を発するまで、ほんの数メートル先にいることすら気が付かなかった。

「目立ちすぎたな」

「そうですね。自分でもそう思います」

「分かってるんだ」

「ええ。分かってます。それと、あなたが死ぬことも」

「へえ。お前、未来視も出来るんだ」

「さあ。どうでしょうね」

「能力はひとつじゃないんだろ。長門家ってのはさ」

その言葉に、一瞬の動揺が見られた。

「・・・それが何か」

「それはもう異常だよ。隠し通せるものじゃない」

「異常、ですか。そういうあなたもそうですよね」

風が吹いた。

「苛まれてますね。あなた」

それは心を驚掴むかのような言葉。

「魔法使いと組んで、一体なにをする気ですか」

問いに答えることなく、桐生楓は大地を踏み締めた。

「やっぱり駄目だ。甘いよ、長門岬。そう読んだ方がいいか？」
瞬間というには遅すぎる時が駆けた。

再生理論 第27話

「やはりか」

「やはりって、分かってたんですか？」

「ある程度は予想してたよ。まあそれが現実には起こるとはね」

あれは明らかに、写真と同じ光景が広がっていた。

女子高生の死体が写された写真と同じ。

まるで今撮影して、過去に送ったように思えるほど、それらは似ていたのだ。

「あのカメラは危険なものじゃない。少し先のことを映せるカメラ、といったところだろうね」

「それは、魔術ですか？」

「似てるが違うな。人の仕業には変わりないんだろうけどね。あんなもの、どの世界にも売ってないぞ。出来ることなら買い取りたいものだ」

「ふざけないで下さい」

「ふざけてなどいるものか。希少なものだぞ。あれは」

真面目なのかどうかよく分からない。表情だけはいたって真面目だった。

「あのカメラ。色は確か赤だったよな」

「はい。確かにそうです。深い、少し黒目の赤ですけど……。そんなに色って関係あるんですか？赤いデジカメなんていくらでもあるような気がするんですけど」

「色ってというのはね。物にとってはかなり重要なものだよ。特に赤っていうのはね、人の生死に関する色だ。最も、黒というものの方が生死に関しては強いがね。しかしそれとは丸つきり純粹さが違う。黒というのは、魔術もそうだが、意図して他人に危害を加えることだ。邪術ともいうんだがね。対して赤というのは、危害を加えるとかそういう問題じゃない。生きることと死ぬことを繋げてる色。人はいつか死ぬ。逆に言えば、生きることが出来るのは死ぬことが出来るものだけだ。死なない者など、それはもはや生きているとは言えないよ。そういう生と死の狭間で、“ただ”渦巻く色が赤だ。そのカメラは赤と黒の、それらの中間というんだから尚更質が悪い。赤の性質を持ちながら黒の性質を持つ。それは、生死に直に触れているにも拘らず、生死に簡単に干渉出来てしまうつてことだ。しかし、それも簡単なことではなくてね。正確な色合いじゃないと、それは完全に機能しなくなるんだ。混ぜるときはそのことに気を使わないと、せっかくの物がただの日用品と化してしまう。そのくらい色ってというのは重要なことなんだよ。まあもちろん色だけではどうしようもないんだがね」

「じゃああのカメラを作った人ってというのは……」

「普通の人間ではないな。確実に」

普通じゃない人が作った、普通じゃないカメラ。

まるで彼女自信が異常者であるかのような物言いに、僕は特に何も思わなかった。

心の奥で、同じことを思っていたような気がした。

「どうして彼女はこんなものを持っていたんでしょうか」

「さあな。こればかりは本人に聞いてみるしかないな。まあ聞いたところで素直に教えてくれるとも思わないがな。まあそんなことはどうでもいい。それより、これだ」

パソコンの画面を見たまま、アサカさんはそれを指さした。

それは、有名な動画投稿サイトだった。

「ポルターガイストの原理って知ってるか？」

それはあまりにも唐突な言葉だった。
パソコンの画面に映るのは、その言葉にはまったく関係なさげなものだったからそう思えたのだ。

「原理って、確か色々説がありましたよね」

「そうだ。イタズラ説、錯誤説、振動説がある。マスミに依頼した件は、恐らく振動説だ」

「まあそうでしょうね。イタズラも、錯誤も考えにくいと僕も思います」

「確かに考えにくいが、そうじゃない。もし振動説であつたなら、

筋が通る。それだけだ」

そう言つて、パソコンのディスプレイに映る動画を再生させた。

そこには、1人の外国人男性が写っていた。手にはワイングラスを持っている。

軽く息を吸い込んでから、男性は甲高い声で叫びだした。

するとどうだろう。数秒しないうちに、ワイングラスは音を立てて割れてしまった。

そこで動画は終わった。

「これが、ポルターガイストの正体。振動説の原理だよ」

「共振現象、ですね」

「そうだ。有名なものでは Tacoma Narrows Bridge だな」

どんな物体には固有の振動数が存在する。

それは、あらゆるものが持つ、自由に振動させた場合に検出される特定の振動のことだ。

そして、その固有振動数に近い振動数を外部から与えることで起こる現象が共振現象というわけだ。

動画のワイングラスが割れたのは、男性の発した声と、グラスの振動数が一致したためだ。

非常に衝撃に弱いグラスは、ピタリと一致させた周波数により、共振し、割れた。無論簡単にできることではない。

「共振したドアノブが振動し、ドアが開く。地震がなくとも、共振現象により柵は揺れる。花瓶も同じだ」

アサカさんは、ポルターガイストの件は、先ほどのワイングラスの現象と同じだというのだ。

「でもだからって、振動説の証拠にもならないんじゃないですか？ そりゃあ他の説の証拠もないですけど」

「そうだ。だがしかし、そこで、あの事件が起きた。家族全員がバラバラにされる事件がね。それで確信したよ。振動説に間違いないってね。犯人は、人間さえも共振させたんだよ。このワイングラスのようにね」

それはにわかに信じがたい言葉だった。

「もちろん簡単なことではない。当然ワイグラスの比じゃない。人間は様々な物体、物質が複雑に絡み合って成り立っている。皮膚、肉、骨、血。箇所によって強度も違う。そうすると、固有の振動数なんてそれはもう無限のようにある。それをね。犯人はそれぞれ、一人ひとりにぶつけて共振させたんだ。化け物だよ。この犯人は」

あり得ないことだと思った。思っただけで口に出すことが出来なかった。

それほどまでにアサカさんの言葉には筋が通っていて、堂々としていたからだ。

「ポルターガイストが起きたのは、それを探っていたんだろうね。どんな人間か。“どんな周波数をぶつければいいか”をね。まあもちろんこれは推測の域を出ない答えだ。証拠はないんだからね」

アサカさんは話を続けた。

「人の記憶を読み取るのはまた別だが。操る。破壊する。このふたつの能力は音を利用して。超音波を使って、人の脳に影響を与えて操る。そして共振させて破壊する。15年前ですでにある程度は可能だったのかもしれない。当時は母親1人だったが、今回は4人同時だ。あるいは習得したか。どちらにせよ、彼女はもう終わるだよ」

「終わりつてまさか・・・」

「カエデが仕事に向かった。ほつといても構わないと私は思うんだが、どうも本部は気に食わないらしい。奴だって人間だ。カエデが相手じゃ数分と持たないだろう」

この言葉を聞いてから、帰り道の記憶がない。気が付いたら僕は家の玄関の前に立っていた。不思議な感覚だった。

多分僕は彼女のことを好きだったのだろう。でもよく分からない。彼女なら僕のことくらい簡単に操れそうだと、心の奥でそう思っているからだ。

ただそれはアサカさんの話が本当だったらだ。でも、悲しいけどそれは本当だ。

長門岬が母親の長門純を殺した。

それを見た弟の長門初谷は事故で死んだはずだった。

そして今、母親を殺した犯人は、僕たちのすぐそばに存在している。

ふらりと街に出れば、なんとなく会いそうな予感すらしていた。

再生理論 第28話

2人の距離は瞬く間に縮んだ。

弾けるようにして駆けだしたカエデと、動かない1人。

余裕すら感じさせるその佇まいは、絵画に写る美しい女神のようだった。

そして何かが動いた。

空気を振動させるもの。あるいは、振動そのもの。
放射状に広がるそれは、空気を伝わり、響いた。

それはまるで会話をするように淀みなく発せられた、音。

その瞬間、目の前にいる少女は赤い肉塊に変わる映像が彼女の頭に流れた。

だが、現実はまだたく別の物となった。

何事もなかったかのように、少女はスピードを緩めることなく距離をさらに縮めた。

『震えない・・・!?!?』

そう心の中で呟いた。

少女はそして、そのまま右手を握りしめて、顎を狙った。

桐生楓は普通ではない。

朝香泉を師匠とし、魔術を習った。
無論まだ見習いだ。魔道の世界では師匠を超えるまでは一生見習いなのだ。

自分が見習いではなくなることは、恐らく一生来ないだろうと、桐生楓は悟っていた。

体重を乗せた拳が下顎を直撃した。

勝敗はそれで喫した。

普段から身体を鍛えてすらいらない女性が全力で打たれることに耐えられるはずもなく、彼女はそのまま気を失った。

無論裸の拳で人を、しかも顎を殴るなどとなると拳が碎けることも

避けられない。

しかし桐生楓の手に異常はなく、ため息をひとつ吐いただけだった。静かな夜に再び戻った。

これらの異常に気づいてる人はおらず、当たり前のように夜は更けるかと思われた。

倒れる女性を一瞥すらしようとせず、楓はその場を去ろうとした。そのときだった。

背後に人の気配を感じた。

現れたのは、赤いコートを羽織った長身の男だった。

「あちゃー。やられたか。まあしょうがないですね」

楓はその男の方を向かずに声を発した。

「お前もやる気だったんだろ。悪いな。先にやっちゃって」

「別に全然構いません。だって、」

長門初谷は構えることなく。

桐生楓は構えることなく。

すでに両者は知っていた。

これから起こることを。

間もなく分かたれることを。

静寂の中、雲の無い空から雨が離れた。

香を舞い上げるそれは、秋の大地に落ちる冷たい雨だった。

「強い相手の方が燃えるじゃないですか」

言い終わるのとほぼ同時、長門初谷は消えた。

そしてまた、消えたのとほぼ同時に、桐生楓のすぐ背後に現れた。

長門初谷の能力は、俗にいう『瞬間移動』というものだった。

移動時間をゼロにするそれは、ありきたりで誰もが知っているような能力。しかしそれは漫画などの世界だけであり、現実ではおおよそあり得ないことだった。

背後に現れたそれは、その位置から背中を、高さ的には心臓のあたりに向かって拳を目掛けた。

素手で心臓をえぐる、現実的ではない現実。

楓はそれをしゃがみながら、左足を軸にするように右に回転して避けた。

その勢いのまま左手を地面に着き右足の踵で、長門の右足を刈った。それを当然のように、“消えて”避ける男。そして瞬時に現れて、体制の低い少女の顔面にローキックをかました。

0.5秒以下の初動で繰り出されたそれを、少女は右手で受けてガードした。

傍から見れば驚嘆するそのスピードのさなか、両者は当たり前のように、まるで事前に打ち合わせたかのような一瞬の打ち合いを見せた。

「やるねえ。さすがだ」

言葉だけの関心を口にし、すぐさま戦闘は再開された。

ガードしたその手で、その足を楓は掴んだ。

が、掴んだ瞬間に姿を消した男は、現れるのと同時に、一歩下がったところから少女の顔面に正面から蹴った。

それを少女は後ろに跳ねるようにかわした。

それに追い打ちをかけるように、後退した少女よりも速く、長門初谷は距離を詰めた。

そこから、さらにスピードが上がった。

少女の頭に頭突きをかまし、当たった直後に瞬間移動によって体制を変えて、みぞおちにエルボーが入る。

少女はかわすことなくそれらを受けた。

みぞおちに衝撃を受けて、少女の体は少し浮いた。さらにそこへ正面に現れるのと同時に右足でハイキック。と、その足が浮いたまま左手で身体を支えたまま逆の足、左足で体制の崩れた少女の足を刈る。

無理矢理、空中で完全に身体が横向きにさせて、抵抗の余地もないまま最初の足で腹部を蹴り飛ばす。

バサリと、赤いコートが翻る。

間合いを詰めてから1秒以下の出来ごと。

瞬きをしていたら見逃してしまうほどのスピード。実に馬鹿げた話だが、比喻ではない現実がここにあった。

目にもとまらぬ一連の動作。吹き飛ぶ少女を男は恍惚とした表情で眺めるわけがなく、さらに追い打ちをかけようと駆けだすわけでもなく、怪訝な表情で少女を見ていた。

人の心臓を挟むほどの腕筋力。それを支え、それらを可能にするバランスのとれた全身の筋力。

油断なく、全力で打ち込んだそれらを受けたのは、紛れもなく弱いと評されるであろう少女であり、華奢な身体の持ち主に他ならない。

それでもその身体に外傷は見当たらなかった。骨の数本は折れている可能性はなくてもないが、それでも無事だということを、長門初谷は不審に思った。

ドサッ。

背中から少女は倒れこんだ。

雨は少しずつ強くなってきた。身体に雫が落ちては跳ねる。そしてまた落ちる。

それが妙だった。

雫は、彼女の身体に触れていない。

薄い膜でもあるかのように、触れる寸前で弾けている。艶やかな髪は濡れず。

ムクリと少女は立ち上がった。

完全に無表情だった。

「久しいな・・・」

抑揚の抑えた声だ。

「遊んでやるよ

」

風が吹いた。

木々が揺れ、静かな雨は嵐となった。

バサバサと男のコートが乱舞する。

何事かと問うこともなく、長門初谷は悟った。

再生理論 第29話（前書き）

更新遅くて申し訳ありません。この辺りが大事なところというか、色々考えながらで、まだまだ未熟なもので遅くなっていました。後々修正するかもしれませんがご了承ください。

次回はもっと早めに更新するように頑張ります。

再生理論 第29話

パン

瞬間、水の弾けた音がした。

空から降る雨が、空中でいきなり弾けた。何もない空間に、何かが破裂したように。

そしてその空間は、ほんの0.5秒ほど前まで長門初谷のいた空間だった。

そしてもう一度、別の位置で同じような音がした。

そこにいたはずの長門初谷は、違う場所に現れた。

「アンタ、風使いか？」

真剣な表情。

男の問いに、少女は答えることなく、ただ佇んでいた。

否、彼女は笑っていた。歪んだ口元。目は笑っておらず、無表情とは違う、冷酷な眼差しをしていた。

「風？そんなもの使ってもつまらないだろ」

彼女はこう言った。

「風が吹かなかつたら、風は使えない。だけど、こいつは違う」

途端、男は駆けた。

それは不気味なほどの速さだった。

0.1秒以下で初速を終え、最高速に達したのは、常人の脚力の成せる業ではない。無論人間離れた脚力ではあるが、それには程遠い。

一瞬で間合いを詰めた男は、馬鹿げたほどのスピードのまま、みぞおちのあたりに掌底を叩き込んだ。

全力で、驕りもなく、確実に。

手応えはあった。

それは不思議なほど軽い手応えとして掌に響いた。

そう。まるで何かに包まれている少女を殴ったようだった。

少女はたまらず吹き飛ぶ。

そのまま地面に叩きつけられるかに思われた。

だがしかし、そうはならなかった。

後ろに吹き飛んでいる少女の身体が、徐々に遅くなる。そしてゼロになり、少女は着地してみせたのだ。

空中で何かに抱擁されるように。

完全に物理法則を無視した動き。

平然と着地してみせたそれは、階段を1段飛ばして飛び降りた程度の軽やかさがあった。

「そうか・・・だから音も効かなかったのか」

長門初谷はそう小さく呟いた。

「物理的な衝撃は一切効かないってわけか。参ったな」

長門初谷は悟った。恐らく自分は目の前の少女に敵わぬと。いや、本当は分かっていたのだ。

だが、向こうも自分を殺せないことも、とうの昔に知っていた。

これで五分五分。だが、完全に五分なのだから、勝敗がつくことは無い。

睨む者。佇む者。

そのどちらかがスキを見せても、恐らく決着はつかないだろう。そう思われた。

わずかの間だった。

何かが弾けた。

それは単純に、風船が割れた音と差は無かった。

破裂音めいたそれは静かに響いた。

そしてそれは、あまりにもグロテスクな状況を作り出した。

切断というほど、それはキレイな断面ではない。

ただその断面も、鮮血に染まり確認すること自体が難しいのだが。

「まあ。なんだ、その。そういう使い方もあるのか・・・」

口を開いているのは長門初谷だ。

だが、あまりに異様な光景にその口調はまったく似合わない。

そもそも意識を保っていること自体が奇跡のようなものだが、長門初谷の意識は間違いなくハッキリとある。

“上半身と下半身を断裂”されてこの軽い口調。この男を、化け物と呼ぶに何と呼ぶのか。

「貴様、痛覚も無いのか」

「いやいや、神経はありますよ。何て言うかな。一定以上の衝撃に關する痛みつてのは全部消えちまうんですよね。そうそう、ビンタされるのは痛いけど、包丁で刺されるのは痛くない。みたいな？つてそのまんまか」

そんな馬鹿げた話を、カエデは“そういうこと”として記憶に留めた。

ただこう話している間にも、長門初谷の体内の血液は流れ出していることに間違いはない。

出血多量で死ぬことも、この男は危惧していない。

「再生理論って知ってるか？」

この状況で会話することがまさにおかしなことだが、長門初谷は口を開いた。

「再生治療のことか？切断した指が生えてくるっていう」

「うーん。ちょっと違うな。あれは人体の一部を再生するだけだろ？」

いつの間にかだ。夥しい出血は止まっていた。

「体の一部を再生するなんてことは、大昔からあったろ？ほら。トカゲの尻尾なんかも立派な再生だ。サメの歯だって、死ぬまで生え続けるんだし。人間から見たらすごいことかもしれないけどな、生物全体で見ればそんなに大したことじゃない。だけど」

ニヤリと口元を歪ませる。

「体を真つ二つにされて再生する生き物なんてのは存在しない。いや、まあ例外もいますけどね」

長門初谷が立った。しっかりと、地に足を付けて。

断裂した痕などまったくなくない。服は破れているものの、皮膚に傷跡は残っておらず、まさかこの男がわずか数秒前まで上下半身が離れていたなどと誰が信じよう。

「俺にとっての再生理論はこういうこと。何があっても再生する力。指とか、部分的な単位じゃなくて、細胞レベルでの再生。ミリ、マイクロ、ナノ。それ以下で再生する理論」

平然と話す長門初谷。

ニヤリと口を歪ませる。

「まあ、それだけじゃないんですけどね」

互いが互いに敵わぬ理由。それがこれだ。

長門初谷は単純に、この少女に圧倒的に能力が劣っている。

桐生楓は、この男に傷を付けることは出来ても殺すことは出来ない。

そう。両者は既に知っていたのだ。この結末を。

知った上で闘い、殺しあった。

そして、矛盾だらけの、あの15年前の事件の矛盾。

殺人事件を目撃し、直後に死んだ少年、長門初谷。

殺人鬼として、現在世間で最も恐れられているお尋ね者、長門初谷。

同一人物であるはずがない。一般論を覆した現実

死んだとされる人間が生き返った事実。

不可思議な結果と、その理由が、長門初谷の再生する力によってつながつたのだ。

常識では考えられないことだ。だからこそ謎だったと言えるのだが、その事実さえ見えればなんら不思議な事ではない。

その事柄があれば、もはやそれは常識の範疇なのだから。

再生理論 第30話

「それよりもさ」

「ん？」

楓が問う。

「交通事故まで目撃されて、そのあとに警察の事情聴取に付き合ったのか？それじゃあ警察も混乱してそれどころじゃないだろ」

「ああ。それはですね・・・」

「警察の記録にも、ハッキリと貴様は死んだことになっている。にも関わらず、目撃者の名前は貴様の名前が載っている。今の貴様と、当時の貴様を別人だということはともかく、“目撃者と、目撃した直後に死んだ人間”を同一人物というのは無理な話じゃないか？」

目撃者。交通事故によって死亡した者。殺人鬼。それらが同一人物だという矛盾は、“死なない”という条件があってこそ成立する事実。

それらを知らない人間が、それらの事実を理解することは不可能だ。“死なない”という事実が欠けている限り真相に行きつかない。そ

れなのに、それについての調査などは何一つされず、今の殺人鬼と、当時の事件の目撃者は別人ということで世間は解決している。そして、目撃者と、交通事故で死亡した人物は同一人物と記録されている。

おかしな話だ。

そのおかしな話を、この男はたった一言で片づけた。

「記憶の操作をやったのけるのがいるでしょう?」

ニヤリと、そいつは笑った。

「弟妹はやっぱり助けあわないとダメですよ。うんうん」

男は腕を組んで、2、3度頷く。

「やっぱり。そういうことか。だから・・・」

「あ、分かっちゃいました?んー。さすがです」

「複雑なだけに色々予想したけどな。それが一番筋が通る」

「まあとにかく。お喋りはこのくらいにして・・・」

長門初谷は言った。

「死ぬまでやるか？言っとくが、俺は死なない」

驕りも無く、砕けた様子も無く、ただ事実を述べるように。

桐生楓は応えた。

「死なないかどうかはお前が決めることじゃない。それと違っておいてやる。俺は死なない」

当然のように。答える。

2人の言い分は間違っていない。だからこそ終わらぬ闘いなのだ。

雨が止み、木の葉から雫が落ちる。

2人の鼓動さえも聞えそうなほど、辺りに音は無かった。

耳鳴りさえも響きそうな静けさ。

どちらも、ピクリとも動かなかった。

そして静寂を断ち切るように男は口を開いた。

「まあ今回は負けということにしておいてあげます。一応これからやることはたくさんあるので。それと、彼女は殺さないで置いてあげて下さい。きっと混乱するでしょうし」

「そのつもりだ。そもそも殺す必要もないからな」

「それは良かった。うん。それだけ確認出来ればOKですね。じゃあそういうことで」

なにがそういうことで、だ。と、毒づく暇もなく長門初谷は消えた。

中途半端な事を言い残して。

「まったく。化け物だな・・・」

そう呟いて、カエデは倒れている少女を担いで歩きだした。

再生理論 第31話（前書き）

更新が遅くて本当に申し訳ありません。

これからまた忙しくなり、さらに更新出来ないかもしれませんが、
どうかご容赦ください。

再生理論 第31話

寒いとも、暑いとも感じなかった。

家から出なくなり3日。いや、もったかもしれない。時間の感覚さえも消えつつある。

山内雅史は3日前に起きた殺人事件のことばかり考えていた。いや、恐怖に怯えていた。

一家全員がバラバラにされた残虐な殺人事件。犯人は恐らく長門初谷だろう。

そう。ついに復讐すべき人間を見つけ出したのだ。山内雅史をという男を。

それを宣言するかのように、隣の家を家族を殺して見せた。山内はそう思った。そうとしか思えなかった。

いつ殺されるのか。そればかり考えていた。

もちろん逃げ出そうとも考えた。しかしそれが出来ない理由があった。

逃げれば殺人事件の犯人だと思われる。そんなことは考えはなかった。

長門初谷は神出鬼没だ。

信じられない話したが、ある地域のコンビニの防犯カメラに映った長門初谷が、数時間後には遠く離れた別のコンビニの防犯カメラに移ったという話がある。

それに類似した話がいくつもゴシップ雑誌やニュースで取り上げられている。

全て信じているわけではないが、奴ならあり得そうな気がして恐ろしいのだ。

だから、家を出ようにも恐ろしくて出れずに、家じゅうの窓や玄関のカギを締め切って閉じこもっているのだ。

だが、それも今日で終わりだ。

たったの3日で、すでにもう限界だ。

耐えられない。

家族はいない。両親もすでに他界している。
俺が死んでどうこう言う奴もいない。

山内は天井から垂れさがるロープにそつと首をかけた。

そして、踏み台である椅子を蹴り倒した。

椅子が倒れる音がした。同時に、ロープの軋む音がした。

視界が溶けていた。

波打つ天井は、吐き気がするほどだ。

気分が悪い。頭も痛い。ヒドイ風邪をひいてるみたいだった。
身体が重く、気だるさもある。

「気が付いたようだな」

声を聞いて初めて人がいることを知った。

「気分が悪いだろう。飲め」

差し出されたコップには、透明な液体が入っていた。それを見て、私は喉が異常に乾いていることに気が付いた。

「何、ただの水だ。少し気分が良くなるように薬を混ぜておいた。それだけだ」

その人が言い終える前に、私は口を付けていた。そのまま一口飲むと、一気に喉に流し込んだ。

ひんやりと。それでいて冷たすぎず、喉を通過した液体が身体に浸透していく感じが分かるような気がした。

コップの水はすぐに無くなった。ただの水がこんなにも美味しいと感じたのは初めてかもしれない。それほどまでに私は喉が渴いていたんだあと、冷静に思った。

少し冷静になり、周りを見ると、どうやら私はソファに寝かされていたようだ。

カラになったコップを持っていると、数秒と経たぬうちにそのコップは水で一杯になった。

「良いだろ。それ。なかなか高い買い物だったんだ。おっと、割らないようにしてくれよ。世界に4つほどしか無いんだからな」

私は、その不思議なコップをぼーっと見ていた。

「ガラス職人がね、魔法を覚えたんだ。しかもなかなか高度なものをね。そして最初に作った作品がそれなんだ。知ってるか？ガラスつてのは液体なんだ。粘り気が強すぎて流動しなくなった液体だそうだ。それを利用したと言われてるが、詳しい作り方は不明だ」

「……あなたは、魔法使い？」

「違う。が、まあ似たようなものだ。君らだってそうだろう。魔法に随分似ている」

「そう、ね。魔法かと聞かれれば、違うのだろうけど」

抑揚のない言葉だった。

「君らの能力は強力だ。悪用するものが1人で助かったよ」

「もし、全員が悪用していたら？」

「そうなれば……。きっと私が全員殺していただろう」

当然のような口調だった。それは、1人で全員殺せるということだろうか。

「あの人は・・・？」

「長門初谷か？私の弟子には殺せないよ。それに、きっと殺すこともしないだろう」

良かった。と、小さく呟く。自然と出た言葉だった。

それから数秒の沈黙を挟み、魔法使いに酷似した女性が口を開いた。

「さて。そろそろ謎解きをしたいんだがね。教えてくれるか？」

水を飲んだおかげか。身体はすっかり軽くなった。

再生理論 第32話（前書き）

ごめんなさい。申し訳ないです。更新遅すぎますね。

正直行き詰ってます。そして新生活忙しいです。言い訳になります
が。

ただ、気分転換というか、新しく別の小説を書き始めました。その
うち投稿したいと思います。

初の恋愛小説風短編集みたいなのを書こうと思ってます。出来れば
読んでやって下さい。よろしくお願いします。

再生理論 第32話

「何が聞きたいんですか？」

「そうだな。まずは君の名前からだな」

「名前なんて。在ってないようなものです。今さら名前だなんて」

「重要なのはそこだ」

その女性は意味のわからないことを言いだした。

「名前っていうのは、己を表すわけではない。戸籍上の話だけだ。

君らの場合は特にだ。同一人物が存在し得ぬことを覆しかねない奇行だ。最も、君には何の責任もないが」

それでも、と目の前の女性は続けた。

「名前は人を区別するのには必要なものだ。一般的にだがね」

「そうですか。分かりました」

私は名乗った。特に名乗らない必要もない。

「私の名前は、ながとさき長門咲です。長門家の二女。長門ユリの妹で、長門シヤの姉です」

女性は驚きもせず、これといった反応を示さなかった。まるで初めて知っていたように。

「やはり、君は妹の方だったか。意識はあったのか？」

「ありましたよ。あとはほんの少しのささやかな抵抗だけ」

「ほう。抵抗も出来たとは。やはり血が似ていると不完全か」

この女性は私の話しをどこまで信じているのだろうか・・・？
私のことを知っているのだとしても・・・いや、そもそもそんな一般論が通じる相手じゃない。

「このアパートに近づいた時、強く抵抗が出来ました」

それだけで、私は言葉を繋げなかった。多分、言いたいことは分かっているだろうと予想して。

「ふむ。やはり人間相手ではその程度か」

またしても彼女は分からないことを言う。人間？私たちが？

「・・・私、人間じゃありません」

「いや。残念ながら人間だ。ちょっとした特殊な能力を持った希少な人間だ。テレパシー能力を持っているから人間じゃないだろ？そ

れは自惚れっというんだよ」

私はテレパシーなんて使えない。そう言おうとしてやめた。そういう話ではないのだ。

「いいか。君たちは人間だ。生物学上とかそういう以前に、紛れもなく人間だ」

彼女は断言した。

「どんな形であろうと、どんなことが出来て、どんなことが出来なかつと、それは人間であることに変わりはない。人間が嫌なら死ぬんだな。もしくは・・・そうだな。適当な黒呪文でも唱えてみることだ」

私は人間・・・？
それが嬉しいことなのかどうかすら分からない。

「それはまあいいとして。この前倒れていたのは、強く抵抗出来たのに関係あるのか？」

「恐らくは。ただそれもほんの少しだけです」

倒れたのは、自分が急に表に出たから。姉が支配していた私を、私自信は支えることが出来なかった。

「結界に近づいただけでそれか……。まあ無理もないか」

「このアパートには結界が？」

「ああ。一応自作のだがね。安い結界だが安全だ。だからもう少しの間、君はここにいなさい。ここなら安全だ。というか、出て行かれると迷惑だ。無駄な仕事が増える」

それは、私がここから出たら危険なのだという事と、そんな面倒なおもりはしたくないということだろう。

そして『もう少し』というのは、私がここから出られる日はそんなに遠くないということ。

すなわちそれは、もう少し待っていれば危険である原因が消え去るということだ。

「姉を殺すんですね」

その問いに、符術師と名乗る女性は躊躇することなくハッキリこう答えた。
ああ。と。

悲しくは無かった。姉と呼んではいるが、あんな人間を生かしておいていいわけがない。

法律云々以前に、そうでなければ全世界の、生きとし生けるもの全てに申し訳ない。

「君には申し訳ないが、これも仕事なんだ。恨まないでほしい」

「いえ・・・」

恨みはしない。が、疑問が残る。

「いつから姉はあんな人間になってしまったんでしょうか」

私の幼い頃の記憶によれば、姉という人間は優しくて、姉らしい姉だったはずだ。

いつの間にか。本当に姉という人間はどうしてしまったのだろうか。

・・・こんなことを思うのは、きっと私自信にほんの少し未練があるからだろうか。

優しくった姉に。

「さあね。人の心はそう簡単に変わるものではないからな。まあ操られていては別だがね」

『操られていれば』

そんな言葉に縋るほど私は姉を想っていない。

姉は姉であつても、その事実を無かつたことにすることは出来なくても、私の中ではもはやその人間が姉であることを拒んでる。

精神的なものよりも、魂的な位置まで。

だがしかし、不思議なことに嫌いではないのだ。

それは、恐らくはそういう次元は既に越えているからだろうと思う。

嫌うということは、その存在を認めているから。1人の人間として認めているから、嫌いという感情が生まれるんだと思う。

「操られている可能性もゼロではないが、あまり期待しない方がいい。やることがあまりにも子供じみてる。わざわざ1人の人間を操つてまでするようなことじゃない。まあそこがまた怪しいところだがね」

「どっちですか？」

「恐らく操られてはいない。いや、断言しよう。それはない。それよりも、私が聞きたいのはそんなことじゃないんだ」

「何が聞きたいんですか？」

「君の母親が死んだときの話だよ」

やっぱりそこか。と私は思った。

多分、今回の件で一番重要なことなのだろう。

そして女性は、思いもよらない言葉を発した。

「母親を殺したのは君だな」

このとき私は気が付いた。この女性は、事件の全容をすでに知っている。そして、敢えて聞いているのだと。

この人なら救ってくれると思った。

今の状況を全て打破するにはこの人しかいないんじゃないかって直感的に思った。

再生理論 第33話

私は気が付いた。久しぶりだ。自分の身体なんて。

倉敷は言っていた。自分の術が及ばない範囲もこの世には存在する
と。

それは、宇宙の果てとかそういう意味じゃないことはすぐに分かった。

私は、倉敷の人の心の研究にひどく感銘を受けていた。
心理学とかそういうものじゃない。

人の感情を最大に引き出し、思いのままに操るでもなく、それでいて
目的は果たせる。

貫くという心を持たせ、その方向を促してやるだけ。その逆もしかりだ。

難しいことなのかどうかは別として、倉敷は随分長いことこの研究
を続けているようだった。

一度だけ資料室を覗かせてもらおうと思ったが断られた。

倉敷は資料を残さない。全て一読して処理する。

『僕の研究の資料室は頭の中だからね』

苦笑いしか返せなかった。ニコリともせず、まるでそれが当然なの
だというように言ってみせた倉敷は言葉を続けた。

『情報を仕舞うなら頭の中が一番良い。パソコンのようなものでは安心出来ないし、なにより起動させる時間がもったいない。頭に入れておけばいつでも取り出せるからね』

やはり苦笑いしか返せなかった。

倉敷は言う。

『世界はのちに滅ぶ。人間の手によってね。僕たち魔法士はそれを防ぐ研究をしている者が多い。僕のように魔法から救おうとする者、警察官や政治家になる者もいる。特に指定されてないから方法は人それぞれだ』

そんな正義の味方が、なぜ私に手を貸してるのかと聞くと、

『人ひとりが世界を滅ぼせるわけがない。どんなに力のある人間でも、それに抵抗する者がいる。それは僕自身もそうだし、僕が手を出さずとも問題はない。それに、君がやろうとすることでは世界は滅ばせない。絶対にだ。世界が滅ばないのなら、僕自身この世界には何も干渉する気にはなれない。それだけだよ』

別に世界を滅ぼすのが目的じゃないから、何も言い返さなかった。倉敷はとにかく正直だった。嘘をつかない。そして、恐らく倉敷っていうのも本名だし、やろうとしてることも本当だ。

私には理解出来ないことだったが。

ただ、研究してることに興味があつたし、それを貸してくれるというのだから私がここにいる理由はそれだけで十分だ。

人を操る術を、私は持っている。ただ、不完全だ。

倉敷のものとはそもそも原理が違うけど、倉敷の方がずっと扱いは難しく、それなのに私よりもずっと上手い。

長年研究を重ねてきたその差なのかもしれない。

そこまで考えていると、意識がはつきりしていた。自分の身体はやはり良い。

何もちらつかないクリアな意識は心地良い。

ずっと他人の意識にばかり干渉していたせいだ。普通の状態が、今はすごく良い。

ふいに、誰かが部屋に入ってきた。

とはいえ部屋に入ってくる人物は限られている。

ベッドと、備え付けのキッチンしかない殺風景な部屋に入ってきた

のは、やはり倉敷だった。

「どう？自分の身体は」

「うん。やっぱり良いね」

そうだろうねと、幼い笑みを浮かべる。

どうみても20代前半にしか見えないのだが、実際の年齢は分からない。

分かることと言えば、私たち人間の寿命など遥かに超えているということだ。

倉敷は、靴を脱いで部屋へと上がる。ここで朝食でも買って来てくれれば好感度も上がるというものだけれど、残念ながら手ぶらだ。

「よく分かったね」

「うん。そろそろだろうと思ってね。反応が無くなったのは昨日の夜。そのまま眠ったんだ」

「ふうん。それにしてもどこ行っただろ。咲は」

「多分浅香のところだね。彼女の結界に近づきすぎだ。彼女は自分から動くことは多くないけど、振りかかる火の粉には容赦ないからね。目障りだとか言ってるんだ」

アハハと楽しそうに話してるが、今さらつとヤバ気なことを言った気がする。

「・・・私、大丈夫？」

「さあね。それは浅香しただけど、さすがに首を突っ込みすぎたかもね。本部からどういう指令が下されてるかは知らないけど、方法自体は各自に任せるっていうのが本部からの方針だからね。まっとうな理由さえあれば、彼女は殺人も厭わないよ」

「うわあ。私ヤバイじゃん。あ、でも本部から私を殺すような指令がなければ、ここで大人しくしてれば大丈夫ってことだね？」

「まあそうだね」

うん。これで一安心だ。と思ったけれど、倉敷の言葉で私は目眩がした。

「でもね。本部が見破ってないとも思ってるのかい？」

冷や汗が背中を伝う。

「長門初谷の殺人。長門純の死。そして君らの、限りなく魔法に近い能力。これだけの材料があるんだ。本部を甘く見ちゃいけないよ」

「え？ちよ、ちょっと待って。どうして私たちの能力までバレてるの？だって・・・」

「残念だけどね。本部っていうのは、その名の通り、世界中の魔法使い、魔法士の本部だ。本部に所属している魔法使っていうのは、それこそ一声で国ひとつを潰せるくらいの力を持つてる。もちろんそんなことをするような奴が本部には入れないけどね。そんな彼らの生きてきた年月はあまりにも長い。そして、その長い年月の間彼らは、様々なことを見聞きしてきた。推理力という点で、人間が勝てる相手じゃない。無論、それ以外でもね。それでも、まだ足りないのさ。長く生きればいいってもんじゃないのは彼らも分かっているだろうけどね」

「うーん。なんだかよく分からないけど、私たちのことがバッチリばれてるってことでオツケー？」

「うん。オツケー」

誰にも知られてないと思った。だって、見られた人間の記憶は、私たちに关する記憶は消してあるのだから。

「はあ。どうしよう。ねえ倉敷、守って？」

ちよっと上目づかいで言ってみたりしてみる

「無理だよ」

あっさり言われてしまった。

「僕は戦闘に関してはほとんど素人だ。過去の大戦争のときだって僕は研究所にいたし。それに対して浅香は本業だからね。符術に関してはそうそう右に出る者はいない。殺される前に、消されて終わりさ」

うーん。これはやばい。でも少し考えて、良い案が思い浮かんだ。

「初谷を操れば？あいつなら死なないし」

「ああ。浅香の弟子と良い勝負したらしいね。結局お互い殺せないってことで終わったらしいけど」

「そうなの？まあそれはいいとして。どう？操って、浅香さんと戦わせる」

「それも無理だね。弟子に勝てなかったのに、その師に勝てるわけがない」

む。確かにそれもそうだ。

「それに物理的に死なないからといって最強なのとはわけが違う。

僕が浅香だったら別の次元に飛ばして終わらせるね」

「うゝんもう。どうしようかなゝ．．．。あ、そうだ!」

「また何か思いついたのかい?」

「うん。あのさ、浅香さんを直接操っちゃうってのはどう?」

うん。これは良い考えだ。

そう思ったら倉敷に笑われた。．．．ツボなのか爆笑している。

「アハハハ。君も恐ろしいこと考えるねえ。それこそ無理とか言う前の問題だよ。そんなことしたら、浅香にどんな目にあわされるか．．．。あ、でも確か戦争のときにそんなことがあったらしいね」

おーマジか。やっぱり私って頭良いね。魔法使いと同じこと考えるなんて。

「本当に?そんで?」

「うん。なんでも操ろうとした奴は、操る前に浅香に見つかって、不老不死の呪いをかけられて、地面に生き埋め」

．．．．．。

んんー。それは悪魔だ。なんというか、痛みを感じさせない拷問という点に置いては最上級だと思う。

・・・それ以前に、単純に最低だ。

「彼女だつて感情はある。だけどそれを揺さぶるのは簡単なことじゃない。操るのだつて一緒さ。精神力に依存する僕らの方法じゃあかなり難しいね。浅香がと言わず魔法使い全てに対して厳しいよ。100年生きられない人間は簡単だとして、その何倍も生きてきた者に対しては不可能に近い代物。武器には成りえない」

「じゃあ、浅香泉には勝てないの・・・？」

「うん。無理だね。それこそ同等の戦闘魔術を学んだ魔法使いを雇わないとね」

倉敷の言葉を聞いてピンときた。それだ。

「・・・魔法使い、雇えない？」

「うん。雇えるよ。浅香は割と敵が多いからね。才能を妬んでる奴らは結構いる。すごいよ浅香は。あれでまだ100年生きてないっていうんだから驚きだ」

うーん。100年生きてないのがすごいっていうのは私たち人間に

は理解出来ないけどね。

「そんでさ。雇える魔法使い、紹介してくれるの？」

「うん。いいよ。そうだね。候補はいろいろいるけど、弟にでも頼んでみようかな」

驚いた。弟いたんだ……。じゃなくて。

「弟さん、やってくれるの？」

「やるだろうねえ。相当浅香のこと嫌いみたいだし」

「良かった。で、お金は？」

「お金？」

「うん。だって雇うんでしょ？」

「ああ。そういうことね。お金はいらないよ」

「え！？うそ！？じゃあタダってこと？」

「それとはまた話が違うなあ。魔法使いにとってお金は報酬にはならないんだ。普通魔法使いが魔法使いを雇うときは、その雇い主の魔力を貰うんだ。その仕事の内容次第でその魔力の量も決まる」

魔法使いの力は、自分の中にある魔力で決まる。だから、他人から魔力を貰えば、その分強くなれるし、大がかりな魔法も使えるようになるらしい。

「えー。私魔力なんて無いよ。人間だもん」

「うん。だから君の場合は、というか人間からの場合は違うね。人間からの依頼の場合、報酬は両者が話し合って決めるんだ。もちろん単純にお金という奴も稀にだけいるし、死んだ後の魂をくれっていう奴もいる。まあ本当になんでもいいんだ。無償というときもあれば、とんでもないものを要求してくる奴もいる」

「それって怖くない？何を要求されるのか分からないってことでしょ？」

「まあそうだけど、君の場合は大丈夫だよ」

「どうして？」

「君は、自分の異常性に気付いているかい？」

異常性……。そんなのとつくだ。物心ついたときから分かったた。

「染色体の異常による、魔法に酷似した人間らしからぬ特殊能力。現代の科学ではまったく解明出来ない代物。いや、魔法使いにだって理解し難い能力だ。それを君は生まれたときから持っている。そ

れを提示すれば、誰だって食いつくさ」

「えー。そうかな？」

「そうだよ。実際僕だって調べてみたい。でもそれよりも興味があるものがあるからね。そつちを優先しているだけさ。・・・皮膚と髪の毛1本。恐らくそれが弟に請求される報酬だ」

うわ。超簡単。安い物だ。

「君のことは僕から弟に伝えとくよ。仕事内容と報酬。それから君の能力についても。」

「ありがと！これで一安心だね」

「浅香に弟が殺されなければね」

う・・・。その可能性があったか。

「浅香泉って、そんなに強いのか？」

「強い。そこら辺の魔法使いじゃ歯もたたないよ」

そこら辺の魔法使いという言い方に少し笑ってしまった。

「じゃあ弟さんは？」

「まあそれなりに。でもこのところ会っていないからね。どうなってるかな。でも一応過去の戦争ではかなり活躍していてね。兄としても誇らしかったのはよく覚えてるよ」

「へー。じゃあ強いんだ。・・・ズバリ勝算は？」

「言っていないのかい？」

正直、私はこの質問に後悔した。浅香泉がどのくらい強くて、倉敷の弟がどのくらい強いのかなんて分からないから、それを明確にしたかったただけなんだけど。

「0%さ。奇跡を信じて1%つてところかな」

倉敷は頬笑みながらそう言う。

これを聞いて決めた。私がやる。倉敷の弟には少し頑張ってもらって、そのあとの美味しい所を私が頂く。いくら浅香泉が強いからと言って、戦争で活躍する程の魔法使い相手に無傷何て事は無いだろうから。

傷ついたところを私が・・・うん。良い作戦だ。というかそれしかない。倉敷の弟が勝てないんじゃないじゃあ仕方がない。

「それで、日時は？」

倉敷が問う。

「なるべく早く。遅くても3日後」

「分かった。じゃあ明日にしよう。弟のことだから、きっと今すぐにとか言いそうだけど」

そんなに嫌いなんだ。

「ただ君も覚悟しといた方がいいよ」

「覚悟？」

「だって、君は浅香泉を殺そうとするわけでしょ？もし弟が殺されたら、次は君の番だ。言っておくけど、君じゃあ浅香には敵わないよ。弟は奇跡を信じて1%だけど、君の場合は、あらゆる可能性を信じても1%に満たない。いや、むしろ0%以上の可能性は見込めない」

「・・・分かってる」

「それでも良いのかい？」

「良いよ。構わない」

私は、死ぬのが怖くないから。

再生理論 第34話（前書き）

非常に遅くなってしまい申し訳ないです。

ただ本当に、絶対に完結はさせますので。めんどくさくなって適当に完結させるとかそういうこともしませんので、これからもどうかよろしく願いします。

再生理論 第34話

「・・・これで全部です。私の知ってることは」

「ふむ。そうか。すまないな。長々と」

「いえ・・・」

「この部屋は好きに使って良い。一応触れてほしくない物もあるが、そのくらいは分かるだろ？」

コクリと私は頷く。

「よろしい。さてと、そろそろお客が来る頃だ。私は別に構わないんだが・・・」

パチン、と指を鳴らした。

それとほぼ同時に、長門咲は目を閉じてソファに倒れた。

「少しの間寝ていてもらおう。先方がそう言うんでね」

長門咲を抱えてベッドに向かう。

そして寝かせたのとほぼ同時に、ガチャリと玄関のドアが開く音が

した。

「上がるぞ」

男の声だった。

「ああ。上がってくれ。丁度寝かせたところだ」

靴脱ぐ音と、床を踏む音。そして、ソファに座る音を聞いてから、浅香はそこへ向かった。

ドアを隔てた向こう側にいる人間がタバコに火を付ける音をかき消すように、浅香はドアを開けた。

「わりいな」

「忙しいんだな。今さらとは。いや、むしろ丁度良いかもな」

「丁度いい？何かあったのか？」

男の問いに、浅香泉は、いや。と言って首を横に振る。

「すまねえな。事件はまだまだ解決出来そうにない。そっちはどう

だ？」

「こっちはかなり進展してる。人間と魔法使いじゃあ差が生じるのは当然だが、中々頑張ってるじゃないか」

男の目の下に出来た隈をチラリと見てそういった。

「お前も刑事なんてやってないでこっちへ来れば良いのにな」

このタイミングで浅香泉はタバコに火を付けた。

「今さら何言い出すんだ。こっちの世界で生きていく。それが俺の決めた道だ」

勤めて落ち着いた口調だった。だが言葉には熱が籠っていた。

「大した覚悟だな。言っておくが、この事件を片づけるのは恐らく私たちだ。客観的に見ても、鼻肩目に見てもだ」

「それは分かってる。けどこれは俺なりのけじめだと思ってる」

これも、力強く言った。

「はじめ、か。その言い方だと刑事をやめるように聞こえるが」

「この事件が片付いたらな。俺もいい加減な年だ。刑事なんて職、俺には向いてないと思うながらも長々と続けちゃった。まあその半分は長門の野郎のせいだけだな」

男はタバコを一吸いすると、それを揉みを消した。
煙とため息が同時に出た。

「因縁なのか。運命なのか。偶然なのか。事件の内容以外でも色々複雑な大事件だな」

「そうだな……。まあ、大きな事件を解決してからの引退つてのも悪くねえかもな」

そう言つて、早くも2本目のタバコに手を付ける男。もとい刑事。
もとい石島雄介。いししまゆうすけ

「ところで」

浅香泉はタバコを消すと立ち上がり、キッチンへと向かった。

「動機の方は分かったのか？」

言いながら、コーヒーの準備をする。

「まだだ。本当に、動機だけは未だに見当もつかない。誰からも大した案が出てない」

「そうか」

手を休ませず、背中で声を聞いた。

「そっちはどうなんだ？色々分かってんだろ？」

「分かってはいるが、それを教えたところであまり意味がないだろう」

カチャリと、カップを石島と自分の座る前に置いた。

「そうだな。お前から情報を聞いてサクサク1人で解決、なんてこと出来ないからな」

「人間がそこまで賢くないことは人間が一番知っている。必ず“どうして知ってるのか”といつかは問われる」

コーヒーを啜る。頭を使うときは必ずブラックを飲むようにしている。

「めんどろだなと思うなよ。それが当然なんだ」

「分かってる」

カップに口を付ける。濃くもなく薄くもない。コーヒー特有の苦みが身体に染みた。

警察で分かっていることは、正直なところ殆どない。

長門初谷が犯人だという証拠はあるものの、いかんせん人数が多すぎる。別物だと思っている殺人事件が長門初谷の仕業ということも考えると、今現時点での被害者の数はハッキリとは言えない。

分かっていることは、長門初谷の家族構成。

姉が2人に、母親が1人。長門初谷が幼少期の頃、長門家はさまざまに質素な生活を送り、文字通り底辺の生活を送っていた。

そして母親が長女、長門岬に殺され、時効はまだ迎えていないものの、今年で15年目。時効は目の前だ。

その際、その現場を目撃した当時少年だった長門初谷はパニックを起こし、家を飛び出した。そして運悪く交通事故で命を落とした。とされている。

現在殺人鬼を称される長門初谷との繋がりは一切確認されていない

わけではない。死んだとされている長門初谷と、殺人鬼長門初谷の指紋が一致するという結果がでている。だが、その事件とは無関係であるというのが警察の見解だ。ただ、石島はそうは思わなかった。それは石島本人が、ある情報から、ほぼ100%の自身を持って確信を抱いていた。

だが、それを同僚や上司になんと説明すればいいのか分からなかった。説明しようにも、それを理解してもらうことがほぼ不可能に近いことだからだ。

まっとうな人間は、まっとうな人間しか信じてない。信じてくれないのだ。

だから、何かと理由を付けたがる。

おそらく魔法を見るやいなや、それは科学的に証明出来るものだと信じ込むはずだ。

そんな連中に、現象そのものを理解なんて出来るわけがない。科学で説明のつかない物を、どうすれば理解されるだろうか。

「もどかしい。いや、難しいな。私にはマネ出来んよ」

「まあ俺が選んだ道だからな。腹は括ってるつもりだ」

腹を括るのと、それをまかり通せるかはまったく別問題であることは両者とも承知の上だが、どちらもそんな無粋なことは言わなかった。

ただひとつ言えることは、簡単にいくような問題ではないということですだ。

お互いのカップが空になったところで、石島は腰を上げた。

「悪いな。忙しいところに邪魔して」

「構わない。どうせこのあとも忙しいんだ」

それを聞こえたのか聞こえないのか。玄関で適当に靴を履いた石島は、軋むドアを開けてこう言った。

「気を付けろよ」

ただ一言。それだけを言ってドアを閉めた。

「・・・まったく」

どっちがだ、と浅香泉は心の中で思った。

緩慢な動作で立ち上がり、カップを1つ、石島が使っていた方を流しに放り込む。

そして再び自分のカップにコーヒーを入れようとしたところで、ドアに備え付けられた“壊れているはず”のインターホンが鳴った。

『倉敷です。久しぶり。浅香』

落ち着いた声に、浅香泉はウンザリした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7717d/>

fate . . .

2011年6月16日17時48分発行